
災厄の種と能天気な転生者

青葉青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災厄の種と能天気な転生者

【NZコード】

N7786V

【作者名】

青葉青

【あらすじ】

ふつうの社会人が見知らぬ世界へ転生を果たす。

驚きながらも単純思考で第一の生を謳歌しようとしたが、その矢先、唐突に道は閉ざされた。

それでも平穀に、楽しくをモットーとした男は、放り込まれた魔導学院で癖のある者たちに出会い、その道を変えてゆく。

精霊に愛され、絶大な力を保有しながらもそれを隠し、使おうとし

ない転生者。

忘れ去られた知識を語り、謎めいた力を持つ少年。

家を再興させるために期待をかけられながら、果たせないかも知れない事に怯える青年。

課せられた義務を言われる前に自覚し、己を戒め、国の事だけを考える皇女。

- -

思惑と思惑は交錯し、物語は始まる。

第一話 移りこ（前書き）

直接表現ではないので大丈夫と信じて。

別に書いているものがありますが、そちらが停止するといつとは
ありません。

箸休め程度に書いています。

暖かい。

最初に思つたのはそれだつた。

はうたりとした気持で、何も焦らないでも聞くで、何も気にしないで良くて。微睡に囚わていればいいのだと教えられる必要もなく感じた。それで良いのだと。

あれ?
良くない?
今日、お預けだよね?

氣が付いて手を開けようとしたが驚く俺

月がめぐる

目が開かなかつた。それどころか声すら出ず、身体も動かない。

え！？ 何これ！？ どういう状況！！？ 金縛り！？ 金縛り！？
なの！？ 誰か説明して――――――！

じたばたもがこうとすれどもちつとも身体は言う事を聞かない、
それどころか違和感ばかりが返ってきて変な汗が流れた。

「あ…………動いたわ…………」

声が聞こえて、ピタリと動きを止める。やけにぐぐもつて聴ひ入
たが、確かに女の声だった。

ううそ……俺。連れ込んじゃつてる? なんてゆーか後々やつば

い事になるんじゃねー？

やばいやばいやばいやばいと焦るが、身体を動かす手ごたえはいつもと違つて、余計に焦つて狼狽える。

『芽生えたな』

今度は男の声が聞こえた。

うそー！ 何か男いますー！ 複数名でやつちやつたのか俺！？
やつべまじ覚えてねー！ 覚えとけよ俺！
今時そんな経験特殊稼業の人じやなきや出来ないつて！
まじもつたいない！ 本当もつたいない！ 流石日本人の心もつ
たいない！

最後は意味不明の思いを迸りつつ依然としてもがくもがくもがく。
でも動けない。

なんのこれ……

『ねえあなた、本当にやるの……？』
『……すまない』

夫婦！？ 夫婦なのお宅らー！？ なに人の家でやつちやつてんの
よー！

あ。俺もまざつたのか？ よく許したなー。俺だったら有り得ん。
嫁は俺だけのものだ。

『君は……』の子を

『はい』

子供？ じどもがいんの？ それはノーですよ？ やつちやだめですよ？ 情操教育つて言葉つてますかー？

夫婦だけならともかく他人の俺がいちゃだめでしょー。心にでつかい風穴あいちゃいますよー。

何とか動けないか、目が開けられないかと奮闘しながらも声に突つ込みを入れてみる。
でも声が出てないので届かない。

つてゆーかさー。あんたら変にもがいでてる俺をガン無視なの？
さつきから一人だけの世界つて気配がビシバシ伝わつてくるんですけどー。若干俺居心地悪いんですけどー。

まじで勘弁してくれと疲れを滲ませていると、実際今まで感じたこともないような疲労に見舞われて眠気に襲われた。

あー……なんか、すっげー……ねむ……つちやだめだからー！

はい！ しつかりして俺ー！ 眠つちやだめだから俺ー！ 今日打ち合わせが朝からあるんだからー！ お密さんとだからーー！

根性フル稼働させて睡魔と対峙する。

『あなた……』

『……ああ……大丈夫。さあ行つて』

ああ……男だけ残るとかつて……くつそ本当になんなんだよこの状況は！

俺はもやしだぞ！ 曰那とガチンコ勝負出来るか！ しかも地味

に動けないという縛りつきで！

死ねと？ 僕に死ねと言つていいのか？

『大丈夫。大丈夫よ。あなたは私が守るから』

？ 奥さんが何で残つて？ どゆこと？？

男ではなく、女の声がした。

『お母さんが必ず守るから』

『お母さんは若くありません。五十手前です。奥さんみたいに艶っぽい声してません。してたら怖いです。

まあ落ち着こつか俺。落ち着け俺。どーセ俺に言つてるわけじゃないんだ。

『お父さんの分も……守るから』

な……んだよ……もー……本当に。何で泣いて……

再び強烈な睡魔に襲われ、抗う間もなく意識は闇へと呑まれていった。

揺られ揺られ揺り揺られ。

ぬるま湯に浸かっているような心地よい微睡に身を任せ。
ゆったりとした気持ちで、何も焦らなくても良くて、何も気にしないで良くて。

微睡に囚わていればいいのだと教えられる必要もなく感じた。それで良いのだと。

よくねーよ。同じ事一回囁いて俺は学習能力がないのか？

我に返り、己につけてむ。

さあて？ これは確実に遅刻コースで？ 閻魔の怒りが俺にぶつけられると。

……そのまま寝てたいなー

現実逃避は良くない。すぐに思考の軌道修正を図ろう。

表層思考は遅刻という現実に打ちひしがれているが、本能の部分がこのままじやまざいと告げていた。

本能じやなくとも身体が動かないといつ時点で普通に拙いが。

ぶつちやけ、これ異常だよなあ。

目が空かないわ身体が動かないわ。どうなつてんだよ俺。
なんかぬつついから風邪ひかなくてすみそー……俺まつぱ？

……

まつぱだな。たぶんまつぱ。服の感触ねーもん。

あれから……つてーか記憶ねーからどれからかわっかんねーけど
少なくとも昨日は普通に戦闘服のまま寝たよな。力尽きて。

……

でも待てよ？ 間違いなく俺は体力が無かつた筈だ。それなのに特殊職業の方々と同じ経験が出来た、と？

無理じゃね？ 俺もやし。 無理じゃね？ 三大欲求の中で睡眠欲のみ極端に高いこの俺が。 無理だろ。

あー良かつた。 まじで夫婦とやつたんかと。 いやないって。 俺な
いって。 さすがにないって。 ないない。

はあーと溜息をつきたいが。 実際には僅かに口が開いて息も出ない。

そうなんだよな…… 息も出ないんだよなあ。 息出ないって死ぬよな？ 全然苦しくないけど。

息してる感じも無いしなあ…… 何で平氣なのか。

うーんと頑張って身体を動かそうとするが、緩慢ながら手と足が少し突き出せた 気がした。

ぽん

ん？

足に柔らかい感触があたり、なんだろ？と頑張つてもう一度動かす。

ぽん

やはり柔らかい感触だった。 しかも包まれている暖かさと全く同じ感じ。

.....ええっとおー.....

ゆ~りゅ~り揺れてる。暖かい。日開かない。身体がつま~く動かない。
でも息出せなくとも平氣。そういう~えば腹減らない。

これだけ状況が整えられて、導き出すせぬ答へつてこいおー.....

第一話 気づいてしまった

俺は拙い事に気が付いてしまった。

これは、あれだ。ほら、その、それ。それだよ。

認めてしまったのが怖くて曖昧表現で緩和を試みる。

……むりだー…………俺むりだー…………耐えられねー…………

緩和意味なし。

何に耐えると言えば、出産。

現状俺は胎児になつていてるとしか思えない。この俺でも恐ろしい程の眠氣と絶えず聞こえる鼓動の音。そしてぬるま湯につかっているような暖かさ。あと腹が減らない。

出産は母親が大変だというのが世間一般の認識。それは俺も否定しない。

否定しないが、それは出産時の記憶が綺麗に無いから言える事だらうと俺は考える。

……頭蓋骨変形させながら出でてくるつて…………どんなホラーだよ
チクシヨーーーー！

帝王切開を望むー　ぜひ帝王切開ーー　なにより帝王切開ーーー！
どうしたらいいんだー？　逆子なら帝王切開行なのかー？　それともくそ緒を前に絡ませたらしいのかー？

と、そこまで考えて俺は気が付いてしまった。

帝王切開出来ない環境とか……ないよね？

もし、仮に、万が一、出来ない環境で逆子だつたりへその緒首に絡ませてたりしていた場合は、間違いなく母子ともに大変な思いをし、最悪死ぬ。

…………死ぬだめ！死ぬよくない！てか苦しいの却下！

どうしたらいいの俺！どうしたらいいんですか俺！どうしたらいいのでしょうか俺！

返答なし。

うう…………せめて双子とかだつたり『よし、お前先行け』とかいつて蹴るなりして先行かせて、その後比較的楽して出るとかつて手も使えたかもしれないのに……

残念ながら、胎内には他に誰もいない。

ぶつつけ本番で特攻をかけるより他ないといつ、まるで太古の昔より定められてきた運命のような答えが待ち構えている。

あそーだ。自我があるから怖いんだよ。消せばいいじゃん。

…………

使ははずだつた資料の出来具合から始まって、関わっていた案件の進捗具合に客との合意の確認、作業依頼を作つていたはいいが出していない事を思い出し、ぐるぐるぐるぐる廻つていつた。

俺は仕事人間じゃない俺は仕事人間じゃない俺は仕事人間じゃない

心頭滅却火もまた涼しの偽変換のごとく唱えるが、それを唱えて
いる事自体が俺という自我を認識させている事に三十回程唱えたと
ころで気付いた。

第二話 待つたなし

待つてください！

待ってください。

待ってください

人間何事にも心の準備というものが必要なんですね。

特に俺のように纖細で極小の精神の持ち主にはそれ相応の対応マニュアルというものがあります。

それにのつとつて対応して頂かなければ後々にわたつて傷やら禍根やら他人が聞けば喜びそうなものですが本人にとつては本当に大事の事態になるのです。

つまらじりごとく事かと申しますと、

あ！ ちょ！？ これどうなんの！？ 俺どうしたらいいの！？
俺何週目！？ ちゃんと十月十日経ってるよね！？
めちやくひや意識はつきりしてるからちゃんと育つてるよね！？
医者いるよね！？ 何で外の音が聞こえねーんだよ！？

外の音が聞こえない理由は俺が焦り過ぎて気付いてないだけ。と、
後々解釈。

そもそも何で俺が胎児なんだよ！ 逆行しそぎだろ！！
あ～子供にもどつてー……って、思つたけど、これは戻り過ぎだ
ら……！

あつ！ ちよちよっと待つてお母様！ そんな追い出しそうなんて
ひどいわ！！ むづきゅい息子の心の準備といつものを！！！

動搖も焦りも全く無視され、たぶん子宮だらうと思われるが、そ
れが狭まって『ほらほら早くこなさい』と迫り立てる。
もはや気分は断崖絶壁でバンジーさせられる直前。後ろからどんどん
どん押されてる感じだ。

……つやじやーいーんだるーが。 やじやー……

覚悟を決めて、突つ張つていた手を身体に引いて周りの動きに身
を任す。

グッと頭に圧力が掛かり、とんでもトンネルをゆくくじと進んで

いく。

い……痛いっつーか、圧力が……圧力が……顔面が……

頭が出たと思った瞬間、つるりと身体も押し出され、なんかすごい勢いで顔やら身体やらふかれた。

「あぎやー！ あぎやー！ あぎやー！」

やつぱり出した瞬間は『おぎやー』だろ。と、それだけは用意していたのだが、誰の手だか知らない神速垢すりもどきにビビり過ぎてそんな考えもふつとび、氣が付いたら変な絶叫を出していた。

やついや息出来た……息の仕方忘れてたらどうがと……

本日のぬるま湯で身体を洗われ、ふわふわとした布でぐるまれていたのとひで俺はボンヤリとしてきた。

声をあげ続けるのも大変で、呼吸が落ち着いたらもう後はひで

も良い気分で、眠いとか疲れたとか思つ間もなくブラックアウト。元気な産声をあげてくれた我が子に安堵が満ちる。
乳母に取り上げてもらつた子を胸に抱き、その小さな手にそつと指を添わせると、ちこなちこな力でギュと握つてくれた。

どうしようもなく愛おしくて、何に置いてもこの子だけは守りたい誓う。

あの人に抱いてもらいつ事は出来ないけれど、その分も私が一杯抱いて愛そうと誓う。

まだ薄い髪は私と同じ青褐色。目元はの人そっくり。鼻は私だろうか。口はどちらだろう。瞳はの人と同じだろうか。これからどんどん大きくなつて、いつか私の背も超えて、あなたは幸せになるの。絶対に。

第四話 ふへへへ（前書き）

早速のお気に入り登録有難いります。
ちょっと早くしてビデオします。

これらの作品は基本コメディ路線でいく予定です。
主人公の性格がまあ、やうなので。

尚、断つておきますが、主人公＝作者ではありません。
……若干、いく若干、同じ匂いを発してくるかもしれません、が、違
います。

第四話 ふへへへ

俺は今悩んでいる。

ひつじょーに悩んでいる。

人生の中で最も悩んでいると言つて間違いない。

ただ今の俺の生存日数、^{人生}三日。

どーしよ？ どーしたらしい？

むしろどうしようもないってのが答えだとは分かっている。いくら俺でも分かっている。

色々な意味でどうしようもないと。生活の全てを人に頼らなければ生きていけない身体なのだから。

まあ生活面は赤子だから面倒見てもらつてもいつかつて事でいいんだけどねー

問題は『俺』はどうなった？ ってことだよな。

なんだか生まれ変わつてしまつたらしいので、濃厚なのは過労死だ。病気なんてしてないのでそれしか思いつかない。

都内に住む男性（二十七歳会社員）が倒れているのを男性の同僚が発見。病院に搬送されたが死亡が確認され死後一日は経過しているとみられた。死因は過労によるものと思われ

居た堪れない。居た堪れないよ。……親に顔向け出来ないよ。……
息子過労死つて、やりきれんだろ。

……やりきれないと思つてるよね？　おかん？　思つてるよね！？

まあ今更、ここに生まれ出でしまつてから思い惱んでも仕方がない。なるよになれというものだ。

おかんにはおかんの人生を面白おかしく生きて頂くとして、それを誰が祈らなくとも突き進んでいきそうだが　祈つておこう。出来るのはその程度だ。

あ。人生最大の悩みが終わつてしまつた。

どーしよ。暇になつちやつたよ。

「

うんうん考へていろといひに、青っぽい髪した今生のおかんが、ここにこしながら何事か言つて俺をだつこした。

顔立ちちははつきり言つてよくわからん。なんか度がきつい眼鏡をかけられていくようで色ぐらこしか認識出来ないのだ。

それでも青っぽいといつ事は今時の娘つこなのだろう。

なんで赤子はこうも視力が悪いんだ……これじゃあせつかくの若い母親を堪能出来ないじゃないか。

他で堪能してるといえばそうだが……いや、諦めるな俺。根性さえ出せば視力なんて！

…………みえ…………みえない。

ああ俺馬鹿？ 今ふと我に返つちやつたよ。何してんだよ俺。赤子が考へる事じゃねーよ。じょーよこんな赤子。

「 」

よくは見えないくせに、ここにこじこじのだけは分かる。これは親子の絆がなせる業なのだろうか。

暇なので一つ考へてみる事にしてみると、みせかけて、考へても答えが出ないのが分かつて、いるので止めにする俺。

それよりも、耳が悪いせいか何と言つて、いるのか聞き取れないのがもどかしい。

胎内に居たころには聞こえたのだが、外に出たら聞こえないといつも不思議な状態になつてしまつて、いるのだが、これも成長過程でつまく調整されていくだろうと結論が出て、思考が終わる。

……また暇だよ。もつちゅつと歯もつよ俺。

きつと『早く大きくなるのよー』とか、『机嫌ねー』とか『どうしたのー』とか言つて、いるのだろう。

全く理解できぬが暇なので、『あー』『つゅー』『つー』『うえー』『おー』と言つてみる。

あいつえむ。と発声してみたのだが、イが出来ない。口も出来てないが、まだ優秀な部類だらう。なんとなく聞こえない事もない。

俺、すいへない？ 生後二日ですいへない？

やめよつ。なんか恥ずかしい。

むつづり黙り込んだ俺を見て、おかんは首を傾げてトントンと背中を撫でながらいつもの子守歌を歌いだした。
眠くなつたと思ったのだらつ。

艶つぽいなと思つた声は子守歌を歌つときば、ものすいへ優しくなる。

めりやくせりや髪されてるなーと、恥ずかしくも素直に嬉しく思えるぐじこじ、満たされてしまつ。

無意識におかんに手を伸ばすと、さうりといた髪が手に触れて、その髪を掴む。ひっぱつたら絶対痛いよなと思つて、ひっぱらないように注意して、おかんを掴めている事に安堵して俺は瞼を降ろす。もつ向回田かになる習慣。

おかんといのつてこんなに幸せなんだなつて初めて感じた。本当は感じてたんだろうけど、大人になるにつれて記憶が薄れてしまつて、思い出せなかつたのだらつ。
ありがとうなつて、前の生で言えなくて今更悔しくなつてしまつた。

今度はしゃべれるようになつたら真つ先に言おうと思つ。何しろ子供だから恥ずかしくない。これでもかとこづべらこに攻めてやる。

ふへへへ。まつてりよーおかん~

最後はやつぱり変な思考が混ざつてしまつた気がするが、俺は気分良いままこへらつと笑つて眠つた。

第五話 待つたなし再び

「この子はよく眠る。

起きている時はあの人に似ている薄い紫の目を大きく開いて何かをじっと見ている。

ちゃんと瞬きしなきゃダメよと瞼にキスをすると、あやりあやりと笑って私に手を伸ばそうとする。

私の髪がお気に入りなのか、掴めると満足そうな顔をする。子守歌を唄うと決まって髪を掴んで嬉しそうな顔をして眠る。

この子が私の事を信頼しているのが全身から感じられて、泣きたくなるぐらい嬉しい。叶う事なら、やっぱりあの人にも抱いて欲しかった。この苦しくなるぐらい胸がつまる幸せをあの人にも感じて欲しかった。

おかんはときどき悲しそうな顔をする。

未だ視界はぼやけているが、テレパシー的な何かが俺にそう教えてくれれば苦労はない。ここにこしている時はよく分かるのだが、そうでない時はあまりよく分からないので四六時中ガン見している。

あんまり見ていると瞼にキスをされてしまうのだが、それはそれで良し。

むしろもつとー

赤子の武器を全面に押し出して愛嬌ふつまきまくつてみるが、残念な事にいつも何度もしてくれない。

おかん～そのうひが男なんてぐれて近寄らなくなつてしまつんだから今内だよ～ほりほり～

「あうあう」言ひながらそれでも必死に喰らひついていると、何故か唄いだすおかん。

おかん。あのね、俺は歌いたかつたわけじゃないんだよ。そりや言葉になつてないから何言つてつか分かんないと思うけどさ、俺たぶん畜痴だから歌苦手なのね？ だからまず歌じやないわけよ。

「

ピタリと口を開いた俺に、おかんが何事か言つ。やつぱし何言つてるか分からなかつた。だが、俺はその言葉のアクセントにピッタリときた。

これ、日本語じやなくね？

俺は生後……もつ何日日か分からんが、たぶん七日は経つたところで、よーやく答えに至つた。

胎内に居た頃には確かに声が聞こえて言葉が理解出来たので、てつきり というか意識する事もなく 日本語だと思つていたのだが、外に出てみればそれは難解な言語へと早変わり。

なんつーかこれはあれだな……完全に宇宙人のそれだ。何を言つ

てゐるのか以前に発音の仕方すらわからんねえ。

何語に似てゐるとかといふ発想も出ない程に聞き取れない言葉で先行き不安になりかけたが、赤子の学習能力は人生の中で最も高いと聞いた事があるので耳慣れするだらうと、こいつらを覗き込んでくるおかんにへらつと笑つて見せる。

青っぽい髪のおかんは今時娘っこではなく、きっと外人さんなのだろう。せめて英語圏なら多少は分かったかもしないが無い物ねだりは非生産的で疲れるだけ。おもろい言葉が使えるようになるのだと考えれば、むしろラッキーだ。

例えば、履歴書の特技だとか資格に英語を書いても

『あ、ふーん。そう』

で終わってしまうが、そこにリヴォニア語とかあつたらどうだらう。

『……え。なにこれ。使い道あるの?』

『使い道ですか? ご存じだと思いますが、世界には消えゆく言語があります。このリヴォニア語もそうなるかもしれない言語なのです。ですから、使う事自体がこの言語の使い道だと言えるかもしれません。本当は多くの言語を覚えて後生に伝えていければと思うのですが、覚えられたのはまだこれしかなく、これからも増やしていくと考えています』

『へえ、そつなんですか』

てな感じで掴みに最高だ。たとえその後、

『君はもっと進むべき道が他にあると思こますよ』

と言われても

『君の才能を生かす道は他に沢山あると思こます』

と言われても

『君はつりの社こおりあるよつな人間ではない』

と言われても！

掴みのみに置いて言えば最高だ　　と、思つてゐる。

なぜだ。なぜどこつもこつも憐れむよつな田で俺を見るんだ。

リヴィオニア語とか聞いた事が無いから適当だとでも思つたのか。
思つたのかええこいらおい。

あるよ。本当にあるんだよ。母国語としてはあんまり使われなくなつてしまつたらしいんだけど、やんとあるんだよ。

就職難でやぶれた俺を拾つたのは零細企業。てつぱりつぶれると思つたその会社は五年もの間持ちこたえ……どころか、ちやつかり社員数増やして世間の波風ものとせず、微弱ながらも右肩上がりに成長を続けていた。

うちの社長変人だけど。

変人だからこそあれだけの人間が集まつたのかなあ？ と思い出していると、不意に視界の中にきらりと光るもののが見えた。

良く見えないのでやつぱりガン見すると、きらきらと光るそれはおかんの頬を流れていた。

おかんはぼうっとしている様子で窓の外を見続けている。

……おとん。か？

今生のおとんは、まだ見てない。でもたぶん、見れないんだろうなあと俺は予感していた。

胎内で旦那だと思ったあの男の声、あのがたぶんおとんだ。
おかんはおとんと離れる時、泣いていた。泣いておとんの分も俺を守ると言つていた。

俺は精一杯手を伸ばして、おかんの頬を撫でた つもりで、実際はペちりと叩いてしまった

おかんはびっくりした顔をして俺を見る。
俺はその顔に、にへらつと笑つて見せる。

もうちよい時間はかかるけどさ、おかんは俺が守つてやるからそんな顔するなつて！

言葉に出来ないし、言葉も分からぬけど、「おおひおおひおおああ」と声に出して宣言する。

おかんは呆けたように俺を見ていたが、やがてくしゃくしゃっと顔を歪めると俺を抱きしめるように顔を伏せてしまった。

あ、あれ？ 逆効果？ うわちょ、ちよつと待つてすとつぶすと

つ
ふ！

細かく震えるおかんの身体に、汗じと流す俺。

おかん泣かせるとは 前おかんでは有り得ない事態だが
うにかしなければ！

ど

第六話 言葉わからず言葉こじあわせ（前書き）

第一話から第六話までは、導入部分です。
本編はこの次、第七話からとなります。

第六話 言葉わからず言葉にできず

この子の前では泣かない様にしていたのに、気が付けば頬を涙が伝っていた。

その涙を、この子は拭つよう手を伸ばしてきた。まるで慰めるように。

いくら何でもまだ首も座つていらない赤子が慰めるなんて考えすぎで、涙が珍しかったのだろうとすぐに涙を拭いていつも通り笑おうと思つた。

だけど、あの人そつくりな笑顔で笑いかけられて、

「つ

堪えていたものが堰を切つたように溢れてきて、抱きしめた。
泣いている事を悟らせないように、あの人「」とこの子を抱きしめるように。

早く涙を拭わなくては。早く笑わなければ。

思えば思つほど、喉の奥が変な音を立て目が熱くなり、震えてしまつ。

いけない。この子に気付かれてしまつ。この子に悲しい思いなんてさせてはいけない。

息を整え、目に力を込める。だけど心がどうしようもなくあの人を求めてしまつて悲鳴を挙げる。

どうしていないの……

どうしてあの人がないの……

どうしてあの人がないのよ……

答えなんて分かりきつている間にかけを繰り返してしまう。自分でも抑えきれない感情に支配され、もがけばもがくほどより深みに落ちてしまいそうだった。

「あーうー……あーあーうーー」

不意に、抱きしめた腕の中から細い声があがつた。苦しかったのだろうかと慌てて腕の力を緩めて見れば、眉をハの字に垂らしていた。

「あーうーうー……うーうえーおー」

消え入りそうな声に具合が悪いのかと焦つたが、どうやら違う様子だった。けれど「どうしたの?」と声をかけてもずっと声をあげ続けていて、どうしたのだろうかと思つた時、ふと閃くものがあった。

それは親の欲目かもしれない。他の者が聞けばそつは絶対に思わないだろ?。けれど、私には聴こえた。

「とーとーとるきのおじいさん
いつも仲良しくが口癖で
ここにこ笑つてみんなを見てる
とーとーとるきのおばあさん

いつもおつたを照つては
みんなをここにこ笑わせる「

私が一緒に思つと、それまでハの字にしていた眉を一瞬で解き、
ぱあつと明るい顔で笑いだした。

「の子は……」

「……あり……が……」

私は言葉につまつてしまつたけど、代わりに一緒になつて笑つた。
涙も出てしまつたけれど、きっとこの子はそれでもいいのだ。うつ。
一緒に笑えたらうつとそれで。

やつた――――――.
やりました――――――.
ここにきてやつました――――――!

脱音痴――!

だつて伝わつたんだもん！

そうとしか言えないだろこれは！

今まで俺を馬鹿にしていたものどもめ、泣いて詫びるがいい！！

伝える術なんぞ無いが——」——リンクで語ひそく——

苦節一十七年ガラス七田が八田。長かつた。

子守歌と気付いてもらえるかどうかは賭けだったが、俺は見事その賭けに勝った。

笑っている。

たぶん初産で、しかもおとんが居ないという環境はおかんにとって相当きてるものがあるだろう。
俺だって嫁さんなしで子供育てると言われたら、そりや育てようとするけど不安で仕方ないと思つ。

それに子供を産んで一週間は身体を休めると聞く。

おかんはそれが出来てないんじやないかと思つ。俺の世話をつきつきりでやつてるのもあるし、おとんの事で休めてないよつた気がする。

いじはひとつ、寝る前にでもまた唄うかな

そんな計画を立てていると、いきなり視界が高くなつて俺は驚いて手足を引っ込んだ。

つて、おかん。いきなり立つたら貧血でふらつくだる。

ああほら言わんこつちやない、壁に寄り掛かつちやつて、俺今は腹空いてないし衛生状態も良好だから動かな……

視界は端に、人影があった。

時折ここに来てはおかんの世話をしているおばちゃんではない。

そのおばちゃんよりももつと背が高い。

もつと良く見ようとしたらおかんが俺を抱き込むようにしてそいつから隠したので、俺の視界はおかんだけを映した。

「！」

「！」

おかんが声を荒げている。

対する声は、男。抑揚が無くて平坦な声。感情の起伏が全く感じられなくて、息をしてる相手なのか疑いそうになるぐらい変な感じがした。

それはともかく、おかんが声を荒げるなんて生まれてこの方一度もなかつた。それにこの全身で拒絶しているような態度には鬼気迫るものがあった。おかんに依存している俺はそれに引きずられ、顔が強張るのが分かる。

「！」

「！」

「！」

「！」

「！」

「！」

おかんと男の喧嘩？ が現在進行形で繰り広げられている。

俺はと言えば、おかんの怒声が怖くて怖くて、がたがたしてるだけというチキンハートを披露していた。

いやー、赤子と大人つて想像以上の体格差だ。

子供の頃つて大人が大きいなって思つてたけど、赤子ともなると

威圧感は生半可なものではない。

子供の前で喧嘩はやめて」とか考えていると、こきなりおかんが走り出した。

えー? どしたのおかん!?

顔を見上げよ!としたら、ドンドンと衝撃が身体を伝へ、おかんは倒れた。

倒れながらも、俺を抱いた手は離さず胸の中に抱き込んだまま倒れた。

「

おかんが何が囁いて、よろよろと身体を起こし、立ち上がれないのか片手で俺を抱いて、片手で床に爪を立てて立っている。

おかんの身体の向こうから足音が近づいている。

え……と? ちょっと……俺、分かんないんだ
けど……

おかんの薄いピンクのワンピースが、真紅に染まってゆく。

何度か嗅いだ事のある鉄さびの匂いが俺を包む。

足音がどんどん近づいてくる。

俺は、男を見た。

必死に逃げようとするおかんの腕に、緑っぽい髪の男を見た。

お前……おかんに何した。

がくっと、視界が低くなる。床についていた腕に力が入らなくな

り、肩をぶつけるようにして倒れこむおかん。だけどやつぱり俺は手放さなくて、腕の中に抱えたまま大事に大事に身体に寄せる。足音がすぐ傍まで聞こえ

近寄るな

俺はこの身体になつてから初めて人を睨みつけた。

……お前を……何した?

……お前や、何したの?

……何したのか…………つて、聞いてんだよ

!—!

男は足を止め、俺を見た。

喉の奥から低い咆哮が迸つた。そんな声が出るとも思わなかつたし、赤子が出していいような声ではなかつた。

だけど、俺はそんな事にも気付けず男を睨みつけ獸のよつた咆哮を挙げた。

頭が真っ白になつても、この人の声だけはどうとか届く。
視線を動かせば、にっこり笑つてるおかん。
瞼にキスを落とされて、俺はおかんにつられてよつよつと笑
つた。

おかんの顔の向こうで、男が背を向けるのが見える。

「…………」

なんで……だよ……

「…………」

なんで日本語じゃねーんだよ……

「…………」

おかんは笑つたまま、震える手で俺の頬を撫でる。
けれどその手はいつもと違つてヒヤリとしていて、囁く声も段々
と小さくなつて。

「…………」

なんなんだよこれー！

なんで俺はあんたの言葉が分かんねーんだよー！

冷たくなつていいくおかんの腕の中で、俺はおかんの髪を掴んだ。
さらさらしていた髪は、血糊に濡れて手にへばりつく。でも、おかんの髪だ。

なんで俺は赤ん坊なんだよー！

なんであんたを守れないんだよー！

「……」

声が聞こえなくなる。おかんの藍色の瞳がゆっくりと閉じられる。

……いわせるよ……ありがとうなつて……いわせてくれよ……
何で言えないんだよ俺は……何で……なんで赤ん坊なんだよ……

「黙田、おー……」

「やとなの田々……以價わなー……」

「だこ……じつめうい」

「…………」

「ねー……キハ//ナ」

「燐こー……ぬ」

第六話 言葉わからぬ言葉であります（後書き）

基本的にコメティです。

基本的に……基本的に……

まあ次の話から本編スタートなので。

第七話 流れゆく（前書き）

ここから本編です。

第七話 流れゆく

草の上に身体を投げ出した俺の視界を埋めるのは、エリオでも続く蒼。隔たりなどなく流れる雲はさながら自由の使徒の「」と。手をかざせば、青年期に突入した角ばった手が視界に入る。

よく愈つよなあこの身体……

前の身体はザ、モンゴロイドって感じで小さかったのこのもあつたつ追い越してしまつとは……

高校の時から伸び悩んだ身長をやべつと超えた時は遺伝子の力を強く感じてしまった。

もつとも周囲も身長ある者ばかりなので俺がのつぽもとこうわけでもない。

……ん?

蹄の音が聞こえる。馬車を引く音ではない。行商でもない。行商はもつと重たい感じだ。これは軽い。

「あ……やつこや言つてたな。ビツつで屋敷中が騒がしかつたわけだ」

めんどく

「」と複数を打つて、俺は晴れ渡る空に背を向けた。

あー田舎でこーーぬくくー

「やつぱつ」にいたか！

気持ちよく寝入ろうとしていたら、息を弾ませ木々の間から「

となく俺に似た男が、案の定飛び出して來た。
20代前半の若者で、俺より青味の濃い青褐色の髪。日本人の感性を未だに持つている俺からしてみれば彫の深い顔立ちでその癖あんまり「つくもない、綺麗どころが好きそうなお姉さま方にもてるだろう姿をしていてるという、視界に入るだけでむかつく奴。俺の従妹ことおかんの兄貴の息子、グラン・パージエス。御年二十四歳。

グランは寝転がっている俺の隣に腰を降ろした。

座んなよ。誰が許可した。

「私が来ているのに気づいていたんだろう？」

俺の無言のアピール、通称『背中語り』をスルーして声かけてくるグラン。

「屋敷を探しても見当たらないから、もしかしてと思つてみたらやつぱりだつたな」

スルーされたのでスルー仕返すものの、意に介さない。

「どうだ？ みんな元気にしてるか？」

誰が答えるものか。人の昼寝を邪魔する輩に。

「ああ、そうだ土産があるんだ。都ではやつててる粉菓子だぞ」

俺はむくりと起き上がり、差し出されていた紙包みを受け取りガサガサと包みを開けて、出てきた円形の焼き菓子をほお張った。

そんなの……そんなの出されたら……起きないわけにいかないじゃないか！

「全く。変わつてないな」

仕方がないなこいつは。と笑うグラン。

仕方がないないと俺は眞面目に思つ。こいつは糖類がどれほど貴重か分かつていな。

ここでは純粹な糖類を手に入れようとなればそれなりの金が必要になる。

通常甘味として使用されているのは多くが蜂蜜で、あとは果実と根菜類が少々。砂糖はほとんど手に入らない。

こりやかなり物流が限られてるところに生まれたなあと勘違いしていた俺は、何とかその手の流れを作れないものかと地方領主をしているらしいおっちゃんの書架を漁つて、まずは地理と直近で代用品になる植物が無いか調べる事にした。

周りの大人に聞かず自分で調べたのは、何の因果かよくある補正という力の働きなのか俺に変な力が付加されていて、それを知らずに俺は皆そなへつて純粹に思つていた　言つたら怖がられてしましましたとさ。

まあ考えてみれば日本であろうとなかろうど、変な力があつたら不気味なのは違ひない。

そういうわけで一応おかんが現領主の妹かつ、現領主がシスコンだつたから生活は保障されたが、それ以外はなるべく触らず近づか

す。

俺は祟り神か！ と突つ込みそうになつたが、 じじの言語に『祟り神』なるものはなく、 言つても意味が通じないので、 まいつかと好き放題の単独行動権を手中に收める事となつた。

そういう経緯があるので、 俺が書架で調べものをしても誰も気に留めない ところが、 留めないようにしている？

俺は「」や「」など田舎じをつけていたものを探し当て、 よしよしと己に満足しながらさつそく調査だと張り切つた直後、 打ちひしがれた。

ち……ちつがーう！ いやまで、 それ以前にこれどこの地図！？

もうね、 三歳児が地図広げて真顔でブツブツ言つてる姿はシユールの類に入つっていたと思う。

でも俺としてはかなり必死で、 必死で上下さかさまにしたり、 離して見たり近づけてみたり、 他にも地図は無いのかとやうに漁つてみたりして、 結論にたどり着いた。

たぶん、 地球じゃない。

この時はまだ望みを捨てていなかつた。

けれどこの後、 国土の歴史が載つていそうな本を開いて確定に変わつた。

俺が生まれた国はセントバルナ王国。 そう、 王国。 しかも、 開国三百年は下らない由緒ある王国。 使用される言語は大陸言語の一つと言われ、 それを使えればとりあえず大陸内の主要国であれば不便しないと記されていた。

うちの言葉つて、 余所でも使えるんですよ すじいでしょ

とこう国自慢はどうでも良かつた。

問題は、そんな国際的に認識されていそうな国を俺が知らないといふ事だった。

理解した瞬間頭を抱えて蹲ってしまった。異世界に転生とは、我ながら意味不明な事をしてしまったと。

輪廻転生の思想を完全否定するだけの材料を持つていなかつたので、転生のそれ自体は胎内に居た頃から受け入れていたのだが、さすがに異世界ともなると受け入れがたくもなく、俺は五秒程で復活した。

何しろ悩んでも腹は膨れない。

要求しなければ飯は貰えないでの、成長途中にある身としてはそこだけは押さえなければならない。

うだうだやつている暇があるならいはずれ放り出されても生きていけるようにしておuka、それとも何とかして現状の環境を改善しなければならない。たとえそれが異世界だろうと何だろうと変わりはない。

ま。なんとかなるっしょ。

で、現在進行形一ートの俺。

そんな俺が高級食材兼滋養栄養剤である砂糖を手に入れられるわけもない。

糖類が取れないと俺の手は震え脂汗だらだら流し幻覚に襲われる事はないが、血走った目になる。糖類探して。

それを知つてなのかグランは新たに出来た幼い弟、つまり俺に菓子の類をせつせと運んできた。

本来なら俺が菓子を食べられる機会などないのだが、この男が離

に餌を与える親鳥の「」とへ運んでくるので禁断症状を出す事なく過ごせている。

有り難いのは間違いないが、礼など言おうものならしてやつたりの顔をするに違いない。それは何か癪に障るのでふいと背を向ける。が、苦笑混じり「」一つ差し出された包みを抵抗なく受け取る自分がいた。

あ……俺はなんて意志が弱いんだ……「」やつて餌いならされてるつて分かつてゐるのに……手が、手があ……

「屋敷に戻ればまだまだあるぞ」

指についた粉砂糖をいじきたなく舐めながら、グランの言つ屋敷に視線を向ける。

今頃、屋敷では出来る限りの準備をしてグランを待つてゐる事だらう。

次期領主と言つても、パージョス家は貴族の末席。出世など相当無理をしなければ出来ない位置にある。

それをグランはやつてしまつた。今は中央で仕事を任せられ、出世頭の頭目として話題の人となつてゐる。

パージョス家にとつてみれば、期待の星。神様仏様グラン様状態となつてゐる。

「せつかくお前が戻つたんだ。無粋な真似はしたくないね」

「何を言つんだ。お前の家なんだから無粋も何もない」

まあ住処には間違いないな。と、思いつつ欠片を口にほおりこむ。

「みんな元氣にしてるよ。エイナは大きくなつた。少しだがしゃべ

れるようになつてこる「こじら」

「もう」ながら言へば、妹の話題にグラントは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ハイナが？ それは楽しみだな。父上はどうしている？..」

「変わらずだ。お前の出世を自慢してまわつてこる。下手に敵を作りだけだつてのに」

「ははは。まああの人はそういう人だからな。で、お前はどうしてた？」

「俺？」

「そう。お前。毎日こんな所にいるわけじゃないんだ？」

「べつに~」

「いつも平らげ、再び寝転がる。

「何にもしてねえよ。晴ればいいで、雨降つてたら地下室で寝てる」

「またお前は……地下室は牢獄なんだからやめないと言つてこるだろ」

「いいじやん。誰もこないし静かでいいとこなんだよ」

「……静か、か

意味ありげにつぶやくグラント。

「お前、屋敷を離れようとは思わないのか」

「なんで？」

「居心地が良いとは言えないだろ」

「そつか？ 三食毎寝つきの待遇はかなり居心地がいいと思つた

「やつやつて誤魔化すな」

向けられた真面目な聲音に、俺は口を開いた。

「お前が留まるのは私の為なんだろ？ じゃなら中央の奴らの田も
届きにくい。ここに居る限りお前の存在は隠される。私の弱みにな
らないよう、隠れているんだろう？」

はじまつたよ……自意識過剰モードきたよ……
これ始まると止めるの大変なんだよ……

「なに自意識過剰な事を言つてるんだか」

一先ず恒例の切り替えしに心底呆れたという顔プラス半眼を向け
てみるが、グラントの真剣な顔は小搖るぎもしない。
仕方がないので、毎度毎度言つてると分かっている繰り返しを実
行する。

「俺程度がお前の弱みになるかよ
「なりつるさ。お前の力はそれだけの意味を成す」
「はつ。地獄耳程度がか？ 中央は噂好きのおばあちゃん集団かよ
「……すまない」
「だから… お前の為に居るわけじゃなつて言つてるだろーが
「そうだつたな……」

俺が心底面倒そうにしていると、グラントは固い表情ながらもそ
のうちに終いにする。いつもなら
この時は違つた。

「やつぱつお前は」ここに留まつていたらいけないな
「あん？」

グラントは微笑み、唐突に立ち上がると、寝転がっていた俺を無理やりに立たせた。

「これから私と一緒に屋敷に戻るんだ」

「はあ？ やだよ面倒くさい」

「そうか。 フェイ」

三十代程の男が現れ、面倒くさがる俺の後ろに立った。

「な、何だよ。 力ずくか？」

「まあそうだな。 但し、屋敷にではない

「は？」

「フェイ。 例の場所へ。

キルミヤ、お前にはじめから学院へ行つてもいい

「はあ？」

「すでに学院側には話は通してある。 パージェス家の者が世話になる、と」

「え？ 何言つちやつてんのこいつ？」

「いや、まじで何言つてんの？」

「をいをいをい。 無理だろ。 第一俺何も知らないぞ」「慌てる事はない。 お前の事を知る者は誰もいない」

呆れかえる俺に、グラントは無駄に自信満々に言い切った。

「じゃねーよ。 俺が何も知らないって言つてんだよ」

「なにしろエントラス学院はここから馬を飛ばしても三日は掛かる場所だからな」

「人の話聞けよ」

「ああ、すまない。父上には私から話しておべ。キルミヤは早く学院に行きたくて挨拶もそこそこに行ってしまった。とね」「無視かよ。ってかエントラスって魔導学の最高峰じや……」「なんだ知っているんじやないか」「そこだけ聞くなよ！」

「やっぱり縁があるんだな。よし、フェイ

グラントの指示でがしつと俺の腕を掴むフェイ。

「え……」

嫌な予感しかしない俺をよそに、フェイは生真面目な表情を崩さず主に対して頭を下げる。機敏に踵をかえした。むろん、俺の腕は掴んだまま。

「うおっ！　ちょ……ちょっと待て！　まじか！？　まじでか！？」「冗談抜きで今からか！？　おいおい。フェイさん？　俺何も持つてないんだけどー」「用意は既にしてある」

言葉通り、少し歩いた先に一頭の馬が木にくくつづけられていた。

「あー……準備のよー事で。さすがグラント

もはや乾いた笑い声しか出なかつた。

さよなら俺の三食毎寝付き自堕落生活（……………）
さよなら俺の平穏……………

第七話 流れゆく（後書き）

お気に入り登録に加え、評価もつけて頂きありがとうございます。
なかなか書き方の指標がないので、指標に使わせてもらいます。

追記・国名を間違えていました・・・

さらに追記・国名どころかキャラ名間違えてた・・・指摘ありがとうございます！！

第八話 出会いがじらヒノックダウン

あとこくつ残つてこむのだろう?

小さな袋をほどき書籍を机の棚に並べる口の手を見つめ、小さく息を吐く。

考えてはいけない。

疲れを感じる事など許されない。

まだだ。

まだ歩みを止めてはいけない。

歩き続けなければならぬ。

この使命が終るまで。

立ち止まる事も、力尽きる事も決して許される事ではない。

託された願いと思いに、必ず応えなければならない。

もう、いくら手を伸ばしても届かぬ場所へと逝ってしまった皆の為に。

“……”

不意に髪が風に遊ばれるように乱され、僕は驚いて口を開けた。白い髪がふわふわと揺れている。窓は開いていない。ドアも閉まっている。

“……クスクス……”

わざなみのような笑い声が耳に伝わる。

それはここ暫く出合つていしない懐かしい声。遙か昔には常にその声と共にある事が出来た。しかし、あの時から声は去ってしまった。

今の「」には唯一と聞える共通の時を抱く存在のはずだったのに。

「精霊が……どうして」

僕は惹かれるようにドアを開けた。

ガン

「え？」

空けた瞬間、何だかすごい音がして大きなモノが床に落ちる音がした。

ドアの向こう側を覗いてみると、青褐色の髪をした青年が突っ伏していた。

「え……」

まさか、ぶつけた？

慌てて青年に駆け寄り肩を叩いた。

「あの、大丈夫ですか？」

反応は無く、それどころか触れた手から青年がひどく体力を消耗しているのが伝わった。

額と首筋を確認すると、焼けるように熱い。意識も無く息は浅く速い。

“キルミヤ……キル……ミヤ……”

「キルミヤー、この人の名前？」

空に向かつて尋ねると、再び髪が乱される。

「キルミヤっていうんだね。君たちがこの人についてきたの？」

“キルミヤ……ずっと起きてる……家出でからずっと……疲れてる……休ませて”

一瞬、迷う。

今の自分と関わる事は誰であれ、不幸にしてしまう危険が高い。だが、田の前で倒れているこの状況を放置する事も出来なかつた。

「分かつた」

僕は両手を胸に重ね、そこから白く淡い光を生み出し青年の額に押し当てる。

光が額に吸収されると、青年は小さく身動きをした。

「う……」

「大丈夫ですか？」

青年の意識はぼんやりとしている様子で、焦点が定まらず瞳が揺れていた。

「僕に捕まつて歩いてください。療養室まで行きます」

青年の反応は鈍かつたが、腕を肩にまわすと理解したのか壁に手を付きながらおぼつかない足で立ち上がってくれた。

年は十七か十八か。体格差があるので、重みに耐えられるよう

知りつつ

に力を入れたが思つたよりも軽い重みに違和感を感じてみれば、青年の身体を必死で支えるように風が舞つていた。

なるほど。ここまで来れたのも彼らの支えがあつての事だらう。精靈に愛されし存在。まるで過去の自分のようだ。いや、過去の自分よりも多くの精靈に愛されている。

こんなにも愛されるとは、いつしか時の狭間に消えてしまった縁の聞き手のようだと思いつつ、学院の中に立てられた病人・負傷者を受け入れる療養室へと運び込む。

「すみません、この人を看てもうえませんか」

戸を叩き中に入ると、薬品の匂いが広がってきた。

「あら。見ない顔ね。今年の新入生?」

白いローブを着た背の高い女性が歩み寄ると、軽々と青年を肩に担いでベッドに放つた。

雑なその対応に、まわりの精靈達が大ブーイングをはじめ、女性の髪をひつぱつたりめちゃくちゃにしようとするが、何らかの護符でも持つているのか触れる前に弾かれてくやしそうな声をあげていた。

「あの……あまり手荒な事は。その人、状態悪いと思うのですが」「え? ああそうね。この熱、いつからか分かる?」

僕は視線をそつと走らせた。

“夜になる前の夜の前”

「一昨日ぐりいからだそりです」

「あら。よく歩いて来れたわね」

「それは……廊下で倒れていましたから、力を振り絞つたんだと」

「このまま下がらないとまずいわね。でも残念。解熱剤が今無いの

よ

「え……」

女性はこきなりローブを脱ぎ捨てると、草色のマントを身体に巻きつけた。

「夕方までには戻つてくるから、ようじくね」

「え！？」

「汗かいてるから拭いてあげて、そしたらさつちの棚に着替えあるからそれを着せて。

毛布は重ねて使って、額は冷やしてあげて。あと熱が上がってきたらわきの下も冷やしてあげて。少しでも意識が戻つたら水分補給ね。じや」

「あの！」

女性は止めるのも聞かず、出て行ってしまった。

僕は久しぶりに困つたと思いながら部屋の中を見回した。タオルは山のよつに用意され、着替えも言われたとおりの場所にあつた。

青年のほかに病人はおらず、ひとまよ彼だけを看ればよさそうだった。

「関わりを持たないよつこじよつと決めているの……」

桶に水を張りタオルを浸して絞り、汗をふき取りながらついついため息が零れる。

“キルミヤキルミヤ……”

精霊たちは心配そうに青年の周りを飛び交っているようだった。田にすることは出来ないが、ここまではっきりといたるところから声が聞こえるので、よほど多くの精霊が部屋に集まっているのだろう。懐かしい彼らの気配に、僕は昔のように耳を傾けた。その瞬間、

「あははっ！」「何よ笑わないでよー。私だってこれからなんですかね」

「何やつてるんだ」「すみません」「これはどうしまじょう」「それはそつちに、明日の朝使おつ」「厄介」と……」「またこの時期か」「さてな。誰が狙うのやう」「期待されるべき人間がいるのか」「ガーナス家の三男か」「名門とはいえ、実力やいかに」

「…」

僕は驚いて反射的に同調を止めた。まさかという思いで辺りを見回す。

「今は……君たちが……」

“キルミヤ、さみしくない”
“キルミヤ、一人、でもさみしくない”

浅い息を繰り返す青年を見れば、眉間に軽い皺がよつていて、よく見れば、口元が小さく動き何かを呴いていた。

「ひむかー

僕は、もう一度辺りに視線をおくり首を横に振った。

「今はとても疲れているから、少し静かにしてあげよう?」

“ダメ、キルミヤをみしい”

「大丈夫だよ。君たちがいるだけで、君たちの温もりが伝わっているはずだから。ね?」

“……ほんとう?”

「うん。それに、僕も伝えるよ。君たちがずっと傍に居てあげている事」

“ほんとう?”

「約束する」

“…………しづか、する”

「ありがとつ

僕はほつとして、もう一度念のために耳を傾けてみた。

今度は、何も聞こえてこなかつた。

はじめて聞こえた、音と声の嵐が嘘のようだ。

青年の額に刻まれていた皺が、綺麗になくなっている。口元の
しか呼吸も少し落ち着いている。

「熱、下がらないな」

額に新しい水に浸して絞ったタオルを乗せる。

首筋に手を当てれば、やはり熱い。

「普通の風邪ならあれぐらいの癒しで十分なんだけど……」

「この人の疲労はいつたいどれだけあるのだろうか……」

心配そうに囁く精霊たちの声。

そう、自分もこの声に囲まれていた。怪我をするたび、病氣にな
るたび。

その心配する声は母の温もりを知らない穴を埋めてくれた。

“ねえ、キルミヤをたすけて”

「え？」

“ じつてる。キルミヤたすけれる”

「僕は……その、あまりこの力を使う事は」

“ どうして、どうして、たすけれるの”

「うん……そうだけど……」

“ たすけられないのに、たすけられるのに”

非難の声に、僕は瞳を閉じた。

精霊の声に重なつて少女の声が蘇る。

助けられるのに、どうして助けないの？

あたしじゃ助けられないのに、どうして助けてくれないの？

過去の悔恨がいまだにこの心を支配しているのか。

僕は己の弱さに自虐的な笑みを浮かべ、両手を胸に重ねた。
そこからゆつくりと両手を放し、白く淡い光を生み出す。
やわらかで暖かな光は先ほどより大きめ、青年の身体を包み込ん
だ。

第九話 世話の掛け合い

天上が見えた。

ぼろ屋敷の天上ではない。
野宿の夜空でもない。
安宿の低いそれでもない。

「……あつれ？」

身体を起こそっとした瞬間、全身に鈍い痛みが走り声無く呻き枕に頭を落とす。

「気がついたのかい？」

女の声に視線を動かせば、白いカーテンをめぐり背の高い女が覗いていた。

栗色のくるくると癖のある髪をボニー・テールにしている。全体的にスレンダーだが、残念な事に露出は少ない。ズボンに手首まであるシャツと、その上からホルスターの様な革っぽいベストを着ている。俺の居た地方ではあまり見かけなかつたが、話に聞く冒険者の姿に似ている。

俺……魔導学院に来てたよな？

確かに着いて、唯一主人主義鬼畜偏愛男のフェイに放り出されて
——どうしたつづけ？

「その子に感謝しな。夜通し看病してたみたいだ。

あたしは帰るのが遅くなっちゃって、戻つてみればあんたの熱は

けろつと下がつてたんだよ」

その子？ と、見ればベッド脇にしつぶして眠つてゐる白い頭の子供がいた。

「誰、こいつ」

「あんたの同室の子だよ。キルミヤ・パージュス。今をときめくグラント・パージュスの弟君？」

「あん？ 何だよおばさん。何で知つてんの。あんた学院の関係者？」

びきつ

女の額にまぎれもない青筋が浮かんだ。

「おーばーちゃんー？？」

「あ、ちよ、まつて？ 僕つて結構な重病人？ だよね？ だよね？」

「そんだけ喋れる重病人がいるか！？」

バゴンッ！

持つっていた盆らしき物で容赦なく殴られた。

「いつてー！ うわ！ ひどー！ 身動き取れない病人殴るなんて！ なんて怖いんでしょう。ふるふる」

「…………お前、本当にグラント・パージュスの弟か？」

「ま！」とに遺憾ながら

沈痛な面持ちといつのを作つて言つてやると、何故か女は笑つた。

「お前は随分と兄とは違う性質のようだな。あらうまあらうでなかなか面白いが、お前もこの業界じゃあ、あまりみかけない性質だ。

ま、せいぜい頑張ることだな。歩けるなりやつと部屋に戻れ」「え～ここで寝てたら駄目なの？」

「」は病人と負傷者の為の部屋だ」

「俺、まだその範疇にあると客観的にみても思つんですけど……」

「お前の回復力なら問題なかろう？ また倒れたなら、そのとき見てやる」

「わー……鬼発言だー」

「何か言つたかい？」

「何も……」

「よろしく」

俺つてこんな扱いばっか……

泣いて見せるが、女は見てなかつた。
ちょっとむなしかつた。

「……はー。やれやれ」

俺は全身に力を入れ、寝返りをして腕をつき何とか身体を起こした。

ベッド脇の水差しにそのまま口を付け飲みほすと、床に足を降ろし感触を確かめた。

全身の痛みは筋肉痛。だるさは発熱の後。だが、思つたよりも気分は良く、ふらつくのをのぞけば問題なさそうだった。

今までここまでになつたケースと比べると非常に状態が良い。

「おーい。少年」

「……う

「寝てると悪いんだが、起きてくれ

ぱんぱんと白い頭を叩くと、少年は身動きをして髪と反対の真つ黒な眼を向けてきた。半分寝てると分かるがなぜか眞面目屋

「……おはようございます」

「おはようございます。部屋でいい?」

「……部屋?」

「あんたと俺、同室だから」

「……同室

「おーい。起きてるかー? ここは学院、でもって俺たち生徒。寄宿舎の部屋が同室」

ふつと少年の焦点が定まる。

「あ、すみません。部屋ですね、一泊りです

がたりと椅子から立ち上がり歩き出す。

「お世話になりました。失礼します」

「どーも。倒れたらたのんまーす」

対照的な挨拶を残して部屋を出ようとすると、何かを投げられ俺は反射的にそれを掴んだ。

なんだ? と思つて見ると、革の袋の中に薬を包む紙がいくつも入つていた。

「持つていなさい。でも、無理は禁物」

薬包の中身が何が分かり、俺はちょっと感心して女を見た。

上からすつぽりと白いローブをかぶり終わつた女は、いかにも某
RPGの白魔導師。回復キャラにやりと笑む姿は似つかわしくなかつたが。

俺は手をひらひらと口を開め、少年の後を追つた。

隣の建物まで無言で歩き、一階の一一番奥の部屋へと入る少年。どうやらそこが俺達の部屋といつ事らしげ

「「」が僕とあなたの部屋になります」

「ほくー。思つたよりも広いな」

寄宿舎と言つからには六七畳程度の部屋かと思えど、やつにその三倍はあつた。下手しなくとも、俺が住んでいた部屋の面積を超えている。

「それは、この国で最も大きな学院ですから、貴族の師弟も集まります。あまり狭いと文句が出るのでしょ」

一つのベッド、一つの机。クローゼットがそれぞれに用意されていた。

それなりの貴族の師弟にしてみればこれでも文句ものだらうが、あくまでも学生といつ身分上、これで我慢してこらのだらう。

「……やつこえば、静かだな」

ふと、キルミヤは辺りを見回した。

いつもなら俺の耳をイカレさせたいのかと言つせど、世界を満たしている雑音がほとんど聞こえない。

それこそ、いつも昼寝をしていたあの丘が、地下牢と同じぐらい

に聞こえなかつた。

「それはお願ひ……しましたから」

「お願ひ？ あ、おい！？」

唐突に少年はその場に崩れ落ちた。

「何だよ、お前……熱か？ 面倒だなー。さつきの場所で倒れててくれよ。筋肉痛で痛いんだよ」

仕方ないなーと、少年を抱えあげようとすると、少年は何故か身をよじつてそれを避けた。

「何やつてんの？」

「あそこへ……は」

「行きたくないの？」

微かに頷く少年に、俺は頭を撞いた。

「行きたくないところに俺はいたのかよ」

「そうじゃ……僕だから、僕は……」

「つつてもお前、本当に熱がひどいぞ」

「……だいじょうぶ。あなたが、いるから」

「俺？」

「精靈が……いるから、力をわけてもらえるから」

「せいれい？」

少年は意識を手放していた。

少年の頭を小突いてみたが、反応は無かつた。

「……ねちゃつた

俺は不意に声を感じ田を細め、ドアを見つめた。

「キルミヤ・パージェス！
カシル・オリジン！」

大声とともに部屋のドアが開かれる。
部屋に入ってきたのは白髪が幾スジも見える魔導師。
が、部屋には誰もいなかった。

「何処に……入学式早々出席しないとは」
「あら〜、クレイスター先生」
「ラウネスか」

背の高い療養室の女はにじにじと白髪教師に近付いた。

「キルミヤとカシルなら体調を崩してうちで預かってありますよ。
ごめんなさいね、連絡が遅くなってしまって。一二三日すれば良くな
りますから、ご心配なく~」

「それを早く言え」
「ごめんなさい~」

ぐすぐすと笑いながらラウネスはクレイスターから離れた。

「あー……面倒とはいえ、最初からさぼっちゃった。
ま、いーか。どうせやる気ねーし。昼寝したいしー」

学院の外に広がる林の中、巨木に身を預けて俺は大きくあぐびを
した。

「しつかし、何で俺がこんなガキの面倒見にやならんのか」

膝には毛布で蓑虫直しぐるぐる巻きにされている少年の頭が乗せられている。

「どーすんだよ。あのおばさんとこ行きたくないって。俺医者じやねーぞ」

教師に見つかればすぐに連れて行かれるし、あの場では部屋を出るしかなかつた。

咄嗟に毛布を掴んできたが、熱が出ている人間をこんな外で転がしているのは問題だらう。仮にも看病を既に受けた身としては何とかしてやらなければと、珍しく俺は人道的な事を考えていた。

「大丈夫」

「起したか。悪い」

少年は目を閉じたままだつた。

「僕は、大丈夫。あなたのそばには精霊がたくさんいるから」「なんだよその精霊つて」

少年の頬が少し動く。微笑んでいる。

「あなたは、本当に知らないのですね」「なにを?」

「あなたは精霊に愛されし存在。あなたのまわりにはとても多くの精霊がいます。」

あなたが倒れている時、彼らはとても心配していました。そして今も本調子でないあなたを心配しています」

「えーと。お前、不思議ちゃん？ 変なものが見えたりとか、そつち系の人？」

「『そつち』という系譜については分かりませんが、見えているわけではありません。

僕は聞こえるだけです。むしろ、あなたこそそうではないのかと思つていました」

「なんだよ、俺はそつちの人じゃないぞ。一般人だ。一般人」

「ですが、人には聞こえない音を聞いているのではないですか？ 例えば、遠くの人の声とか。聞き取りようもない程小さな音とか」

「……声、ねえ」

「それは精霊たちが貴方に運んでいるものです。あなたがいつも一人でいるから、寂しくないようになると。そして、少しでも自分たちの存在に気づいて欲しいと。さすがに倒れている間は自粛してもらいましたが。今も静かにしてくれているようですね」

俺は軽く目を見張った。

「お前が？」

「お願いしただけです。彼らはあなたの事が好きだから僕の願いを聞き入れたにすぎません。あなたも彼らの声が聞けてもおかしくないと思うのですが……」

「俺が？」

少年は小さく咳き込んだ。

俺は肩の力を抜き、少年の頭をぽんぽんと撫でた。

「悪い悪い。寝ろ」

「いえ。話させて下さい。これぐらい平氣です。

彼らが言うには、何かに阻まれているそうです。おそらく、あなたには封印か何かがかけられているのでしょうか。何の目的があつて

そうされているのが分かりませんが、憶測ではそれはあなたを守る為

「俺を……守る？」

「それだけ精靈に愛されている存在は、かつての縁の民を彷彿とさせます。

縁の民。別の名を縁の聞き手。

縁の聞き手は、この世界のあらゆる事を知ることが出来ると言わっていました。彼らの武器は精靈。精靈は世界中のあらゆる音、光、力を拾い、愛する存在へと惜しみなく与えます……だから

咳き込む少年の額に手を置き、俺はもう片方の手を虚空に向けて突き出した。

魔術の基礎、大気の力を取り込む型。だつたか。

まあ、精靈の力をもらえるのか。もらつたところでどうしようもないのだが、ものは試しどうつもりで、少年に力をわけてやってくれと心の中で念じてみる。

「権力者は縁の聞き手を求めました。

あなたが本当に縁の聞き手なのかは分かりません。血族に近い者、あるいは血に連なるものの誰かが、そうだつたのだと思います。ただ、あなたの愛され方は尋常ではない。だからこそ、精靈の力を得たとき、あなたを欲するものが多く現れてもおかしくはないのです。

縁の聞き手、縁の民の存在はもう随分と忘れ去られてしまいましたが、まだ権力者の中には伝説として記憶に留めている者もいます。ですから、あなたがその封印に気づいていて、それを解く為にここへ来たという事ならば、僕はおすすめしません

「そんなんじゃねーよ」

「そうですか……良かつた」

「人の心配してないで自分の心配しろ」

「大丈夫です。先ほどから精霊たちが力を分けてくれていますから。あなたがお願ひしてくれたんですね。ありがとうございますけど、人前でやらない方がいいですよ。分かる者には分かれます。特に魔術を扱う者たちは」

俺は頭を搔いた。

「お前も精霊に愛されし存在じゃないのか？」

少年は笑った。

「いいえ。もう違います。よしみで助けてくれてているだけです。あなたがいなければ僕のまわりに精霊は集まりません」

「分かったよ……分かったから寝ろ」

「大丈夫ですから。それよりも、自身の危険性というものを」

俺はため息をつき、仕方なく口を開いた。

「俺がこの学院に来たのは俺の意思じゃない」

「え？」

「従兄弟がな、放り込んでくれたんだ。

お前の言うとおり、俺はささいな音でも拾つてしまつ。それが遠くても、別の部屋でも、外からでも。

子供の頃はそれがどこで発生した音か分からなくて、メイド達の噂話なんか拾つてしまつてな。意味の分からぬ言葉があると、それを言つていたメイドに聞くんだ。どういう意味なんだって。そ

したらメイドは青ざめて「で、そんな事をと聞いてくる。子供の俺つてば素直だから、お前からって言つんだ。そしたらメイドはさうに青ざめる。

化け物呼ばわつた。ま、おれ自身さう思つたところもあるけど。なんにしても、それでも俺は領主の血筋だったから、なーんもしないでもメシだけは食べた。昼夜の生活が気に入つてたんだが、次期当主の従兄弟がな、お前はここに居るべきじゃないつて追い出してくれたんだよ。で、ここに放り込まれた

「それは新しい世界をと……？」

「そんな優しいかよ。俺がここまで来るのに何んだけ大変だつたか」

「は？」

「馬に乗つたことなんて無いのに、三日間のりっぱなし。休みなんて微々たるもの。早々に熱っぽいなーとか思つてふらふらしても腰ざんぢやくの野郎頼着せずだ。まじで死ぬかと思つた

実際、学院についてからの記憶が無い。

「……大変だつたんですね」

「そーだよ。従兄弟はこの力をコントロール出来るんぢやないかと思つているけど。俺としては雑音から解放されたんならもうそれでいいわけ。封印なんてあつたとしても、ビードもいんだよ」

「うう……ですか。

少年はそう呟いて、安心したかのよつてやべらなくなつた。

「……つたく。やつと寝たか」

手のかかる奴だと思いながら、俺は「」の手を耳に当つた。

今は、本当に静かだった。風の音も、林のざわめきも、小さな生き物の気配も分かるようだ。

「世間ってのは広いんだねえ……」

入学式早々欠席してしまったが、結果としてそれ程目立つ事も無く教室の中に俺は埋没していた。

それぞれ有名な学院に在籍出来た事を喜び、良い成績を修めようという気持ちで高ぶり、他人の事をいちいち気にかける余裕を持ち合わせていなかつたのが主な要因だろう。

「ハジのテンションは久しぶりに見るか。若いね~

休憩中は知り合い同士でひつきりなしにあれやこれや話し、授業中は興味津々の顔で齧り付く様に教師の話を聞いている。

それでも飽き足らず押しかけ女房の「ごとく質問攻めに赴く生徒まで出ている。俺としては引き気味なのだが、ここではそれが当たり前の反応のようで誰もかれもが当然の事として受け止めている。

まあ模範生つて事なんだろ?けど……

盛大なあぐびを噛み殺しつつ、俺は出会つて早々変な世話の掛け合いをした相手、カシル・オリジンに視線をやつた。

カシルは生真面目な表情で魔術書を開いていた。ざわつく周囲とは完全に断絶された一個の世界を持つているかのような静謐さをたたえて、誰もが踏み入る事の出来ない一線を作り出している。

一度眠つた後、カシルは嘘のように体調を取り戻し、それからは口を開かなかつた。

あれだけしゃべりまくつていたくせに、一つも、何も言わなかつた。からかってみても、からんでみても、まるでそこに俺がいないかのような無反応しかなかつた。関わりたくないという意思表示で

あつたが、どうにも俺には解せなかつた。

何が要因でそんな態度を取るというのか。最初からその態度なら別段気に止めはしないのだが、最初の反応を見た後では違和感がありすぎた。と言つても、関わりたくないと思ふ表示をする相手にわざわざ関わるのも面倒なのでただ眺めるだけなのだが。

「キルミヤー！」

「あ、はいはーい。なんすかー！」

教師の何度目かの呼びかけ 　 だつたのだろう。田つきが剣呑だによつやく氣づき、俺は暢気な返事を返した。

まだ若い教師は、『立腹の様子で空に描かれた文字を指して言った。

「『』の効果を答えよ

「分かりません」

即答。

あまりに早すぎるギブアップに、教師は頬を引きつらせた。

「……キルミヤ、もう少し考えてみる」

「え、いや、本当分かりませんつて。ちつとも」

「……私の話を少しでも聞いていれば分かるはずだが」

「え？ そうなんですかー？ あはは。ちつとも聞いてなかつた。いやーすいません」

頭を搔き笑う俺に近付き、教師はおもむろに口をきつた。
その瞬間、俺の身体は縫いとめられた」とく固まつた。

ええ……学生相手に空切り？ それはちょっと大人気ないんじゃないんですか？

「そうしていれば嫌でも前を見ていられるだろ」

くすくすと忍び笑いがあちこちでもれる中、変な風が俺をとりまく。

あ。やべ。と思つた時、

“いけない。君たちが動けば彼の立場が危うくなる”

ふつと風は收まり、誰も気づくことなく授業が再開される。

後ろを振り向く事は出来なかつたが、俺は背中に感じる視線にため息をついた。

関わるなという意思表示をするくせに、これだ。

精靈とかいうやから動きを、どうも少年は抑えている節がある。自分に何らかの魔術を扱われたり、危害を加えられようとすると決まって変な風が生まれ、その都度先ほどのような囁きが紡がれる。

屋敷に居た頃はこんな事は起こらなかつたのだが、どうも周りにいるらしい精靈とやらは魔術に敏感に反応するようだ。

もし少年がその反応を抑えていなければそうそうに奇異の視線を受ける事になつていただろう。自分一人の事ならば別にそれでもいいのだが、バージョスという名を名乗つてゐる為そつもいかない。

……なんか、むかつてきた。今度グランに会つたらぶん殴りつ。よし、そうしよう。

心の中で固く誓い、俺はスムーズに実行出来るように授業が終るまで只管イメージトレーニングを敢行した。気付いたら授業が終わって術を解かれていたので、驚くほどの中力を見せたと言つて良いだろう。さすが俺。

それにしても固められたせいで、変に肩がこつてしまつた。ぐるぐると回してこりを解しながら椅子に座ると、俺の周りを取り囲むように同期生が数人集まつた。

「お前、パージェス家の人間だそうだな」

そう言つて侮蔑的な視線を隠そつともせす見下ろしてきたのは金髪碧眼のいかにもといった貴族ぼっちゃんだつた。それを支持するかのように両翼に展開されるのは同じような色彩を持つた、同じく貴族ぼっちゃん。

年はどれも少年よりは上のようだが、俺よりも若い。

「えーと。あんた誰？ 知り合いでっけ？」
「誰が貴様などと」

金髪碧眼が口を開けば左右が追従した。

「そんなわけがあるか」

「フェリア様は元老院の円卓の一員、サジエス家の方。貴様などが同じ空気を吸うだけでも恐れ多いお方だ」

「そりやすごい。それで？ その恐れ多いお方が俺に何か用？」

全く意に介さない俺に、取り巻きは鼻白んだ。

「ほう。僕が何者か分かつてなおその態度か」

「何者つて、ただの学生だろ？ 用が無いんなら寝させてくれ。さつきの術のせいであんまし寝られなかつたんだよ」

実際はイメトレに夢中で寝ようとしていた事を忘れていただけだつたが、その辺を説明する義理もないのに面倒くさいと手を振ると、フェリアなるほっちゃんは鼻を鳴らした。

おお……鼻を鳴らすという芸風を生で見た。

「グランの弟と聞いたが……とんだけだな。貴様は」「あいつは出来がいいの。俺は出来が悪いの。そんだけ」「ふん。実の親にも見放されたのならば出来が悪いのは間違いないな」

実の親？ と、内心いぶかしむ俺。

そしてすぐに納得した。忘れていたが、自分は一応現当主の実子として扱われていたのだ。

何故に実子なのかと言葉を覚えた直後おっちゃんに聞いたら、ビビられた。生後一週間かそこらの記憶があるとはまさか思つていなかつたのだろう。俺だつて諸事情がなければ思わなかつた。

それでもビビられながらもおかんが『何かあつたら』 そうして欲しいと手紙に残していたのだと教えてくれた。

俺の事を実子ではないと知るのはページエス家に古くから仕えている使用者ぐらいなものなのだが、ページエス家は財政状況から使用者の新人さんはいない。従つて、ほとんどの人間が俺は実子ではないと知つてている。

だが、こうしてそれ以外の人間には実子という事で認識されている。

のだな、と初めて実感した。

……うん。思考力を大幅に使ってしまった。寝て回復しよう。

机につつぶし、ぐてりと寝る俺に興がそがれた坊ちゃんは背を向けたようだ。

「あーあ……お前サジェスを敵にまわすなよ？」

隣の席にいた、群青色の髪をした俺と同い年ぐらいの青年が苦笑交じりに囁いた。

俺は半日だけあけていた目をすうっと細めた。

「なんだ、お前もそつちの人間か？」

俺の眠りを妨げんじゃねーとばかりに威嚇したら、パタパタ手を振られた。

「ちやうちやう。一応貴族と呼ばれる部類には属されるだろ? けど末席も末席。

あいつらに言わせりや貧乏庶民と変わらんさ。

それよりお前、もーちょい真面目にしといた方がいいぞ。教師にあの態度は将来の職先が無くなる

……似非関西人発見。

関西弁などこの世界に無いはずなのが、イントネーションがまさにそれで反射的に関西弁に脳内変換してしまった。

「……おい? 聞いとるんか?」

「あー平氣。俺、働く氣ないし」
「はあ？ ここに来たって事は中央狙いひやうのか」

やつべ。本当関西弁にしか変換されん。何だここ。

「ないない。あんたはそなの？」

「まあ、稼ぎ頭として投資されたからなあ。稼がないと家が潰れる」「へえ。そりや「苦労様」

「お前は？ 兄貴に続くんとひちやうのか」

「何で？」

「何でつて、グラン・パージョスは出世頭や。やつなりや当然、家の人に間がさらに登用されるんぢやうんか」「やだよ。そんな面倒くさいの」

青年は手を丸くした。

「お前、珍しい奴やな」

「あんたはそーなの？」

「俺？ そりや家の再興を期待されて送り込まれたさ。実際は難しいやうにうけたゞ夢を見たせるのも息子の勤めや」「やるねー。俺なら逃亡しちる」

青年は手を叩いて笑った。

「ひどないやう。やる氣がないくせに、逃亡せずに残ってる」

俺は頬を膨らませた。

「……かわいくない。むしろきもこ」

ええ！？ そこだけ標準語つてどゆーこと！？

内心の動搖を押し殺す俺。

「…………難しい年頃に向かつてそれは傷つくな。ビーすんだ、傷が残つたら」

「野郎の傷は勲章だ」

「うわー。汗くさー」

「はいはい。冗談言つてないで移動するで」

「あれ？ 移動だつけ？」

身体を起こして周りをみれば、残つてているのは一人だけだった。

「お前次が何か分かつてないんか？」

「メシ？」

「…………分かつた。興味が無いってのは本当なんやな。

次は初の実技や。場所は結界場、寝てないで行くで

襟首つかまれ、俺はざるざると引きずられていった。

それにしても、この青年も物好きだ。

さつきのような貴族の坊ちゃんたちの方が理解しやすいし、納得のいく言動を取つてくれる。が、この青年はわざわざ面倒な自分の相手を買って出ている。

お人よしを超えて馬鹿じやなかるーかと思うのだが、軽口を叩きつつも真面目に面倒を見ようとするのでそれは言わないでいた。

遅れずに行くと 正確には引きずられて 、各々緊張した面持ちで整列していた。

俺と青年は後ろに並び 並ばされ 、教師の登場を待つた。

俺が一つ田のあぐびをして青年に殴られたとき、よつやく教師は現れた。

黒いローブを纏い、樅の杖をつきながら現れたのはいかにもそうですと言わんばかりの魔導師だった。

30代ぐらいの男は、前置きも説明もなく唐突に蠅燭を取り出し、それに火をつけて見せた。もちろん、魔術で。そして蠅燭を配ると、同様の事をして見せるように言った。

生徒達は慌てて教科書を開いて炎を灯す術を探し始め、既に暗記しているものは早々に蠅燭に火を灯し始めていた。

見れば、早々のメンバーにはカシルも含まれ、彼は火を灯すと蠅燭を地面に置き、無表情でどこかを見つめていた。

壁を見てて楽しいのかねえ。

「おい、お前も早く探せよ

「じずかれ、俺は隣で必死に教科書をめくる青年に気づいた。

「まだ探してるの？」

「何やつてんだよ。お前もさがせよ」

「無理だつて。俺、教科書持つてないし」

「はあ！？」

「まあまあ。こすれば付くぞ」

「アホか！」

怒鳴られ、俺は肩を竦めた。

「わかつたわかつた。眞面目にすりやいいんだろ

仕方がない。

俺はおもむろに蠅燭の前にしゃがみ込んだ。

青年は俺がよつやく真面目に蠅燭に向き直った事でホツとしたらしく、改めて魔導書を開いた。

力チ 力チツ

「かちかち？」

青年が俺の手元を覗き込んできた。

「お前、何やつてんの」「何だよ、話しかけんな。結構難しいんだぞ。よつ」

何度もかの力チ力チの末、俺の手元に小さな炎が灯った。

よし、ついた。さすが俺！

どうだとばかりに青年を見上げたら、顔面に魔導書がめり込んだ。

「！－！」

顔面抱えて『じりじり』ろ転がる俺

君……君ね、本の角つて痛いって知ってる？ 千ページは下らな
いぶつとい魔導書だよ？ その角だよ？

「誰がそんな方法で火を付けろって言った！」

いやーはつはつは。さすがに俺でもカチンとくる。人生一度目の俺でもきちんときた。

「知るかボケ！ 方法なんか指示されてねえだろ！」

「阿呆か！？ 魔術でに決まってるだろこの馬鹿！」

「あ、馬鹿って言つた奴が馬鹿なんだぞ。やーいばーか

「お前はガキか！ さつさと真面目に火をつける！」

「真面目にやつただろ！ 普通火打石つていつたらおが肩とか枯葉とか、そういうのに火の粉を移して火を付けるんだぞ！ 蠟燭にじかに付けるのつて結構難しいんだぞ！」

「だーーー！ この馬鹿ガキ！ いいから魔術で火を付けろー。」「

子供の喧嘩を始めた俺達の周りには、いつの間にか一定間隔の間が取られていた。

そして、いかにもといった魔術師の教師は俺達に歩み寄ると片手を挙げた。

「其はやすらぎの源 零々のゆえんたる汝をこゝへ」

ぱっしゃん

「…………」

突如頭から水を浴びせられ、俺達は沈黙した。

「キルミヤ・パージェス。
レライ・ハンドニクス。

着替えなさい。後で補習の日時を伝えます

「はーい」

「……はーい」

俺はこれ幸いにと、青年は歯噛みしてその場を立ち去った。

第十一話 魔法少女に必要なものは（前書き）

あつぱかるのを忘れてました・・・すいません

第十一話 魔法少女に必要なものは

二人連れ立つて寮に戻る道すがら、口げんかは継続。

「何で俺まで……全部お前のせいや」

何でか怒りの矛先をこちらへと向けてくる青年。

「騒いだのはお前だろ？」

言つたら、キッと睨まれた。

「どー考えたつてお前のせいやろ！ もつと真面目にしーー！」

「真面目に火を付けたじやないか

「どこが真面目やー…………あー…………もつとい。アホ臭くなつて
きたわ」

「なんだよーふつかけておいて」

「やる気が無いって分かつてたんや。俺が大人にならな」

「うわつ一人だけ大人ぶつてるよー。困っちゃうよねー俺だけ特別
ーみたいなー」

「お前なあ……」

どつぶつと疲労を滲ませた顔で肩を落とし黄昏始める青年。

これはちょっとからかい過ぎたかと俺は反省し、青年の気分が少しでも浮上するように明るく言つた。

「そんな深く考えるなよー。禿るぞ！」

「誰のせいや……」

気楽に投げたボールが剛速球で返ってきた。
つむ。これだけ元気があればよいよ。

「だから肩肘張るなつて、どーせ魔術なんてノリと感覚が全てなんだからさあ」

「ひとつも使おうとせん奴に言われたあないわ」

「つつてもなあ……魔術に魅力を感じないっていうか」

「はあ！？ 何言つとんねん！」

「あ、最初はすげーなーと思つてたよ？」

手品師だと思つてたが。

そりやまあ某RPG、某アニメ、某小説の「じとくと、あらゆるジャンルのファンタジー業界において、魔法の一文字は欠かせず、それに対して憧れを抱く者も多く居た。職場に堂々グッズを持ち込み一人悦に入っている同僚も居た。

俺だつて憧れと言う名の興味はあつた。くそ恥ずかしい呪文だつて使えるのならいくらでも我慢してやろうとさえ思えるぐらいには興味深々だった。

多勢に無勢を一発逆転。これぞ男のロマンだらう。

そんな状況に陥りたくないといつもそもそも論は見ない事にして、格好良さでいけば俺の中ではかなりの水準を維持している。

杖の一振りで並居る敵をなぎ倒す。無双だ。爽快だ。

その俺が今まで魔術の存在に気付いて何もしなかったわけがない。俺だつて試した。くそ恥ずかしい呪文だつて真面目な顔して言つてやつた。

「だけど、俺に魔術は向いてないんだよ」

がつくし肩を落として言つたら、青年は『何言つてんの』『こつ』みたいな顔をした。

いや『何言つてんの』つて、そのままだからやー。

「使おうとした事があるんか?」

「あつます」

鼻で笑われた気配。

何この心理的いやめ!

分かってるよー。師事なしにやめとしても出来ないってこう一般常識は知ってるよ!

けど考えてみろー。居候の俺が、「あのー実は魔術を習いたくてえー(もじもじ)」とか無いだろーー。

既に化け物指定受けた後だつたのに、いくらかの身体の可憐さ駆使しても、それこそ『何言つてんの』『だよー』
てか、『こつせらに化け物になる氣か』だよー。

「そんなん出来るわけないやつ

「つぐ。分かってる事を他人にも言わると無性にむかつく

「掌握るな握るな。殴らうとするな!」

スパンと頭を叩かれた。

あの……俺は殴つちやダメで、あんたはおつけーってなして?

「一人で出来るわけがないんやから、これからやろ?。こじに入れ

たつて事はちつとは勉強してたんやろ？ それを生かせ

一向に俺の視線の意味に気付かず話を続ける青年。
まあいいだろう。俺は大人だ。人生二度目の出来た大人だ。この
程度で怒りはしないぞ。

「勉強なんてした覚えはない」

「何を堂々と。そしたら試験はどないしたんや」

試験？

「……お前、受けてないんか？」

急に青年の目が不穏な形へと形態変化を始めた。

「そんなに見つめられても俺はノーマル。嬉しくない。つかキモイ
「ふざけけるところやうわ！ なあ！ ほんまに受けてないんか！
？」

あんまり必死に言うので、記憶を引っ張り出してみる。

俺は自分からこの手の機関に接触した事はない。従がつて俺自身
が受けに出向いたという事は無い。

そして二一トで自堕落生活を送っていた俺の周囲でそんな事をし
そうな相手はただ一人。

……あつたな。

思い出した。思い出しましたよ。

女かと思うほど筆ままで、都に出てからもせつせと手紙を送つて
きていたグラム。その手紙の中に魔術の基礎を問うものが何度も入

つていた。

「何だ何だ？」「いつも魔術に興味ある口か？　ふふ。一人で出来るわけねーじゃん。」

とか思いながら、来るたびに適当な事を書いていた。

Q 魔術の基礎となる元素を答えよ

A すいへーりーべーぼくのふね　ななまがりしつぶすくらーくか

Q 魔術を成立させる為に必要なものを答えよ

A 愛と勇気と正義

Q また、それはなぜ必要か答えよ

A 魔法少女の基本装備だから

怒られた。

それでもつて、何のために帰ってきたのか目の前に紙出されて、監視されながら三十枚にも上る問題用紙に回答させられた。

「あれだな……間違いなくあれだ」

「受けたのか？」

「遺憾ながら」

「なんでそこで遺憾になるんや」

「だつて学校とか今更めんべーと、言つたらさらりに殴られそつた氣配がしたので、俺は『じょじょ』によと言葉を濁した。」

「はー……まあええわ。ちゃんと受けたっていうんなら、それだけの勉強してたって事やろ?」

それを生かしたらええやんか

「それとこれとは話が違うんだよ。眞つておぐが、魔術は使えた」

「な……ほんまか!? なら!」

「使えるけど、使いたくないんだよ」

「……はあ?」

俺は『なんで?』といつ視線に耐えきれず顔を逸らした。

魔術はきちんと発動した。発動したのだが、結果が……俺、不器用さんでした。というだけ。

これはもう使えない。人前では絶対使えない。

それで泣く泣く魔導師になつて千人切りルートは諦めようと決意していたのに。

「使えるんなら使える

俺は青年の言葉を遮つて口を塞ぎ、傍にあつた木に押さえつけるようにしゃがませた。

第十一話 駆つた？

突然口を塞がれ、覆いかぶさるよつて押さえつけられた。
いきなり何をするんやともがくと「静かに」と低い声が降つてき
た。

キルミヤは薄い紫色の皿を細め、周囲を探るように視線を走らせ
ていた。

先ほどまでのふやけた態度とはまるで別人で、思わず手を払いの
ける事も忘れて凝視してしまつた。

「お前はいじにいる」

そう言つて寮とは違つ方向へ走り出す。

「え、おー」

分けが分からなかつたが、とにかくキルミヤを追つた。
キルミヤはいつもの怠惰な拳動とは似ても似つかない動きで林の
中を駆けてゆく。

「こいつ早すぎやしない、隠しよつて……

ようやく追いついた時、キルミヤは木の陰に身を潜めていた。

「どうし」「

キルミヤは俺の口をまたも塞ぎ、自分と同じよつて木の陰に引つ
張つた。

「何でついてきたんだ！」

小声で抗議するキルミヤに、眉間に皺を寄せ睨みつける。

「いきなり走り出すからや。どないした」

キルミヤは舌打ちをし俺の質問にも答えず木の陰に向こう側を窺つた。

舌打ちをするのもそつたが、焦る姿を見るのは初めてなような気がした。

大抵寝てるかわかれ関せずでボーッとしているかの一通り。不真面目で馬鹿で阿呆のこの男がここまで狼狽えるとは、予想外だった。それだけに、何に焦つているのか視線の先を覗こうとしたら、すぐさま頭を押さえられた。

「どうも学院とは関係ない部外者が侵入しているようだ」「は？」

あまり顔を出すなよと注意されて窺つて見れば、確かに顔を隠した男たちが三人、小声で何かを話している。冒険者という類ではなく、明らかに裏側の類だと分かる。それに真っ当な来訪者であればこんな所でこそこそしている必要などない。

「なんやあいつ？」

「分かんねーよ。けど……」「けど？」

「誰だ！」

三人のうち一人がこちらに気づいた。

ぞくりと背中を悪寒が這い上がる。

魔術を一つも使えない学生の自分達が、見つかってただで済むわけがない。

逃げ切れるんか？

裏稼業の人間を相手に出来る訳がないと恐慌状態に陥る一步手前の頭で考える。ならば、足の速いキルミヤを逃がして教師を呼ぶ。それしかない。教師が駆け付けるまで、とにかく逃げ続けるだけだ。

覚悟を決めた時、

「お前、ここから絶対出るなよ。いいか、絶対にだ」
「え、おまつ」

キルミヤは立ち上がり、止める間もなく陰となっている木から一歩踏み出した。

あ……あんの……あほうが……

「……学院の生徒、か」

くぐもった声で呟く覆面の男。

キルミヤは薄い笑みを浮かべて男たちに近づいた。

敵うわけないやろ！ どないすんねん！！ 今之内に助け呼べばいいんか！？ つてこいつ放置していいわけないやろ……

「おひさん達、学院の人じやないよね～。すんげーあやしーーー」

俺の絶叫などど吹く風で、颼々とあの巫山戯た口調で話しかけてくる。

あいつは神経がいかれてるんだけじゃうんか？ こいつは隠れてても足が震えて音を出せんやつにするだけで精一杯やのこ……

必死に恐怖を抑え込んで、少しだけ顔を出して様子を伺う。

覆面の男たちは視線を交し合っていた。どうする？ とこつまうに。

主格と思われる男は小さく頷いた瞬間、男たちは剣を抜き放った。

キルミヤは後ろに下がつて距離を取りながら上着を脱いでよじると、振り下ろされた剣をあらうごとくそれで受け止め絡めとつた。絡めとられてもなお襲い掛かる男。キルミヤはすかさず剣を取り、男の蹴りを避けると懷に入つて男の顎を剣の柄で殴つた。

その後ろから、気を失つた男もろともキルミヤを切り捨てる勢いの剣が振り下ろされる。

あかん！

「後ろー！」

キルミヤは俺の声に、気を失つた男の胸倉を掴んで横に飛んだ。

「……もつ一人居たのか」

覆面は咳き、姿を現した俺を見た。

「馬鹿が！ 動くなつて言つただるー。」

「つるわー！ 危なかつたやうがー。」

「俺は平氣なんだよ！ お前に心配されるまでもないんだよー！ い
いからとつと逃げるー。」

「なつー！ お前を置いて行けるかぼけー。」

二人の覆面は視線を交わすと、一人はキルミヤに、もう一人は俺
へと間合ひを詰めてきた。

あかんあかんあかん！！

逃げよつとしても足が地面に縫いとめられたーとく動かない。
俺は持つていた魔導書を投げつけるが、あつせりと避けられた。

「其は波動の素 零々のゆえんたる汝をこゝへー。」

突然キルミヤの声が響いたかと思つと、田の前を赤が躍つた。

な……なんやー？

赤は炎。俺に襲いかかってきた男を飲み込み、さらに横手の林も
飲み込んで物凄い熱風をまき散らせていた。

「其はやすらぎの源 零々のゆえんたる汝をこゝへー。」

ざあああああああ

続けてキルミヤの声が響き、空より大量の水が発生した炎の全てを消し去るよに洗い流す。

俺は、キルミヤを見た。
だけどキルミヤは鋭い目で何かを睨みつけたまま。

視線の先には、服を焦がした男たちの姿がまだあった。

「お前らの相手は俺だろ」

声は地を這い空気を振るわせた。
少し巫山戯た調子の残る声。だけど俺は知らぬ間に、震える身体を押さえていた。

「貴様、白の宝玉の仲間か」

キルミヤは答えず、手にした剣を構えた。

「……退くぞ」

男は小さく言うと、倒れた男を抱えて林の中へと消えた。
キルミヤは男たちが消えた方角を睨みつけていたが、しばらくして手にした剣を捨てた。

剣を受け止める為に使った上着を拾い上げ、俺のところへと戻つて來た。

「あーあ、ぼろぼろ……」

剣を受け止め穴が開いた上着を見てため息をつくキルミヤ。

「お前……やつをの何だよ」

「ほれ行くぞ。ここに居たら面倒だ」

キルミヤは俺の腕を掴みひきずるまゝしてその場を離れようとした。

「なんだつたんだよやつのはー お前……魔術

「下手なんだよ。突っ込むな」

「いつ……本氣で言つてるんか?」

俺は耳を疑つた。

あんな威力、学生エリート!」とさが出せるものじやない。それどころか魔導師団員だと言われた方が納得出来る。

「下手!…? あれで!…? デコがや!…」

「声でけーよ。あいつら引いたと連づけどそんな騒ぐなつて

「あ……」

不安になつて後ろを振り返るが、焦げた木々が見えるだけであるたちは居ない。

「おーおーおー。だーいじょーぶだつて。あればぜつてー引いたか

「ら

「そつ……なのか?」

「ふふ。こわがつてやんのー」

ぐりぐりと頬を指で突かれ、俺は無言のつりにそれを吐き落とした。

「うるさいわ！ それより、さっきのはビリビリの事や」

「なにが？」

「とほけんな。何で魔術が使えないふりしてたんや」

「あーひっぱるねえ。しつこい男は嫌われるよ？ 女の拒絶の言葉は半端ない威力なんだよ？」

「話かえんな。何で嘘ついてた

「嘘？ 嘘はついてないって

「ついてるやろ！ 魔術使えないふりして

キルミヤはこっちが理性切れそうになりかけているのもお構いなしに気楽にパタパタと手を振った。

「してないしてない。使うのめんどーだから使つてないだけ。使えないなんて言つてないだろ？」

「いっ……は。

こいつはどれだけの人間が魔導師になれるのか、魔術を操れるのか知つているのだろうか。

魔術操る素質を持つものが数百人に一人と言われ、その中で教育を受ける事が出来るものはホンの僅か一握りだ。

学院に通えるという事は、それだけ恵まれた環境に居るという事になる。通いたくても通えない人間は沢山いる。俺にしてみても、家の再興という使命のもとに相当な無理をしてここに通わせてもらつていて。それなのに。

「んな怖い顔で睨むなよ…………あのな、面倒だから言つけど、本当に巫山戯てるつもりはないんだよ」

俺の怒気に気付いたのか、キルミヤは少しだけ弱つたような顔を

した。

「へえ、そうなんか?」

「さつきの術、俺はあそこまででかくしょーなんて思つてなかつたんだよ。だけど、制御が効かない。小さいものになればなるほど制御から外れるから、人前じや出来ないんだよ」

視線を逸らして答えたキルミヤは、気まずそつこ、加えて幾ばくか恥ずかしそうだった。

「もしかして……だからか? 授業で」

「細かい作業は昔から苦手なんだよ。ほっとけ」

蠅燭に火打石で火をつける事が出来るくせに、細かい作業は苦手だという。

なんやそれ。

「何笑つてんだよ。氣色悪いな」

「何でもないわ。…………なあ、さつきの奴らを知つてゐるのか?」

キルミヤは黙り込み、しばらくしてから首を横に振つた。

「分からない。多少の心当たりはあるけど、どうせそれとは違つたよ」

「心当たり?」

「グラント關係だよ」

「グラント……お前の兄貴か。あなるほどな。出世頭だから敵は多いかもしれないな」

「だけど俺の顔を見ても反応してなかつたんだよねえ…………。ま、

なんにしてもやつきの事は誰にも言つなよ

「何でや? 教師には話さな。そうすれば警備を強化してもらえるやろ。犯人だつて捜してもらえる」

俺の言葉にキルミヤは微妙な顔になった。

「それは無駄だろ。ここにはあのサジュなんとかつてぼっちゃんだとか、お偉いさんの子供がいるんだ。見るな警備をしてやないさ」「だからと書いて、このままにしておくなんて出来るか? お前だつて狙われるかもしけんのやで?」

キルミヤは動きを止め、俺を見た。

「……な、なんや」「はあ……まあ、そうだよな。俺たちが標的にされるかもしけねーし。わかつたよ。お前の好きにしろ。但し俺の魔術については黙つてくれ」「何でや? 教師に相談すればいいやろ」「なんでもだよ」「……なんやそれ」

相談すれば制御出来るように訓練をつけてもらえるかもしないのに、このやる気のなさはなんなんや……

「わい、わいわいとメシメシ」

早々に口常に立ち戻ったキルミヤは、『補題』の事などきりと忘れ去っているのだ。

一緒に襲われたところに、あさりと口常に帰つてゆく能天気なその後ろ姿を見たこと、侵入者について悩んでいた俺が馬鹿み

たいに思えて、笑いが出てきた。

命を狙われて身体を動かせない程の死の恐怖を味わったというのに、もう笑えている自分が可笑しくて、せりに笑いがこみ上げてきた。

「お前そればっかりやな。補習の事忘れるなや。それ以前に着替えやけど」

キルミヤに追いつき、スパンと頭を叩いて痛がるふりをしたところを襟首を掴んで逃亡を防ぎ、ずるずると進路を食道から寄宿舎へと修正して引き摺つて行った。

第十二話 いいえ小心者です

俺は青年の口を塞ぎ、身を潜めた。

例の精靈さんとやらが運んでくれる声やら音は、体力が戻った後は元気よく復活してくれた。

以前ほどの喧しさでないのは救いだつたが、それでも授業中に教師の話をまともに聞く氣も失せる程の威力はある。

基本的に、俺にとつてはうそざり要素の超高性能地獄耳だったが、ごく稀に役に立つ事もある。

- ?まだ見つからないのか?
- ?申し訳ありません。舍の方には……?
- ?結界場かと。ここまで入つて特定出来ないとなると?
- ?他にも同様の箇所はあります?

一言で表すなら、不穏。

数ある雜音を電源オフにして聞き流しているが、その声は嫌に耳についた。

言葉自体は咎められるようなものではない。が、声の質とでも言うのだろうか。それが不安を搔きたてたのだ。

それにしても結界場かあ……

結界場には同期生がまだ授業をしているだろう。本来なら、俺も

そこに居る時間だ。

いやあでもなあ、俺がらみじやないよなあ……？

嫌な汗を搔きながら、一先ず声の主が近くに居ない事を確認していると青年がもがき出した。

「静かに」

ここで見つかって、青年を庇いながら複数人勝負するといつマジい趣味は持ち合わせていない。

「お前はここにいる」

下手に動かれて鉢合わせするよりはこのままジッとしていた方が安全だろ？

その間に相手を見つけて様子を伺えば誰が目的かも検討つく。と思つた。

伊達に雑音に苛まれ続けていたわけではなく、ある程度は音の発生源を割り出せる。さすがに耳の前というか、周囲の音かはるか彼方の音なのか区別がつかなければ日常生活は送れない。そこまでの道のりは今さら思い出したくもないが。

過去の黒歴史をちょっとぴり思い出しかけていた俺は、人の気配を感じて速度を緩めそつと木陰に身を寄せた。

？結界の可能性があるのは？

？療養室と教師塔、それから結界場です？

？三手に分かれますか？？

大当たり

覗いた先にはご丁寧にも顔を隠した男が三人、ぼそぼそと囁き合っている。どこからどう見ても堅気の人間ではない。

ビーフシチュー。ビーフシチューかー。ビーフシチューかなー。

ああ俺、昔に比べて呑気になつてきたなあ。ガキの頃は慌てまくつておっさんとの駆け込んで呆れられて。

「うんうん。俺悪くない。」
気になつたのは環境のせいであつて俺は悪くないよな?

自問自答で一人満足感に浸つていると、有り得ないものが視界に飛び込んだ。

群青色の髪から零を垂らしたままの
おせいかい青年が息せきぢ
らして走つてくる姿。

כ' ע' ג'

俺は素早く奴の口を塞いで木陰に押さえつけた。音を立てなかつた俺を褒めて欲しい。本当に、褒めて欲しい。

「何でついてきたんだ！」

青年は空気を察してか今度は抵抗を見せなかつたが、そのかわりとばかりに眉間にくつきりと皺を刻んで睨んできた。

睨むな。睨むのは俺の方だと言いたいのを我慢して口を塞いだ手をどける。

「こちなり走り出すからや。じゃないした」

青年にひとつては説明不足だつたらしい。

俺の所為か――――――！

? あまり時間はない?

ああくや……あぢりあこは動いこじしてゐる……

焦つてこるとこつのに青年は緊張感の欠片も無く頭を出でつたので慌てて押さえつける。

もつ一度睨まれ、仕方なく事情を説明する事にした。

「どうも学院とは関係ない部外者が侵入しているよつだ」

「はへ。」

突拍子もない話に皿を点にした青年。
百聞は一見に如かず。論より証拠とばかりに、あまり顔を出すな
と注意して様子を見やせん。

「なんやあこじひ」

よつやく青年も事態を理解してくれるが、そんな『どうこつ事だ
これは』といひ顔を俺に向けないで欲しい。

「分かんねーよ。けど……」

「けど？」

「誰だ！」

「づづー！」

うめき声はからうじて抑えたものの、勘づかれてしまつては隠れても仕方がない。

青年を見れば、顔色が面白いぐらに急降下して真っ青を通り越し真っ白になつてゐる。

さあこの青年に向かつて逃げろと言つてきちんと逃げ切れるだろうか？

答えは明白だ。俺自身が恐慌状態に陥つた事があるから言える。高確率で、身体がまともに動いてくれない。

その状態で覆面男の内一人でも追われたら、まず逃げ切れない。

どーせならこいつの場面は美女がいーんだけど……

「お前、ここから絶対出ぬなよ。いいか、絶対にだ」「え、おまつ」

青年を置いて俺は木陰から姿を現し、相手に認識させた。男は三人とも剣を履いてゐる。こちらは素手のみ。

今さらだけどまづくない？ ねえまづくない？ これ、死亡フラグ？

「……学院の生徒、か」

くぐもった声で呟く覆面の男に俺は言いたい。

学匠である青色の上着を着ている者で、学生以外に何があるのでと。あんたのボキヤブラーは枯渇しているのかと。

言つてもスルーされそうなので、俺は絞つたらたっぷり水が出そうな上着を外しつつ、男たちの左手に移動するようにゆっくり移動する。

「おっさん達、学院の人じゃないよね。すんげーあやしいしー」

俺の軽口に覆面の男たちは視線を交し合っていた。殺るか？ と。リーダー格と思われる男が視線で肯を現し小さく頷いた瞬間、男たちは剣を抜き放った。

あはははは。きたよ。まじできたよ。やつべ……

俺は笑いそうになる膝に力を入れ、接近してきた男の間合いを外すように後方に下がりつつ途中まで脱いだ上着の袖を勢いよく抜いてよじり、振り下ろされた剣先を受け止めつつぐるりと一巻して剣の腹に肘を当て、そこを支点にして身体を捻り相手の手から剣を放させる。

それでもプロはプロ。戦意を失うどころか増して蹴りを繰り出してくるのを避けて、手から離れた剣を掴んで懷に入り距離を取られる前に剣の柄で顎を下から思い切り殴りあげる。

まずは一人だが、よっぽどお仕事大事なのが味方ごと殺してしまおうと後ろから襲いかかってきている気配に溜息が出る。でも連携はあまり取れていない。リーダー格の男が連携に加われば逃げ道が無くなりそうだが、俺の事を過少評価してくれているのか動こうとしているので、これぐらいなら大丈夫だろう。

「後ろー。」

えー？

青年の声がした事に一瞬反応が遅れるも、俺は気絶した男を掴んだまま横手に飛んで背後からの攻撃を避ける。

「…………もう一人居たのか」

リーダー格の男は眩き、姿を現した青年を見た。

「…………」

「馬鹿が！ 動くなつて言つただろー！」

「つるさいー 危なかつたやううがー！」

怒鳴つたら怒鳴り返された。

え？ え？ ここ俺が怒鳴られるとこ？

ちょっと動搖しつつ、でも素直に受け取れない年頃（身体年齢）の俺はさうに怒鳴る。

「俺は平気なんだよー 前に心配されるまでもないんだよー いいからとつとと逃げるー。」

「なつー 前を置いて行けるかぼけー。」

青年。そーいつセリフは女の前で………言つちやうだめだな。言つて事は女を戦わせてるつて事だよ。何してんだよ男が。

氣絶した男をポイ捨てしてると残つた覆面男一人は視線を交わし、リーダー格は俺に、もう一人は青年へとロックオン。

俺は一気に間合いを詰められて一瞬にして鍔迫り合いに移行した。一撃を受けた瞬間にびりびりと手が痺れ、せり合う今も馬鹿力で押され、少しでも力を抜けば剣ごと叩き切られそうな勢いだった。

それなのに視界の奥では魔導書を投げつけるだけで精一杯の青年の姿に入る。

命をかける事など貴族の青年には無かつた事だろう。本を投げるという事だけでも動ければましなのかもしれないが、結果が伴わなくては意味が無い。

ああもひ……

俺はガクンと膝をつき、男の重心が前のめりになつた瞬間横に転がり起き上がりざまに剣を投げつける。追撃をかけようとした男は難なくその剣を弾ぐが俺にとつてはそれで十分。手のひらを天に突き出し叫ぶ。

「其は波動の素 零々のゆえんだる汝をここへ！」

声に応じるようにして俺の手のひらに火炎が生まれる。

驚きにか目を見開く男に向かって、俺はそれを全力投球した。

「うううーー！」

唸りを挙げて業火へと膨らんだ炎は一瞬にして男を喰らい、さらに青年に迫つていた男も飲み込んで、その向こうに続く林の木々も包んでさらなる姿へと変貌しようとする。

俺はもう一度手のひらを天に突き出し叫んだ。

「其はやすらぎの源 零々のゆえんたる汝をこゝへー。」

あああああああ

今度は吊きつけるような雨が一体を襲い、広がる炎蛇を消し去る。

炎が通過した後は黒く炭化していたが、残念な事に男の姿はあつた。

さすがに無傷というわけではなく、焦げた服の間から覗く皮膚は赤く爛れている。

「お前らの相手は俺だろ」

これ以上やるなら、俺は手段を選ばない。

俺の本気に、リーダー格の男は目を細めた。

「貴様、白の宝玉の仲間か

俺は答えず、弾き飛ばされていた剣を拾い、構えた。

「……退くぞ」

リーダー格の男が小さく言つと、もう一人が氣絶した男を抱えて林の中へと消えた。

俺は黙つてそれを見、気配が学院から遠のいたところで手にした剣を捨てた。

固まつたままの青年の所へ行こうとして、上着が落ちていてのんびりと氣付いて拾つていく。

「あーあ、ほろほろ……」

なかなかに高価らしい学匠の上着は、広げてみると刃を受けたところが切れて穴が開いていた。

荷物の中に用意されていたのは一着なので、もう一着が駄目になつたら面倒だ。

「お前……やつをの何だよ」

「ほれ行くべ。ここに居たら面倒だ」

さつきの炎といこ水といこ、遠田でも派手に見える。ぐずぐずしてこると教師達が駆け付けてしまう。

俺は青年の腕を掴みその場を離れよつとした。

「なんだつたんだよやつのはー お前……魔術

「下手なんだよ。突つ込むな」

心底突つ込んでほしくない。

分かつていていたから使いたくなかったのだ。

「下手!/? あれで!/? ビニガヤ!—」

「声でけーよ。あいつらは引いたと黙つたがそんな騒ぐなつて」

「あ……」

不安になつたのか、後ろを振り返りきよりきよりしてこる青年。

あ、まずつた。まだ恐慌状態に近いわ!—

「おーおーおー。だーいじょーぶだつて。あれはせつてー引いたか

「ひ

盛大に呆れて見せれば、怯えた目が俺に救いを求めるように向ける。

「これが美女だったら 美少女でも可。幼女……も、可 ガツツリ攻めに入るところなのだが、不幸にも相手は青年。

「そつ……なのか？」

「ふふ。こわがってやんのー」

びびりまくっている青年の頬をぐりぐりと突いてやると、凶悪な目をして叩き落された。
地味に手が痛かった。

「うわー！ それより、さつきのはじりこいつ事や」

じういつ事も何も事の成り行きは青年と一緒に見ているのだから、それ以上はない。

何を言わんとしているのか分からず首を傾げる。

「なにが？」

「とほけんな。何で魔術が使えないふりしてたんや」

ああそつちかと納得する俺。

「あーひつぱるねえ。しつこい男は嫌われるよ？ 女の拒絶の言葉は半端ない威力なんだよ？」

「話かえんな。何で嘘ついてた」

……嘘？

「嘘？ 嘘はついてないって」

ないない、本当ない。

俺嘘つかない。

嘘つくイコール後が怖い。

俺チキン、イコール嘘つかない。

「ついてるやろー。魔術使えないふりして」

あーなるほどね、君の中ではふりも嘘だという事かあ
そう言われちやうとそなうなんだけど、でも使えませんって血口申
告するような言動は取つてないつもりなんだが。

「してないしてない。使うのめんどーだから使つてないだけ。使え
ないなんて言つてないだろ?」

確認してみるが、青年の凶眼は悪化の一途をたどるばかりで改善
傾向は一向に見られなかつた。どころか、なにやら黒いものを滲ま
せて來たので俺の本能がヤバいと訴え、慌てて言葉を追加する。

「んな怖い顔で睨むなよ…………あのな、面倒だから言つねば、本
当に巫山戯てるつもりはないんだよ」

「へえ、そうなんか?」

青年の笑みが黒すぎて怖い。生ぬるすぎて怖い。
あまりに怖くて、俺は言つ氣ではなかつた事までしゃべつてしま
つた。

「さつきの術、俺はあそこまででかくしよーなんて思つてなかつた
んだよ。だけど、制御が効かない。小さいものになればなるほど制
御から外れるから、人前じや出来ないんだよ」

「」の火と水の魔術、元はさつさ授業で見たよつに些細な効果しかない初級魔術に位置する。それがどこをどう間違えばああなるのか俺自身にも分からないが、俺がやるとああなる。授業中に大真面目にやろうものなら蠅燭一本どころか何人燃やすか分からぬ。つまり、千人切りコースは無理。味方巻き込み自爆コースなら可。といつ無能な俺。

「もしかして……だからか？ 授業で」

「細かい作業は昔から苦手なんだよ。ほつとけ」

俺が視線を逸らせていると、くすくすと声が聞こえ、見れば青年が呆けた顔で笑っていた。

「何笑つてんだよ。氣色悪いな」

「何でもないわ。…………なあ、さつきの奴らを知つてゐるのか？」

笑われたのはまあいいとして、俺は心当たりを一つずつ照らし合わせてみる。

あの手の問題を引き寄せるのは俺ではなくてグラン。これまでにも何度かページェス家の周りをうろちょろしている者は居たが、どれも偵察という感じですぐにグランの手の者に潰されていた。

「分からぬ。多少の心当たりはあるけど、どうせそれとは違つたような……」

「心当たり？」

「グラン関係だよ」

「グラン……お前の兄貴か。ああなるほどな。出世頭だから敵は多いかもしれないな」

「だけど俺の顔を見ても反応してなかつたんだよねえ……。ま、

なんにしてもやつきの事は誰にも言つなよ「みづち

「何でや? 教師には話さな。そうすれば警備を強化してもらえるやろ。犯人だつて捜してもらえる」

そりやあ捜すだろ? が、相手が相手ならそれも意味が無いだろ? それに学院に対する行為でないとなれば、各家の問題で、そこは自分ところで後始末してほしい。

学院の責任もあるかもしれないが、それに振り回される他の生徒はいい迷惑だらうし余計な不安を与える事になる。

襲われるかもしれないっていう圧迫は結構きついからな……

無駄と思いつつ、俺は反論してみた。

「それは無駄だろ。ここにはあのサジュなんとかつてぼっちゃんだとか、お偉いさんの子供がいるんだ。ざるな警備をしてやないさ」「だからと言って、このままにしておくなんて出来るか? お前だつて狙われるかもしれんのやで?」

……あ、そゆこと。

確かに田撃者の俺と青年は口封じに狙われる可能性はある。俺はグランの事があるから今更氣にもしないが、青年にとつてはどんな言い話だ。

「……な、なんや

「はあ……まあ、そうだよな。俺たちが標的にされるかもしれねーし。わかつたよ。お前の好きにしろ。但し俺の魔術については黙つてくれ

「何でや? 教師に相談すればいいやろ

恥をさらせないと。」冗談ではない。

「なんでもだよ」
「……なんやそれ」
「わい、さつさとメシメシ」
「シメシメ」とささやく。

それ以上の追撃を遮つて俺は元気よく歩き出した。

「お前そりゃっかりやな。補習の事忘れるなや。それ以前に着替え
やけど」

頭を叩かれ、襟首掴まれて邊じの食堂から遠ざかってしまう俺。

……そろそろ、いいかな？

……いこよね？ もういこよね？

俺はするすると引き摺られながら、長く息を吐いた。
緊張を解いた途端、ガクガクと膝が笑いだした。

第十四話 要らないオプション

あ～やばかった。

ああいつ切つた張つたは俺は向かない。『デスクワークならどんとこいだ。

本当にどんと仕事を置いてくれた閻魔様は鬼だつた……血色の存在意義が掠れてたな……

ひつりでは本当の意味での『デスクワークは限られる。流通、産業、工業、農業、畜産、全てが人の手に頼るためデスク中心に仕事をする人間は殆ど居ない。居るとすれば高官ぐらいだらうか？

就職するなら窓際デスクワークがいいなと思うけれど、そちらの道は果てしなく遠い。仮に成れたとしても国家に雇われるのには何かと面倒そうなので却下。

それならば身体を動かして働く方が気分も良く性にあつていい。もちろん安全な仕事で。

でも地元だと身分が邪魔して職にはつけず というか、基本的に職は親のを継ぐ形となつている為、領主の実子とそれでいる俺が働ける所なんて最初から限られている。家の仕事か、王宮へ出仕するか。

ページェス家の仕事をすると周りが顔を顰めるのでアウト。王宮へ出仕するなんてチキンの俺が出来るはずもなくボツ。そしていつの間にやらこんなところへ放り込まれている現状。

グランの『期待には添えそうにもないが、勝手に期待したのは向こうなのだから、ここでどれだけ俺が落ちこぼれであるうとそこまでは知つたことではない。最低限、人としての常識ラインは保とうと思つが、それ以上は知らん。

段々むかつきが再燃してきたが、いい加減よれよれだ。

剣を向けられるなど、前世で例えれば夜道で笑^いつてるオッサンに包丁向けられるぐらい怖い。獲物が長い分恐怖心も増す。前世の記憶保持者の転生者ならば何か特殊能力持つとけよと思つが、あるのは地獄耳と疲れやすい身体。

地獄耳と疲れし易いって嫌がらせのオプションかよ。

地獄耳はどうやら精霊さんとやらが関係しているようなので何か能力的なようなものだともとれるが、実益と不利益を天秤にかければ不利益に大きく傾く。

加えて疲労しやすいこの身体。

今年十七となる年齢を考えれば、二十歳超えて仕事をしていた前世よりスペックはいいはずなのに、その時より格段に身体が疲れるときた。

いや……まあ……前の生は疲労を氣の所為だと決めつけられてただけかもしれないけど……

氣の所為だとしても、実際に身体が重くなつて動かしにくくなるので性質が悪い。

七歳とか八歳とか、まだ小さい頃はこいつ事は無かったのだが年を経るにつれて悪化している。かといって、どこか具合が悪いわけでもなく、たらふくご飯を食べれば回復する。もしくは糖分を摂取すれば。

あれ？ ただの成長期？ いじきたないだけ？

ううんと前世の十七歳、高校生の時を思い返してみるが、何か馬

鹿やつていた事しか思い出せず比較にならない。

ただ、買い物いはよくしていたので推測はあたつているのかもしない。こちらでは高カロリーな食事はおいやれと口に出来ないの

で。

「うんうんと考え事をしているうちはいつの間にか自分の部屋に放り込まれていた。

暫く床に寝転がつていたが、いつまでもこのままというわけにもいかない。へたばつている身体をすりすりと引き摺つて引き出しから皮袋を取り、中から薬包を取り出して中身を口に入れる。口の中に広がる甘味を飲み込んで一息。

あのスレンダーさんが砂糖をくれたのには驚いた。純粹な糖は滋養剤で値段も張るのに、一介の学生にあんなにも簡単にくれるとは思わなかつた。出来れば定期的に頂きたいぐらいなのだが、こんな高級品をそう何度もくれるのだろうか？

「着替えた 何やつてんねん」

俺は寝転がつたまま入ってきた青年を見上げ指をさした。

「部屋に入るときはノックする。常識だろ」

「はあ？ 今更お前が常識言つな。寝転がつてないで着替え。ほら

ほら

青年に急かされ、しぶしぶ俺は身体を起こしてもぞもぞと着替えた。

それを見ていた青年が深い溜息をついていたので、俺は親切心を出した。

「溜息ついたら幸せ逃げるぞ」

誰のせいや

「ンマーも無い綺麗な即答は俺に匹敵していた。

この短時間でここまで技を磨いて来るのは、あなどれん。

「お前……今アホな事考えたやろ

「はあ、何いつちやつてんの？ なんも考えてねーよ。なになに？」

「じ……じいし？ なんで毛ええわ。おちょくつてないでさつさと

行くで

「どうして、ヴェルダ先生のところや」

中三ノ川外傳

「なんで？」

たんてつて

俺はパタパタ手を振つて青年の言葉を遮つた。

青年の眞面目によく分かた。それを止める気はない
のだが、ちよつとね、俺にも限界というものがあるというか。

「俺も一眠いのよ。ほんとも一起きてらんないべりー眠くつて眠く

「それでみれば俺の田はとんと寝てないわけだ」

「ええ！？」

「アーティストの才能を発揮するための環境を整える」

「夜！！！
夜以外にあるかあ！！！！！」

「ふつ……。歳年はおじいちゃんまだな」

「何!? 何の話してんの!?

「え?
聞きたいの?
もう仕方が

「すんな…… まつな…… 聞きたない……」

段々と興奮してたらしい青年をビービーと罵ほひあつてゐるところへ、いつの間にか、

「落ち着けよ。発情するなって
するかっーー！」

頭を叩かれ、俺は叩かれたところを搔きながらそれでも人生の先輩として忠告した。

「つたいなー。いきなりはだめだなー。もっと丁寧に優しくだな
「変な言い回しすんなー。」
「え？ やつだー。何想像してんのー。きやー不潔よーへんたいー
「お……おまつ」

青年は顔を赤くして口をぱくぱくさせている。

面白い。実にからかいがいのある奴だ。と、遊んでいる場合ではない。限界というのは[冗談]でも何でもない。

「悪い。ほんと寝させてくれ。後でモモリでもなんでもするから」

言つてさつさとグッズに潜り込もうとして足元がふりついて豪快ダイブを決めてしまった。

「……以前、やつやので」

急に声に不安が混じったが、俺の意識はもつ離れかけていた。

「いや～怪我はしないよ～」

「怪我以外にあるなんか？」

「こいつ……微妙に鋭いな

と、思つたとこりで俺は気持ちよく枕を抱き込んで寝ついていた。

青褐色の真っ直ぐな髪がさらりと顔に落ちる。

眠るその顔は見慣れたもので、しかし何時まで経っても慣れないと俺は思う。起きている時は言動が邪魔をしていて造作に気付かせない為、眠っているその顔が一番、元の造作が分かつてしまうのだ。

にやにや笑いを浮かべず、呆れた表情も浮かべず、静かに眠る無防備なその顔は、すつきりとした鼻梁に薄い唇、形の良い眉に涼やかな切れ長の双眸。色は白く肌は深層の令嬢の」とくキメ細やかで、ひょろりとした身体に長い手足。

痩せすぎのきらいはあるが、間違いなく麗人と言われる整った姿を保有している。だが、それだけではない。

貴族には見目の良い者は多い。サジエス家の者もそれに含まれる。金髪碧眼という貴族で持てはやされる色彩を持つフェリア・サジエスも上の兄たち程ではないが、顔良し家良し将来性在りの三拍子そろった嫁ぎ先候補の上位にあがっている。

しかし、キルミヤ・ページエスはそういう類とは違った。

薄い紫の瞳を細め、窓の外を気だるげに眺めていたその姿は孤高。他者を寄せ付けず、ただ一人己の道を見据え進む気高い狼。

そんな印象を、初めて会った時に受けた。

どこか現実離れをしているようで、別の世界の住人のような空気があつて気になつて目で追つていた自分が居た。

蓋を開けてみればどこが孤高、どこが気高いのだと己を罵倒してやりたいが、それでも眠っている時は同じような印象を受けてしまう。近寄りがたく、触れてはならない存在のようだ。

「お前の兄も似ているんかな……」

もしそうなら出世頭として噂に名高いグラントの事も、その噂通りなのがもしかないと頷ける。

周囲の出方を伺い、虎視眈々と狡賢く立ち回る普通の貴族には無い異質な空氣。もしそれを兄も持っているといつのなら目立つだろう。そしてそれがプラスに働けば、人目に付き出世のチャンスを掴んでいける。

「お前もなんやかんや言いながら、そっちに行くんかな……」

あれほど高威力の魔術を操ったキルミヤであれば間違いないく、その能力を高く買われるだろう。自分では行けそうにない世界へと樂々行ってしまうのだろう。

なんとなく置いて行かれるような悔しい気持ちもあったが、巫山戯た言動のキルミヤがそうなった時もこのままいるのか見てみたい気持ちもあった。

第十四話 要らないオプション（後書き）

知り合いに27時間勤務という笑える数字をたたき出した人がいました。

特定の職業では「あ～あるね～」だそうです。

さすがにそこまでではないですが、作者は先週から今週にかけて息絶え絶え状態。何度も徹夜を覚悟したことか……帰つても呼び出し頂きましたし……

皆様も睡眠だけはきちんとお取りください。

第十五話 クロワッサン

魔道学院へと放り込まれてただ一つ良かつたと言えるのはこれだ。

肉つ氣さいーーー！

ページエス家は財政難。グランがいくら出世街道に乗り始めてい
るといつても、長年積りに積もつたものがたかだか数年で振り払え
るはずもなく、ガツツリ肉つ氣のあるものは殆ど食卓に出なかつた。
飢え死にする事はどうにか無かつたが、それでも居候の身として
はちょーつとばかり悪いなあと思つていた。何の役にも立たない生
産性の無いお荷物を抱える程の余裕は無いと分かつてゐた。
グランには何でそんな食事しか出さないのだとキレられたが俺に

キレられても困るし、てめえの家の財政状況具合把握しろと突っ込みたい。それにたらふく食える時点で恵まれてるので文句の出ようはない。

「ほざもなーいが やつぱり肉つていいねー！」

もしゃもしゃと肉の塊を口の中で砕く。

肉の、塊を、が重要。

「何？ 肉の塊つて何？ 肉つて塊なの？ 塊だつたの？ 塊になつちゃうの？
まつてまつてまつて、なんかうまいうまな汁が口の中に広がるんですけどーー！？」
「なんすかこれー！？ なんすかこれってーー！？」
「あ、うますぎて涙出てきた。

「……毎度すじこ顔するんやな」

青年が疲れ切つた顔でフォークを置くので、すかさず俺はリッテン牛に似た生き物で豚の味の香草ソテーをかつさらい、奪い返されてなるものかと口の中に入れてしまつ。

「あー 何でとるんやー！」
「いーだろー ほーせいつはいあるんだし」「良くないわー 口に物入れてしゃべんな！」

「どこのおかんかおまえは

「早つ！呑みこむの早つ！お前の口どひなつてんのやー…？」

「はつはつは。地元ではまさに歩くばきゅーむかー……もとい、ブ

ラックホールと呼ばれていたのだよ

最終兵器

あつぶね、ばきゅーむかーて真逆だよ。やべーよ俺、脳細胞死んできたか？ 通算四十四年も酷使すれば……やうこや何で前世の記憶維持してんだろ？ 脳細胞が赤子のものならそのなかに前世の記憶が保管されるなんて事はないよな？ 細胞分裂繰り返しての最中に電気的信号がどーたらこーたらで造り上げられたのが前世の記憶だったりしたらかなり恥ずかしいぞ俺。さんざん前の生はーとか繰り返しておいて実は思い込みでした。とか痛い子だわ。

「最終兵器なあ……」

二回田のおかわりをしてきた俺は何やら眩いでいる青年を気にせず、二度田の合図をしてうまうまな夕食たちを口の中へとせつせと運ぶ。

「お前、身体の調子はいいんか？」

「はにが？」

「だから呑みこんでからに」

「お前のタイミングが悪いんだろー」

「……つ当たり早いな」

「なんだよなんだよ。何つづふしてんだよー。髪がじはんたべちやうぞー」

「食べるわけないやん」

「きみきみ、人に注意しておきながら髪がじはんこ、おいしそうなごはんに、すゞくおいしそうなごはんに、触れてもこいと？ それはマナーに反してないと？ 人の道に反してないと？」

「お前の突っ込むポイントがわからへん……」

疲労困憊^{ひろうくんたい}ここに極まれりといつ顔で片肘ついて食事を再開する青年。

そうね。『飯は頂くものだ。粗末にするものではない。

「うー、いいかしら?」

グリーンサラダとドルト　　牛肉っぽい何か　　の煮込みをエピ
麦の穂の形をしたパン　　を挟みつつバランスよく食べていて
いると声がした。

顔を挙げれば、おなじみ貴族^{きしゆ}の十三四頃の少女が居た。成長途中
といった感じで凹凸^{おうとう}に^おしかつたが自己主張はかなりでっぱつてい
るようで、視線を向けたままノーリアクションの俺を軽い苛立ちを
込めた目で睨んでいる。

「」は食堂で、学生は決まった時間になると適當な席で食事をす
る。第七学年まである学院の総生徒数は一百弱。従つて食堂もかな
り広い。広いのは食堂だけではなく魔道学院そのものだが、とにかく
わざわざ相席をしなければならない程席が埋まつてしまつてはい
ない。現に彼女の『』学友と思われる数少ない女子生徒たちがちらち
らと近くの席からこちらを伺つており、そこには丁度一席空いてい
る。

「あつむじやないの?」

青年も「」と人形のように首を縦に振つていて

奴が何を考えているのかは知らないが、俺としてはバイキング形
式を最大限に生かしてウェイターとして培つた技術を活用し並べら

れるだけ並べて置きたい。今は四度皿のおかわりに備えてラスト一皿を残し食器は重ねて片付けてしまっているので、空いているように見えるが、俺にひとつては空いていない。

「いいのよ私は」

「つていうか、何でお前も俺の前に座つてんだよ」

奴がいなければもつと料理を並べられるのに、ちょっと皿から肉をくすねるだけで許している俺はなんと心が広いことか。

「え、今更！？」

「今更もなにもあるか。お前がいるから皿がおけん」

「はあ！？」 こんだけ置いておいていうんか！？

前菜から既に五パターンも存在していたため、全料理制覇するために片つ端から置いた皿の数は八枚。総数は今の所二十一。青年が居なければ一度に十一枚は置けるのでデザート取りに行く一回分ぐらいいは損している。

「ちょっと……」

「全然足りん。お前の面積分取つてぐると言つのなら許してやつてもいいが」

「なんで俺が給仕の真似事せなあかんねん！」

「ちょっと！」

なんではないだろ？ 常の俺であれば既にデザートに取り掛かっていてもおかしくないというのに未だ主菜の段階というのは明らかに青年が居座つてているのが原因だ。

俺はビシッとナイフを青年に向かた。

席料だ

「んなもんあるか！！」

「ちょっと人の話を聞いてるの！？」

「俺がいつお前が座つてもいいよつた？」
何時何分何十秒？」

「毎度毎度ガキかお前は！」

「話題のすり替えか？」 罪を認める

「何の罪!?

「俺の食事を阻害する事即ち罪なり。俺を殺す気か？」

「そんだナ食べててまだ言つとか！」

「人の

「ふつ、ブワッ、カバーラのN級魔羅では、二のジヤウガ魔羅片、最終兵器

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ

「語彙力」――――――――――――――――――――――――

バン
ガン

衝撃が俺達を突如として襲つた。

だつた。

「うちは角だよ。いてーよ。ふつーにいてー。魔導書に続いてト
レーッて。今後も続くとかないよな?」

俺はふうと一つ息を吐き、紳士的な態度を心掛けて少女に向き直る。

つた。

「角はね、凶器になるんだよクロワッサン。そもそもなんでそんなに巻いちゃつてんのクロワッサン。クロワッサンもびっくりな程のクロワッサンだよす」『よクロワッサン』

クロワッサンとはパンの一種で、パイ生地に似た触感でくるくると巻かれている前世で見たまんまのアレなのだが、それを再現しているがごとくのくるんくるんの天然ロールを俺は初めて見た。

「く……くひわっさん？」

俯き加減で呟いたクロワッサンの声は小さく聞き取りづらかったが、何故かザツと周り中で血の気が引く音がした。
よくわからないが、食事を中断させられている状況は嬉しくないので回れ右をしていたために俺はさらに丁寧を心掛けて少女を諭した。

「それにねクロワッサン
「誰がクロワッサンじゃーー！」

脳天を貫く二度目の衝撃に俺は意識を手放し

第十六話 クロワッサンではありません

て、たまるか。目の前にメシあるのこそれを放置するよいつな真似はこの俺の本能が許さん。

「んつふつふつふ……」

「な、なによ……」

笑い出した俺に、クロワッサンは一瞬たじろぐような顔をしたがグッとその場に留まつた。

俺は平和主義者で温厚な性格。基本的には争いとか嫌いっていうか面倒くさいからパスする。
が、メシがかかると言つならば辞さない。

ガツ

「だつ」

椅子を蹴立てて立ち上がりした俺は頭を捕まれ、力任せに押し戻された。

「ちょ青年？ こきなりされると首がぐきつくなるんですけど」「ああああの、こんなとこひで良ければどうぞどうぞ」

慌ただしく立ち上がり既に空いているところをさりに整頓しようと意味不明に食器を動かしクロワッサンに席を進める。

「おいら青年。地味にスルーするな。謝罪を要求する。そして席を勧めるな。面積が減る」

「だああー、お前は黙つとけ！―― 取りに行くから―― 行くから黙れ！――」

「じゃ『デザート』ね。全種類で」

「お……おひ」

顔色が悪いままふらふらと『デザート』取りに行つてくれる青年。なんだかんだ言って根が素直ない奴だ。

クロワッサンがそもそも当然の顔で座る結果に対しても減点だが。

「キルミヤ・パージョスよね？」

クロワッサンはトレーを置くと食事に手を付けようとせず手を組んでこぢからを見た。

見るのは構わないんだが、お前トレー一つ持つてたのか。『飯載』せてるのと空のと。

片手で『』はん持つて片手で殴るとか何気に力あるだろ。そして何故空のトレーを持っていた。まさか突つ込み用に常備してますとか？ どんな装備品だ？ あ、いやでも某RPGでトレーって装備品だっけ？ でも見た目から貴族の少女がそんなものを装備するか？ あーでもうちみたいな貴族もいるわけだし……

「苦労してるんだなクロワッサンも……」

「は？」

「いや、自衛手段の用意は必須だよな。誰かに守つてもうかるわけじゃなし」

「は？」

「でもな、そのトレー薄いから防御力は対して高くないと思つぞ」

「トレー？ ぼづぎょりょく？？」

「さすがに炭素纖維で編んだ防護服とかないと思つけど、『』なんぐら

いの太さの鉄棒の方が短くても刃物を受けるには適してゐるか？

「何の話してんのやお前は？」

「あ。青年、早かつたな……つて少くね？」

青年は肩を落としてトレーからティザートを載せた皿を置いた。

「お前みたいにじきょーさん持てるか？」

「えーー？ でもクロワッサン二つ持てるよな？」

「え？ わ、わたくし？？」

「さつさく片手でご飯持つて片手で殴つてただろ？ つてことは一つは持てるつて事だ」

「え、ええまあそうね？」

「つーか二つ持つぐらい誰だつて出来るだろー？」

「持てるとしても片手で持つたまま片手で料理取つて皿に乗せてトレーに置けるのはお前ぐらいだ」

「確かに片手が塞がつてゐる状態では難しいわね」

変などひで納得して頷くクロワッサン。

「んな事ないつて腕に乗せればいけるにける

「だからそれはお前だけだ」

「クロワッサンだつて余裕だよな？」

「さすがにそれは……給仕の者でもそういう持ち方をしてるところは見たことはないわね」

そりやまあね、お貴族様の前でそういう持ち方する必要はないけど街中じゃあ普通だと思うんだよ。ウエイター一人で注文と配膳してたらそつちやうんだつて。俺の先輩なんか人間じやない持ち方してたもん。

「え～～すーぐーなーいーぜんぶ」

「わかつとるわかつとる、まだ取りに行く途中や」

青年は、それからと腰を屈め耳打ちしてきた。

「田の前の方は第三皇女のベアトリス様や、アホな事ゆーてないで
ちゃんとし」

あそ。 皇女様ですか。

俺は食べ終えた主菜の皿を片付けて、青年が持ってきてくれたデーターントに手を付ける。

これまでに無くなりそうだ。

「……………アーニャ……？」

「うるさいわね。黙りなさい」

一
はい

言われるがまま沈黙を守るためにテザートを味わう事に専念しよう

「はあ……世間知らずと聞いてたけど私の顔も知らないとはね」

.....

「まあいいわ。私はベアトリス・ルイ・セントバルナ。知つての通

り第三皇女です」

「…………」

「あなたの事はグラントから聞いています」

「…………」

「聴いていた通りの様子ですが、どうして手を抜いているのです？」

「…………」

「少なくとも、初級詠唱魔術は丸暗記しただけで出来るように見受けられます」

「…………」

「聞いていますか？」

「…………」

「…………」

「沈黙を解いていいですか？」

「せいねーん。次はやぐー」

クロワッサンは溜息をついて食事を始めた。

「クロワッサン、溜息ついてると幸せ逃げるぞ」

「私はベアトリスです。クロワッサンなどといつ名前ではあります

ん

「細かい事気にするなよ～禿るぞ～」

「は、はげ！？」

「ほらほら、今は食事の時間なんだからさ。それともアボなしで人の時間を占有するマナー知らずと言うのかな？」

「あなた……私が皇女と分かってその態度ですか」

うん。まーそりや怖いよ。

クロワッサンの目は上の人の人目といつのか、従わせる事が当然と信じて疑わないそれなので、それで睨まれるとチキンな俺は怖いとなるよ。なるけどね、さっきグラントからとか何とか言ってたし？

グランがらみとなれば色々とこちらも考える事があるといつも。まあ八割がた現実逃避なのだが。

俺は完食して、紅茶をすすりながら青年を待つ。

「皇女だろーと何だろーと俺にとつては関係ないの。無礼だ何だと
言つたらお好きなよー元してくれたらいいよ」

逃げるから。

「……………そう。では皇女として聞いても個人として聞いても質問には答えてもらえないという事かしら?」

卷之三

「つぶね」

後頭部を叩かれて危うく紅茶を零しそうだった。

「トトと残りのトガートを置いていく青年を睨めば、睨み返さ

れた。

いや、いいんです。いいのですよ。おちんと戻つておいでくれただけで殴られようが蹴られようが許容しようじやないかー

「申し訳ありません。こいつ田舎者で礼儀も何も無いんですね」

おお。青年が標準語になつてゐるよ。

「かまいませんわ。私はここに在籍する間は皇女といつ身分で扱われる事の無いようにしております」

「ほー。その割には普普通してたような氣もするんだけど。

「それで、その……こいつが何か?」

不安そうな顔で青年がクロワッサンの顔色を伺う。クロワッサンは小さな口で意外とパクパク食事をしている。機嫌はいいのか悪いのか。先ほどまでの会話でいけば悪いだろうが、表情だけ見ればそうでもないようだ。見える。

「レフライ・ハンドニクス。あなたにも尋ねようと思つていました」

「お、わ、私ですか?」

「ええ。一昨日の晩過ぎ、ビニ居ましたか?」

青年は俺を見てきた。

分かりやすい反応をしてくれる青年だ。あんまり駆け引きとか折衝とかやつたことがないのだろう。

青年の年でうまかつたら、それはそれで怖いけど。

お好きなようにと肩を竦めて俺は新たなるデザートに取り掛かる。

「結界場です。一年は初めての実技でしたから」

「その後は?」

「ちょっとありまして寄宿舎に戻つて、次の授業で一棟に戻りました」

青年はあの侵入者の一件は言わない事にしたらしい。

「寄宿舎に戻つたのはあなた達一人だけ?」

「はい」

「その時、誰かに会わなかつた?」

「誰か……とは?」

「誰でもいいわ。教師でも生徒でも、それ以外でも

「いえ、特には……」

「では戻るときに火柱を見なかつたかしら?」

「いえ……何も」

「そうですか?」

クロワッサンは一つ頷いた。

第十六話 クロワッサンではありません（後書き）

ジーでもいいですが作者はクロワッサン（食い物）好きです。あの食感と風味がなんかいいんですよ。よくないですか？

第十七話 その名の通り試金石

「ところで王家に受け継がれる『試金石』という能力を知っていますか？」

青年は首を傾げ、申し訳なさそうに謝罪したが、クロワッサンは気にした風もなく話を続けた。

「試金石というのは金の純度を調べる時に用いられます。採掘した金の価値を測る手法としては容易で危険もありません

はあと相槌をつつ青年。

「王家の試金石とはそれに似たものです。

我が国は周辺国に比べて国土は大きいとは言えません。肥沃といふわけでもなく、基盤は鉱山資源に頼るところがあります。それ故に資源を守るために少ない人力で軍備をまかなう必要がありました。屈強な戦士はもちろんですが、それよりも一人で何百という兵力となる魔導師が必然的に求められ、それを見出せる者に権力が集中し現在の王家へと至りました」

御国のプチ歴史講座に、青年は盛大に戸惑っていた。

何が言いたいのか分からぬといつた様子で、それでも一生懸命考えているよひで言葉を返す。

「ええと……では王家の試金石というのは魔導師を？」

「そうです」

正解に、青年はホッとした顔をした。

「私たちは見ただけでその者の魔導師としての力を測る事が出来ます」

「それはすごいですね」

「生来のものです。特別すごいというものではありません」

息が出来るからといってあなたは『すごい』とは思わないでしょう? と、青年のよいしょをあつさり切つて捨てるクロワッサン。青年はどう反応していのか分からなかつたのだろう顔を笑顔のまま引き攣らせ、曖昧に頷いた。

がんばれ青年。あとでいくらでも慰める。だから頑張れ青年。俺はデザートが早く食べてと急かしてくるので手が離せないのだ。これさえなれば俺だつて青年の援護などいくらでもしたのに、実に残念だ。

「意識する事なく日常的に見ていますが、最近はあまり強い力をを持つ者はいませんでした。一昨日までは」

「一昨日ですか……」

「一昨日、学園の結界が揺れていきました。そしてその時、火柱があがつているのを見ました」

「火柱……」

「まさか初級詠唱魔術で結界が揺らされるとは思いませんでしたが、それを成した者の力は相当なものでしょ。それだけの力を持つ者が教師をしているだけというのは宝の持ち腐れだと思い聞いて回つたのですが誰一人として当てはまる者が居ませんでした」

「先生方ではないと……?」

「ええ。クレイスター・クライム先生がそうだと言わされましたが、彼の力ではそこまでの炎は出せません。良くてたき火程度でしょう。何故隠すのか分かりますが、仕方がないので学院にその日居た

者全てを対象として調査しました」

クロワッサンはナップキンで汚れてもいない口元を軽く抑えると、
「ちらにひたりと視線を合わせた。

要りません。その真面目な視線要りません。

「あなたたち以外、どこで何をしていたのか判明しています」
「…………」

青年頑張れ、沈黙しちゃ負けだぞ！

「一昨日、どこで何をしていましたか？」
「…………」

青年、いち見んな。クロワッサン、田つきじペーよ。

ああもう分かつたよ。

「先生に怒られて水ぶつかれて着替えてた」

「火柱は？」

「先生なんだろ？」

「違います」

「じゃあ宇宙人の仕業だな」

「う、うちゅう？」

「我々は宇宙人だと自己主張も甚だしい体格子供の極細生命体だ」
「ジ、せ、せいめいたい？」

「言っておくが探しても無駄だぞ。奴らはシャイで有名だ。会いた
いと思つている奴は会えなくて、へつそんな奴いるわけねーよと思

つている小心者の前に現れる

「待ちなさい。何の話をしているのです」

「え？ 知らないの？ 宇宙人は有名だよ？ 奴らの技術はとても
じゃないが真似できないと言わてるんだよ？ 火柱ぐらい簡単に
やつちゃうでしょ？ 空飛ぶ円盤持つてゐるならそんぐらい出来ちゃ
うでしょ」

「技術？ そらとぶ、えん？」

「まあ空飛ぶ円盤が奴らの持ち物だとは分かつてないけどね」

「一体何の事なのですか」

やや苛立つたようにクロワッサンがこめかみを抑えるので、俺は
追加説明した。

「空飛ぶ円盤つていうのは、まんま空を飛ぶ円盤状の物体のこと。
一般的に未確認飛行物体の一種とされてて、目撃された形態が円盤
型とか皿の形をしてる。常識的に考えて人工的な飛行物体と考えに
くい異常な形態のものも含める場合があるけど、まあそれはいいと
して、色は銀色。UFOいこーる空飛ぶ円盤つて言われる事が多い
けど、意味合い的にはUFOの方が科学的で空飛ぶ円盤の方がオカ
ルトちっくな感じかな？」

ちなみに空飛ぶ円盤が宇宙人のものだと確認されれば、定義上は
UFOじゃなくてIFOとなっちゃう

「……やっぱり分からぬのですが」

「まだまだだね～ 下々の情報は仕入れておいた方がいいよ。そん
じやうじやうわざま」

合掌。

力チヤカチヤと皿をトレーに片付ける。

「…………何をしていろのや？」「何つて片付け？」

「必要あつませんが」

うん。かわいい女の子が片付けてくれるのは知ってるよ。でもね、この量の食器を片づけさせのはしのびないでしょ。

「俺、男だしね」

「は？」

「勝手にやつてる」とだから気にしなくていいよ。じゃあ青年といふつくり

「え！？」

「それと、質問したければこくらでビール。

…………こくら青年を問い合わせても仕方ないと解つてるだろ？」「…………」

「…………」

無言になつた二人に肩を竦め、俺はさうあと食器を片づけに席を離れた。

俺はあんまり化かし合いというのは得意ではない。が、黙つてよいとしてくれる青年ばかりに押し付けるわけにもいかないだろう。ああいえばクロワッサンは直接俺を粗手にするだらうから、これで青年は大丈夫だらう。

問題は俺がどこまでクロワッサンを煙に巻けるかという事だけだ。

…………面倒だよなあ。

第十八話 追われるよりも追つ方が好みです

追いかけられるわ追いかけられるわ追いかけられるわ。お前はストーカーか。金魚のフン」とくしつこくしつこくしつこく。

有名人がついてくるものだから俺まで悪目立ちして何やかんやのやつかみを言われる始末。

どうもクロワッサンは天才と言われる類らしく、十一歳にしてこのエントラス学院に入り僅か一年で最終学年に進級している。卒業までは秒読みと言われ、上から男女男女男女と男女比率若干女高め兄弟の中でも希代の魔導師になると評判の末っ子。その名もその名も……その名も……なんだっけ？

なんかーその縦ロールが強烈すぎてクロワッサンクロワッサン言つてたらクロワッサンで定着しちゃったよ。

「なあクロクロ~」
「何ですかそれは。何度言えば分るんですか。クロワッサンでもクロクロでもありますん」
「便所ついてくるつもり?」
「…………やつかないと行きなさい」
「はいはい」

頼むから出待ちとか止めてね。

密室としか思えないよつなトイレに入りぼづーとしながら用を足す。

あー……もー……めんべー……
よし出よべ。

手を洗い、そのまま小窓を開けてよいせと身を乗り出しじゃーん
ふ！

と大げさに言つまでもなく着地。一階だから当然だ。

などと巫山戯ている場合ではない。クロクロに見つかる前にせつ
さと部屋に戻る。寄宿舎まで戻れば男女で分かれているのでさす
がに来ないだろ？

授業サボることになるがもういい。もう面倒い。寝る。疲れた。
つかあいつのおかげで既にサボり中。

「キルミヤー！」

泣いていいかな……

数十メートルも歩かないうちに前方から来るのは生真面目似非関
西青年。

「どう行つてたんや、次の授業始まるで！」

駆け寄る青年に俺はため息をついた。

「クロワッサンに例の」とく付け回されてたんだよ。巻いつとして
も巻いつとしてもいつの間にか現れるとかこわくね？」
「まさかさつきの授業中ずっと？」
「ずっとだよ。延々延々延々延々延々ずーっと。疲れたよ」
「そ、それは大変やつたな」
「ということで俺は帰つて寝る」
「なんでやねん」

青年にはたかれ、俺は膝をついた。

「え？ お、おい！？ 大丈夫か！？」

まさかはたいただけで膝をつくとは思つていなかつたらしく、慌てだす青年。

驚くべきことなら普段から優しくしてほしいなあ。

「いや……俺つてほら身体弱いでしょ？」

「侵入者を撃退しといてどの口が言つ

—え——

そういう問題ではないんだけど……

「もーいいから.....寝る.....
「は? 」
「で? 」

卷之三

するすると草むらに倒れこみ、身体を丸める。ビーセーは一棟と一棟の間の裏で誰も来ない。昼食まであと一
つ授業あるとなればもはや寝るしかない。

となりでござやーござやー言つていの青年を無視して俺はさつひと験を降ろした。

様子がおかしいとは思っていた。

授業中は寝てばかりで、それ以外も殆ど動く事が無かつた。怠惰だと言えばそれまでだが、僕にはそれが迫られてそうしているように見えて仕方が無かつた。

「待つてください」

キルミヤを起こそうとしたレライ・ハンドニクスを止め、草の上で身体を丸める青年の様子を見ると、思った通り、青白い顔色をしている。

「どうしたのです？」

一棟の影から現れた人物は、最近キルミヤに接触していると噂の第三皇女。

そういう事かと僕は理解した。

「病弱なものを執拗に追い回すというのは王族と言わず人としてにあるまじき行為だと思いますが、何を考えておいでなのでしょう。ベアトリス様？」

「…………あなたは？」

僕の姿を見て、皇女は眉を潜めた。

そうだろう。僕の容姿はこの国にはそうそう無い。この白い髪は少なく、そして黒い目をした人間はおそらく僕を除いて居ないはず。

「名乗つたところで貴族ではありますからお分かりにはならないと存じます」

「それは……私を侮辱しているのですか？」

「侮辱？　あなたは己の事しか見えていませんね。まっさきに出て

「あなたの言葉がそれですか？」

すつと皇女の表情が冷たいものとなる。

敵とまではいかないが、警戒相手と判断したのだろう。

それを見て、僕の心もますます冷えていく。

「田の前に倒れている者がいるというのに口に昇るのが名乗りだの侮辱だの」

それまでも顔を引き攣らせていたレライは、完全に色を無くして僕を見ている。

きっと彼の中では前代未聞の事態に思考が停止してしまっているのだろう。

階級制度の中に組み込まれた人間としては当然の反応だけど、あまり見ていて楽しいものではない。

「もうすぐ授業が始まります。お戻りください」

皇女は僅かに顔をしかめたが、それ以上声を発する事はせず、ちらを睨むだけ睨んで背を向けていった。

「あなたも授業に遅れます」「

「え……や、せやけど……」「こいつ」

レライは青い顔のままキルミヤを指さした。

この状況で彼を放つていかないところを見ると、階級制度に組み込まれているだけの人間とも評しがたいと言えるかもしれない。

「気にならないで行つてください。同室ですから面倒は見ます

「けど……」

「欠席すると後が大変ですよ」

彼は随分と迷っていたが、黙つて見ていろとやがておずおずと引いた。

「……ほな、頼むな」

「はい」

レイが走り去るのを見送つて、僕はキルミヤの隣に腰を降ろした。

林から抜ける風が涼しく、木陰になっているこの場所は昼寝にはうつつけだらう。

但し、眠る氣のある人間にとつてという注釈がつくけれど。

「今まで狸寝入りしているんですか？」

第十八話 追われるよりも追つ方が好みです（後書き）

あつぶしてそつ こうつ誤字訂正……

後、書き忘れていましたが、この感想、指摘ありましたらお願いします。

第十九話 一択だけど、ほとんど一択

うつすりと開いた瞳は澄んだ紫。

理知を示すその色に、不快に染まつた感情が静けさを取り戻す。

「そこまでなるまで付き合わなくともここなのでは？」

「付き合つてねーよ。ゼニをゼー見たらそうなる

「疲れた声音で言い、溜息をつくキルミヤ。

出会つた時から思つていたけれど、彼には違和感がある。幼子のよつな言動を取るくせに氣だるげな顔はじつと何かを考えているようだ。うに揺るがない。

「寄宿舎までは追つて来ないと想いますが？」

「万一来たら鬱陶しいだろ」

「それは……僕がどうしたことですか？」

「いや俺が。

男子寮に抵抗なく来るよつになつたら俺の安息地が消える

真面目なふりをして言つ彼が可笑しくて、笑いそうになつてしまつた。

どう見ても同室の僕を氣遣つてそつしなかつたとしか思えない。

「来ないだろ」と踏んでいのと、そんなになるまで付き合つのは

馬鹿ですね

「お前なあ、人の話聞いてた？ 付き合つてないって。追い回されてただけで。

それに少年。馬鹿つて言つた奴が馬鹿なんだぞ

「はい。そうですね

「……………つまらさん」

「すみません」

笑いを堪えて言つと、キルミヤは再度溜息をつき僕に背を向けるよつに転がつた。

地面につけた掌に返る熱を確かめながら様子を伺つが、まだ顔色は悪い。

こうなる事を分かつて受け入れたのかわけも分からずに受け入れたのか、そこは知れなけれど、少なくとも何も知らずにと/or事はないだろう。

「あれは言い過ぎだろ」

「え？」

「クロワッサン泣いてたぞ」

「くわいわっさん？……ああ皇女の事ですか。すみません、苦手なので」「苦手つて……大した拒否反応だな」

声に呆れが混じるが、弁明のしようもない。

それは僕も出さないようにしようとは思つてゐる。先ほどもあんな事を言つつもりは無かつた。だけど、あの眼を見た瞬間記憶が蘇り気が付いたら口にしてしまつていた。

「…………すみません」
「謝る必要はないけど、正論が通る世界はあんまり多くないと思つからなあ……」
「…………そう…………ですね。自重します」

「そんな素直な反応されるとわが身が痛いんだが」「痛い？ キルミヤさんは素直だと思いますが？」

「やめて……精神攻撃やめて……」

何故か顔を覆つてしぶしぶ泣き出すキルミヤ。

「冗談です」

「までこらでめえ」

起き上がり睨んでくるキルミヤ。涙の後などもちらん無い。それが可笑しくて、ずっと堪えていたのに笑ってしまった。

皇女の眼と正反対の暖かな眼が不機嫌に細められるけど、それでどちらとも冷たくはならない。

「少しほ楽になりましたか？」

尋ねると、キルミヤは目を瞬かせ、気付いたように頷いた。

「お前、何かしたの？」

「少しだけ。」

その体力の無さ、原因は分かっているようですね

「成長期だからな」

「そうですね」

「…………」

「…………」

「…………」「めんなれこ」

「あの、謝られても困るんですが

キルミヤはブスツとして胡坐をかくと膝に肘を載せてひどく行儀の悪い姿勢で「ちらりを見上げてきた。

それにしても彼はセントバルナの出身ではないのだろうか？
胡坐をするのは南のフルクという国だつたと記憶している。

「で？ 少年の見解は？」

「見解…………ですか？」

「そう。根拠があつて言つてるんだろ？ それともカママ？」

「カマかと聞いている時点で肯定しているも同然でしょ？」

「もうめんどーなの。手短にしたいの」

「はあ。見たままの適当な反応…………いえ、えつと、以前封印の話をしましたよね？」

視線が分かつてゐからそれ以上言わないでと訴えてきたので、慌てて話を進める。

「あー…………したね」

「あの時は気付きませんでしたが最初にかけられたものとその次にかけられたもの、二つの封印がされています。

一つめの封印は他者の力を核として成されていますが問題は二つ目、上に重ねがけされている方です」

「ふんふん」

絵に描いたような適当な相槌に、聞いているのだろうかと疑念が

わくが、たぶん聞いているのだろう。

「それはあなた自身の力を核としています。力を封じているのにあなたから力を引き出し、それでさらなる封印を。はつきり言って正氣の沙汰ではありません。普通なら死んでいるところです」

力を封じられている中でそれを糧とする術を絶えず使用すれば代用として生命力が使われるのは道理。

キルミヤが生きていられるのはひとえに精霊が失われる生命力を補っているからに他ならない。

精霊が術に対し過剰反応していたのは十中八九それが原因だと言える。

「…………ん…………やつぱっ？」

「やつぱり？」

「カロリー不足だとか成長期だとか気分で見て見ぬふりしてたけど、さすがに疲れすぎるもんなー。不健康体の時より劣るってさすがにな。俺でも変だとは思つたけど、不吉な事は全力でスルーが基本だつたし？」

即死かじわ死か言われたらもう後者しか選べないつしょ。ねえ？」

「…………その場で殺されるか、それともその封印を受け入れるか二択を迫られたのですか」

尋ねると面づりによつて、確認するつもりで聞くと、キルミヤは目を丸くした。

わざと分からぬいよつて言つて居るのだろうけれど、さすがに想像はついた。

第一十話 少年も大概しつこい

「誰にされたんです」

「さあ。初対面の奴だった」

驚きに見張られた田は、既に氣のない田に戻つており、驚いた事自体見間違いだつたかのようだつた。

動搖を即座に沈めるじつじつといふが、言動から乖離してゐる。

「理由もなく？」

「さあ？ 向こうにはあつたんじやない？」

それは、あつただらう。

魔力と同調力を封じる技術は失われて久しい。今では忘れ去られた禁術の一つに数えられていたはず。

それを掛ける者も相当な力を必要とする。一つ田はともかく、一つ田はおそらく命がけで掛けたと思われる。理由もなくそこまでの事をやる者など居ない。

「精靈の声を聞いた事がない」と言つてましたね」

「電波を受信した事はないな」

でんぱ？ 精靈の言葉をそういうのだらうか？

結構な国を渡り歩いていふと思つていたけれど、時々分からぬ言葉がある。

「それなら、物心つく前に一つ田の封印を掛けられたといふ事です

ね

「……物心ね」

複雑そうな顔をして呟くキルミヤ。

「物心つくる、けつこーー早かつた自信があるんだけどねえ……」

「赤子の時にされでは分かりませんからね」

「…………まあそうだね」

「…………それひとつもかくとして、一いつ目は外しませんか?」

「くら精靈に遊ばれた存在だと言つても、一いつ目のソレは問題がありすぎる。」

療養室の担当者が砂糖を渡していたが、魔力消費の応急処置で誤魔化されるのようなものではない。

僕としては至極真面目に言つたつもりだったのだけれど、何故かキルミヤは田を点にした。

「…………え?」

「ですから、解除を」

「いやいや……『弱み握つたぜ』的な流れかと思つたんだが

…………?

僕も目が点になつた。

「何で僕があなたの弱みを握らなければならんのですか? しかも既に弱つているのに」

「…………うああ」

キルミヤは悲愴に顔を歪めると両手で覆つた。

「やめてくれよー。もーなんだよー。めりやめりや自意識過剰じゃんか俺」

何だかよく分からぬがキルミヤは「ロロロロと悶えるように転がりはじめた。奇行に走り出した経緯が見えないが、体調が戻つたらしいのは分かつたので良かつた。

「今まで総無視決め込んでた奴がふれんどりーになつてんだからフラグだろ？ 赤信号以外ないだろ？ 面白がつてペラペラしゃべつた自分が厨二みたいで恥ずかしー」

体調が戻つたのはいいけれど、僕は周囲の揺らぎを感じて慌てて言つた。

「あの、取り乱しているといひ申し訳ないのですが、落ち着いてください。

あなたが乱れると周りの精霊も引きずられます。魔力も同調力も封じられていると言つても精霊の祝福までは封じられてませんから、人よけの術が破綻してしまいます」

「俺は乱れてないよ！？ 清く正しく生きてるよ！？！」

「はあ？ あ。いえ、分かりました。分かりましたから落ち着いてください」

「分かつてないだろ！ そんな生暖かい目で分かりましたとかとりあえず言つとけみたいなアレだろ！」

「本当だぞ！ 俺は誓つて清く正しく

「分かりましたからつー！」

両腕掴んで迫つてくるキルミヤに若干引きながら、声を大きくすると漸くキルミヤは大人しくなった。

それでもブツブツと「本当にだな」とか「そりゃ意識する事は

とか「でも普通だろ?」とか咳いていたが、さつきに比べれば問題ない。

「それで、どうしますか?」「なにが?」

切り替えが早いと言えばいいのか、ゴロゴロ転がっていた事など微塵も感じさせない返答を見せるキルミヤ。

この年頃なら、気になる事があつたらそれを引き摺つて顔に出そうなものなのに、一切それが無い。

思い切りがいい性格なのか、それとも育った環境がそうさせたのか。

「封印の解除です。一つ目はあなたの存在を周囲から守る意味がありますが、二つ目のは枷以外のなにものでもない」

「枷……」

「死を選ばせるような者に掛けられたものなど不要だと僕は思います」

「

キルミヤは口を噤むと、じっと僕の顔を見た。

「少年は何故俺を助けようとする」

「助けられる者を助けるのに理由は必要ですか?」

違う。助けられるのに助けなかつた者達の方が多い。

ここでキルミヤに力を貸すのは僕自身の為だ。僕が呵責に苛まれたくないから、過去に囚われたくないから。

耳障りのいい言葉を紡ぐ己の口に怖気がする。なのに、

「…………ないね。確かに全く持つて、ない。少年の言うとおりだ

な

キルミヤは、僕には勿体ないぐらいの笑顔を向けた。

僕はその顔を見てられなくて視線を逸らしてしまった。

「あー、悪い。ちょっとな、掛けていった奴の仲間かもしけないと
か思つたんだよ。

これ分かるのってアイツ等ぐらいだと思つてたからさ」

決まり悪げに頭を搔く姿を見て、心が重たくなる。

彼の疑いは尤もな事で気にする必要はないのだと言えればいいの
だけど、それすらも言えなかつた。その澄んだ目を見る事が出来な
い。

「外してもらえるんなら有り難いが、一つ聞いていいか？」

「なんでしょうか？」

「掛けた奴には外したって分かるか？」

内心の葛藤を抑え込んでキルミヤに視線を戻す。

「……分かるようにしてありますね」

そう言つと、キルミヤはへらつと笑つた。

「ならいいわ」

清々しく、さつぱりと、一欠けらの迷いもなく言い切つた。
何をと思ったのが顔に出ていたのか、キルミヤは続ける。

「いやあー ちょっと相手がね、粘着質なタイプっぽかつたから、

下手すりや外した人間の事までバレちゃうかもしねない。
そうなつたら俺にもどーしょーもなくなるから」

あはははは。
と笑う。

呑氣なその顔に、自分の顔が対照的に固まつていいくのを感じた。

「すか？」
「ううん、おおむねはいい。死んでもおかしくないと分かって書いていた

「やめとく」真剣は思ふそろそろしていかがむ——豊家の早研

「ふざけないで、ちゃんと答えてください」

卷之三

「わかつたよ。わかつた」

お前はどんだけ沈黙耐性あるんだと、訳の分からぬ事を言いながらキルミヤは肩を落とした。

「あのな？ 僕だつて一応普通の神経持つてるよ？ いつ死ぬかもしれないのはこえーよ。だけど、それが怖いからつて他人を死亡フラグ満載なルートに引っ張り込むだけの度胸も無いんだよ」

キルミヤの顔から笑みが消え、一瞬、悲しみがよぎった。だけどそれが何かを突き止める間もなく苦笑いに染まる。

「少年もほいほい命粗末にすんな。母ちゃんはすんげー大変な思いして少年を生んだし、少年も大変な思いして生まれてきたんだ。人生楽しく生きる」

「それはあなたも同じでしょう」

「だから、それは俺のルートであつて少年のルートじゃないの。わかんないかなー」

「わかりました」

「お？…………いやいやいや。その顔はぜってーわかつてないだろ」

僕は余裕たっぷりに笑つて見せた。

「要するに、気付かれなければいいという事ですね？」

第一十一話 過去の淵

今でもあれば、あまり思い出したくない。

選ばせいやうつ 父母のトベと今すぐ逝くか それとも あえ
かな光に縋るか

そんな問い合わせを八歳児にしないでほしい。

小学一年の時の記憶などとうに忘れて久しいが、阿呆な見栄を張つて無駄な喧嘩を繰り返していた気がする。一日一日で完結し、翌日に持ち越される問題など無かつた。宿題を含めて。宿題に関しては俺が覚えてなくとも先生が覚えているので自動的に翌日嫌という程自覚せられたが。

とにかく興味ある事を追及して、同じ興味を持つ奴と競い合つて、全力投球しつぱなし。よくも疲れないなどいう毎日を送つていたと思う。たぶん。

ともかく、勝負相手や渡り合つ相手は同じ年齢^{ヘル}で、大人との経験など無かつた。

どういう設定になつてゐるのやら、間違ひなく今生はハード設定に違ひないと現実逃避をする反面、俺の口からは獸のような低いうなり声が絶えず出でていた。

背を踏みつけられ腕を捻られた状態にもかかわらず、俺の身体は

勝手に抗い目玉が飛び出そうとなほじ田を開き相手を睨んでいた。

肩にかかる髪は新緑を思わせる鮮やかな緑。冷笑が浮かぶ双眸は切れ長で、瞳は赤くも見える濃い紫。

誰に言われなくとも説明されなくとも、それがおかんを殺した相手だと分かった。

根拠などトブに捨ててやる。そんなものは必要ない。俺の全身全靈がそいつを拒絶し嫌悪し破壊しつくしてやりたいと叫んでいた。

だけど、いいのか悪いのか俺にはそいつを殺せるだけの力は当然の「ごとく無く、変わりに格上^{上位}との経験を持つ精神があつた。

その精神が、抵抗するだけ危険だと判断した。

暴れ狂う心を理性で覆い、現実逃避といつ名の弾幕を張つて自分自身を惑わし、俺は男と対峙した。

「子供相手にいい大人がムキになるなよ」

息を整え、獣を腹に納めて軽く挑発すると男は目を細め口角を少し上げた。

幼児を踏みつけたまま笑う男の顔は狂気に満ちていたと思う。まともな子供が見れば泣くか失禁するか暴れるか。

「目の色が変わったな」

「変わるかよ。俺は生まれたときからこの色だ。目が悪いんじゃねーの？」

男は暫し吟味するように俺を観察すると、手を離した。足は俺を地面に押さえつけたまま。

「面白い。ここで殺すには惜しいやもしれん」

そうして俺は決まりを一方的に言い渡された。

ルール

「か……大丈夫ですか？」

ふと、俺は瞼を抑えていた事に気付いた。

「あ。悪い、聞いてなかつた」

少年は眉を寄せ、首を傾げる。

「それほど心配しなくとも、本当に大丈夫ですよ？」
「その自信はどこから来るのか。少年は学生だらうに」
「それはそうですが……一応こいつで齧得出来るものは既に齧得してしまっていますし」

おいおいおい。

「じゃ何で入学してんだよ」
「…………まあいろいろと」
「ふーん」

少年もなかなか面倒臭そうなものを抱えていそうだ。
下手すりや俺より面倒なのかもしない。それなのにまあよくも手を貸そつと思つたものだと思つ。

人目に付かない場所に移動しながら、小さな背を眺めていると「ああそうだ」と少年は振り返つた。

「封印を解除してから祝福の方も何とかしましよう」
「ん？」
「今ままでは魔術が使えないでしょ？」
「…………え…………もしかして知つてんの？俺のノーロンつぶり」
「はい」

青年だけだと思ったのに、ここにも居ましたよ。

「ここんとこダメージ受けてばつかなんですかけど俺。ガリガリガリガリ削れちゃつてるんですけど。もうちょいしたら泣きながら駆けてこきそうな自信あるんですけど。

「あの……落ち込む事じゃないですよ?」

「生暖かいよ。わざわざ少年が生暖かい田で見るよ。掘削機の『
とく削られるよ』」

「へっわへ? なんですかそれ」

分からぬなら説明しよ。」

「掘削機、またの名を油圧ショベル又はパワーショベル。俺的には後者が好み。

複数関節のアーム先端が付け替え可能な自走式建設機械。主に下向きバケットを取り付けたバックホー形態が一般的。ちなみに俺が削られたイメージもこれ」

「痛いよ? 痛いよっていつか血を見るよ? 土石相手の代物だからこれ。」

「いや……あの、そんな『ビーだ』という顔をされましても……余計に分からなかつたのですが」

「はははは。分かつたらむじろすじこ」

「……」

精霊に愛されし者の多くは、どうしても魔術のコントロールが苦手になるものです」

あ、すごいスルーされた。

グラン以来の清々しいスルーだ。クロフツサンはいちいち拾ってくれるから面白かったが、少年はあんまし拾ってくれないらしい。

「普通は同調力があるので、それで精霊を抑止するんですけど」

「ああ、俺には無いから難しいんだ?」

「はい。なので、定量を決めておきましょう」

「定量？」

「後で説明します。

その前に、魔導と魔術の違いを知っていますか？」

俺は、はて？ と首を傾げた。

魔導と魔術は同じ意味で使われているものだと思っていたのだが。

第一十一話 講義は眞面目に

魔導と魔術の違いと言われても、より有能なものが魔導と言われているぐらい。

魔導書と魔術書は存在するが、属性とかに差は無いし、やり方もそう対して違わない。違うところがあつたとしても「術」とに変わるものなので、それが魔導と魔術の違いとは言えない。

ノーコンだつたから途中で覚える気無くしたんだよねえ。

「さあ。違うなんてあるの？」

「今は明確に区別する必要が無いほど魔導師の数が減りましたからね」

首を傾げた俺に、少年は苦笑気味に頷いた。

「もともと魔導師は魔を導く者。魔術師は魔を創る者と言われていました」

「魔を創る？ なんか魔導師よりそっちの方が強くね？」

「それは個人の力量に左右されると思います。」

魔は未知なるもの、不可視のもの、神なるものという意味があり、世の理から外れた現象を示します。

魔術師は魔を自ら創り出し、魔導師は精霊の力を導いて魔を現します。

「この時用いられる力が魔力と同調力です」

道なき道、獸道に入つていきながら話す少年。
息切れ一つせず話せる事が羨ましい限りだ。

不意に、田の前に手が差し出され、顔を擧げると少年が立ち止まつてこちらを見ていた。

「手を」

「……そこまで体力無しじゃないぞ？」

「いいから」

ややキツく言われ、ビームしたものが、
背丈も低い年下に心配される俺つて、傍から見たら限りなく情け
なくなーい？

でも少年は引き下がる気ゼロの「」様子で手を差し出したまま止ま
つている。

しぶしぶ手を取ると、思ったよりも強い力で握られ、掌から暖か
さが伝わってきた。

「…………少年、手」

「」の力の事は黙つていても「」と助かります

再び前を向き歩き始めた少年は早口で言つた。

あーーいやー、それではなくて、手が硬いなあと思っただけなんだ
けど……

なんか前のめり思考になっちゃつてゐから黙つてこよつ。

「魔術師は魔力を用いて、魔導師は同調力で」

「え？ まだ講義続くの？」

「…………」

「やめて、無言の威圧とかやめて」

振り向き何も言わない少年に繋いでない方の手を擧げ降参をアピ

ール。

まつたくもう何なんだ。

俺は不真面目代表生徒だぞ？ そんな俺に講義したところで覚えるわけがない。

「ちゃんと聞いて覚えてください」

「読心術の使い手！？」

「顔に書いてあります」

顔が引き攣つた。

やばい。身体の年齢に精神がひっぱられている可能性がある。しつかりしろ俺、平々凡々ライフ田指すならポーカーフェイスは必須スキルだ。

「簡単に言えば魔術師は自分の力で、魔導師は精霊の力で魔を発現するということです。

魔導師が優れていると言われるのは同調力は消費されるものではないからです。魔力は消費されるので限界がありますが、精霊を集められる限り魔導師に限界は理論上ありません

「そりやすーい」

「…………」

「うわ……おやんと聞いてるよ？」

「分かりませんか

へ？

「魔導師とは精靈に愛されし者の事です」

ああ。なるほど？

「今魔導師と言われている者の多くは魔導師ではありません。

魔術師は多かれ少なかれ同調力を持っていますから、ある程度なら擬似的な事が出来ますが同じことは出来ません。

貴方が先日使った初級魔術と呼ばれるものは、魔術師が魔力切れの時に代用として編み出したものです。

本来の魔導には言葉も型もありませんから」

……これ、何て言えばいいの？

何でお前が知つてんだよ～ って言えばいいの？ それとも空とぼけるべき？

「精靈の加護を求める精靈を集めその力を借り受けたいという意味の術ですから、貴方が使えば精靈が飛びついて力を貸すのは当たり前と言えば当たり前で、同調力を封じられている貴方に制御出来ないのも当然です」

はい。空とぼけるのはアウトですね。
何で知つてるかね～

「そのままで危険ですから、封印を外した後に集まる精靈を制限しておきましょう」

「そんな事出来んの？」

「あなたの為なら精靈は協力してくれます。

ただ、魔術の使用は控えてください。生命力を使用する事になりますから

「魔力無いなら失敗じゃないの？」

「……普通はそうだと思いますが

ちゅうとこちゅうを見て、ビリとなく疲れた顔で溜息をつく少年。

「をいこら。人の顔見て溜息つくとまどうこう了見だ」

「仕方がないじゃないですか。試金石に田をつけられるだけの素質を持つているという事なんですから」

「…………試金石…………つてなんだっけ？」

また溜息を付かれた。

第一二三話 はしゃいでしまつた

「皇女から説明を聞かれたと思うのですが」

「全く記憶にない」

「威張らないでください」

脱力する少年を慰めようと口を開きかけたが、先に少年が話を進めた。

「王家の試金石は簡単に言えば魔術師の力を測る能力です」

「こいつどんだけ講義したいんだよ。周りが段々鬱蒼とした感じになつてているのに変わらずのペースで淡々と続けるつて。

つていうか、学院の敷地にこんな鬱蒼とした森があつたつけるこれかなり広いだろ。下手すりや迷うぞ。

「魔力を蓄える器の大きさ、魔術を構築する精神の強度、思考の速度。この三點を見ています。この内、魔術の成功率に関わるのは精神の強度と思考の速度。目を付けたという事ですから、下手ではないでしょ。ただ器が大きいだけならいいのですけれど」

迷子になつた奴居ないんだらうか。居たら苦情になつてるか。とするととやつぱし居ない?

ああ、皆様真面目だからこんな所来る暇など無いと。コレだな。

「あなたは希代の魔術師にも、忘れられた過去の魔導師にもなれ何を考へてゐるんですか」

「聞いてる聞いてる。

クロワッサンのお眼鏡に適つたんだから魔術師として器用な部類

に入るんじやなかろーかと。こういう事だろ?」

出来れば学院を舐めて房ひれた方がいい

「面倒事は過ぐるは限る」

「同意です」

「苦勞なんて人をそれぞれですかね。着物を出した

進む。

茂みを抜けると、少し開けた場所になっていた。

「あ、
泉？
水がわいてるのか？」

開けたと思ったのは泉があつたからで、水面を覗いてみると規則的なうねりがあり目を凝らせば水底から湧き出でているのが見えた。水は透き通つていて、どれくらい深いか分からぬが、底までクリアに見えるのでかなり綺麗なのだろう。

「...」は精霊が集まりやすいポイントです

「ああ通りで騒がしい」

「おた?」

「すみません」

「謝るとこ違つかい。少年は謝りすぎじゃない?」

「あ、うう…… でしょ、うかうか

「事ある」と『すみません』だろ。無駄に多いんだよ。必要ない

「元気ですか」「ええ、それよりも早くしてしまったよ。」

俺は少年の前に立たれるまま立つ。

「力を抜いていいください。すぐに終わります」

「りょーかい」

任してくれ。ボーツとしているのは得意だ。

早速俺はだらけまくつた。立つてこる為に必要な力だけを残してほげーっとしてみる。

考える事は特になし。強いて言えば「飯について。こここの食事は本当に素晴らしいのだ。

退学した場合、こここの食事と同レベルを維持しようとすると大変だ。

どうしよう、死活問題が発生してしまった。

少年に言われるまでもなく、適当なところで脱走するつもりだったが、食事については考えていなかつた。腹に入つてしまえばみんな同じとはい、おいしいものを食べたいのが人情と言うものだ。あと肉。

収入源さえ確保するのが難しいと思われるのに、食生活の事を望むのは高望みだと分かっているが……までまで、飯屋に入れたら良くね？ あ、いやでも一か所に留まるのは無理か。見つかる。となると、移動しつつ稼ぐ方法を考えないと駄目で……やつぱり傭兵兼冒険者か、行商か。

「終わりました」

俺の鳩尾の上、やや左側の心臓あたりと思われる箇所に手を置いていた少年が手を外していた。

痛みも何も無い。変わったと思う所もない。

試しに両手を握ったり開いたりしてみるが、変化は無い。

俺は泉に目を向けバサバサと上着を脱ぎ捨て、怪訝な顔をする少年を横目に勢いよく飛び込んだ。

水は冷たく、一瞬にして筋肉が収縮する。久しづりの感覚に口元が緩んでしまう。

グッと足に力を入れ、身体を反転させ潜水を開始。五度目の蹴りで底に到達したので、やはり見た目以上の深さがあった。水中メガネが無いのでぼやけた視界だが、底から水が絶えず湧き上がりつづるのが分かる。

あーやべ。めっちゃたのしー

そろそろ息が苦しくなってきたので水面に浮上すると、真っ青になっている少年が居た。

「良かつた！ 上がつてこないかいー。」

若干涙目だった。

……はしゃいだ俺は反省するところですね。

ざばりと水から上がり、縁に腰掛て大丈夫だと手をひらひらして見せアピール。

「すごいわ。水の中は体力食うから潜水出来なかつたんだよ
「喜んでもらえて幸いですが、無茶しないでください。まだまだあなたの身体は弱っているんですから
「うへん。でもそんな感じはないぞ？」

首を傾げると、少年は目を細め俺の周りを注視した。

「あなたが喜んでいるのが嬉しくて、精霊がはしゃいでいますね。生命力をわれ先にと『えている』ようですね」

ええ！？ 実況されるところになると気になるじゃないか！ いつの間にやらだつたらいにけど、今まさにそうですが言われたら氣になる！ どこで！？ どこから！？ どうやって！？

「じゃあ次は精霊の数を制限しますね」

「までまで少年、俺の動搖と疑問とつよつとばかしの不安を解消してからにしてくれ」

「精霊がどうやって生命力を『えている』のかは説明出来ませんよ」

「何故わかる！？」

「顔に書いてあります」

「あ…………負けた。」

少年に負けるおっさんって……

「では始めます」

突つ伏している俺を無視して淡々と作業を始める少年。

くわづー、見た目軟弱そうなくせして押しが強いとか反則だろ！

「エーネルフイ アオウル レ キルミヤ・バージョス ソレライン
ウル ハーサグレナムス ロウ
アラレキ ウル エンティル」

聞き取れない言葉を紡いだ少年の後に、何かが囁いたような気がした。

“ ”

第一一十四話 完敗

「出来ました。試してみてください」

囁きに集中していた俺は我に返り、些^{すこ}か腰^{こし}が引^ひけつつ魔術を使つた。

「其は波動の素 零々のゆえんたる汝を^じくく」

ぱつ

手のひらに現れた炎に、俺は目を丸くして少年を見た。
少年は小さくえくぼを作り、頷いている。

「あなたにずっと寄り添つていた精^{子達}靈に、他に集まつた精^{子達}靈を抑制してもらいました」

「へえ、いつも結果^こに出でくるとば」

「力を貸すのも必要最低限にしてもらいましたから」

「そんな事が出来るのか」

何というか、何でもありだなこの少年は。魔術はぽいぽい出来ちゃうし精靈と交信出来る時点で不思議ちゃん決定だったが、ここまで来たらトリックキーだ。これで空も飛べますとか、地中に潜れますとか、水中で息出来ますとか、瞬間移動出来ますとか、動物と話せますとか言われても不思議じゃない気がする。

「僕がすごいこというわけじゃないですよ?」

「……顔読むのやめてくれ」

もつ極細だよ。俺の残精神。

「すみません」

「いや、謝んなくていいけどね」

少年は田を瞬かせ、ああ本当だと黙つよつロロロロを当した。
その仕草が子供っぽくて、こいつは本当に子供なんだよなあと俺
はしみじみ思つた。

「暫くはこれで持つと思います。様子は見ますが、なるべく早く戻
られた方がいいと思います」

「そのつもりだが、少年も辞めるのか？」

「え……？」

「その口ぶりだと姫へじにことなこと言つてこらめつて聞こえるだ
？」

少年は一瞬迷うように視線をやひらし、やがて分からなことつづ
うに首を振つた。

視線を俺へと戻した少年は先ほどまでの子供らしい気配など無く
仕事に疲れ切つたサラリーマンのような田をしていた。

「あなたは…………どうして知り合つて間もない僕を信用出来るので
すか？ どうして無防備になれるのですか？ 何をされるのかも分
からないのに、どうして

「

少年は言葉を詰まらせ俯いた。

ええ…………今更聞くの？

そういう事は色々やつちやう前に聞くものじやなかろーか？ や

つちやつてからそれはないだろー

内心呆れてしまつたが、少年が深刻そのもので流石に揶揄するの
は止めた。

「どーしたんだよ。何かあつたのか?」

顔を覗き込もうとするべく、少女と少年は自分から顔をあげた。

「何もありません。それより、この間の侵入者ですが」

「え? あ? ああ、それが?」

「何か言われませんでしたか」

「何か? 何かねえ……問答無用で襲つてきたからなあ……あ。
白のなんとかの仲間かとか何とか言つてたかも」

少年の眼がスッと細められた。

「……なるほど。あなたは何と答えたのですか
「なーんにも」

カシルは細めた目を開き、呆れたという顔をして溜息をついた。

「どうして関係ないと言わなかつたのですか」

「んな事言われてもな。何の事か分かんなかつたんだよ。嘘はよく
ないだろ?」

「……。分かりました。その事、誰にも言わないよ!」
「お願いします」

「それは無理」

「え?」

「だつて青年 あいつ何て言つたけ? 僕と補習受けた奴
「……レライ・ハンド二クスの事ですか」

「それ、レライ。あいつが先生方に話すって聞かなかつたから好きにじろつて言つちゃつたんだよねえ。その場に居たから白がどうのとかも話してると思う」

「……分かりました。では、あなたからレライにあまり騒ぎ立てないよう言つてください。教師陣、その上の人間もつやむやにするしかない事なので」

「上……ね。まあ」「解した。青年も今更騒ぐとは思えないけどそれとなく言つとくよ」

「お願いします」

「話はそれだけ?」

「はい」

「そんじゃ」「

俺は言いかけたまま、自分の腕を掴む少年の手を見た。

「　　なに?」「
「なに。ではあつません。何をする氣ですか
「聞くまでもないだろ~　もちろん泳
「駄目です
「えー何でー?」

ひくつと少年の頬が引き攣つた。

あ。やっぱ。

「キルミヤさん……」

「…………はい」

「あなたは先程歩く事も出来ない程でしたよね?」

「……」

でもね。ここまで歩ってきたじゃないですか。

「ここまで来れたのは僕が補填していたからです」

「じゃあ大丈夫って事じゃ？ それに精靈とやらが不思議ぱわーをくれているわけだし。

「精靈に力を与えられているとしても、すぐに全快は無理です。暫くはこれまで同様気を付けてください」

「もうこいいか。開き直り。気にしていても仕方がない。むしろ何も言わなくとも顔読みで答えてくれるのも楽チンと考えよう。そうしここが。…………」

俺は両手で顔を覆つておいおい泣いた。

第一十五話 忘れかけた友の影（前書き）

非常に短いです。

第一十五話 忘れかけた友の影

大きなあくびをして背を伸ばし、さつやと引き返すキルミヤ。僕はその後姿を見つめ、小さく首を振った。

どうして何も聞かないのだろうか。

侵入者は何者か。僕と関係があるのか。僕は何者なのか。

他にも、どうして無視していたのか。

どうして精霊の事に詳しいのか。

どうして魔術に詳しいのか。

魔術に詳しい者がどうして学院に入っているのか。

「おい、ぼさつとしてないで」

「あ、はい」

慌てて走つて追いつくと、キルミヤはまた歩き出した。

「あなたは変わった人ですね」

キルミヤは眉を寄せて不機嫌そうな顔をした。

「お前に言われたか無いね」

「僕が何者か気にならないのですか？」

「聞いたら答えるのかよ」

「いえ」

「じゃ、聞いても仕方が無い」

「そこで納得するのが変わっているんですよ」

「うつせ。人にはいろいろ事情つてもんがあるだろ。そんなのいち

いち聞いてられるか」「……そうですね」

それはそうなのだけれど、好奇心を抱きそれを止められる者は少ないとよくよく思い知らされてきた。

最初から興味すらなければその限りではないけど、僕が追いつくのを待つている所を見れば何の感心も無いという事はないだろ。それでも何も聞かないのは彼が生きてきた人生ゆえか。道

なんだか似ているなと思つてしまつた。

姿かたちは全く違うけれど、あの人に会つてゐるよつな、そんな氣になつてしまつ。

「何笑つてんだよ氣色悪い」

「すみません。また明日から僕は無口になると想ひますが、気にしないでくださいね」

「へいへい。お前は電波ちゃんだからな」

「何ですかそれ。良い意味ではなさうですね」

「いやいや。褒め言葉だよ？ 僕の地方じやもつすんじい褒め言葉」

「……しりじらしいんですよ」

「ひどい。純真な少年を捕まえて」

「少年つて……もう大分厳しいでしょ」

「うわー。容赦ないな」

「すみません」

「つたぐ」

僕は大きく踏み出しキルミヤの前に出た。

「あなたが同室で良かつた」「んだよ氣色悪い」

心の底から嫌だといつ顔に心がせこぶ。

「いいですよ。氣色悪くても。明日からは石ですか

そういうて走れば、溜息を付きながら追いかけてくる足音が聞こえた。

第一一十五話 忘れかけた友の影（後書き）

次から二章に入ります。

第一十六話 これまでにないほど熟考中

キルミヤ、突然の事に驚いている事だらうね。

急な事で悪かつたと思っている。だが、今回の事は随分前から考えていた事なんだ。

キルミヤの力はおそらく魔導に通じるものだと思う。そこで魔導を学べば、制御する事が出来るかも知れない。

それに、あそこではキルミヤの力を怖れるばかりだ。そこなら、そんな事はないだろう?

これは私の願いだが、キルミヤが卒業して中央に来てくれればと思つている。

無理はせず、そこでキルミヤらしく過ごしてみてくれ。

ページス

グラン・

197

そういう事は最初に言えと、俺は思つ。

グラント何を思つて俺を外に出したのかは分かつていて、それでも外に出す本人には言つておくべき事だらう。

どうもお貴族様という輩は勝手が過ぎるといつうか、猪突猛進といつうか、周りが見えないといつうか、我が前に道あり故に我が道なりといつうか、思い込んだら一直線といつうか。

あまりにも面倒くさくて溜息が出てしまつ。

「ふん、余裕だな」

俺の目の前にはお貴族様の大好きな色、金髪碧眼を持つ坊ちゃんが腕を組み鼻を鳴らしている。

少年よりは上で俺よりはたぶん下の。名前は……取り巻きが一人いたのは覚えてるんだけど……ああもーこーしゃ。

「坊ちゃんはやる気満々だねー」

俺はやる気ゼロですよー。やる意味ないですよー。とあびつてみた。

が、坊ちゃんは増え田を吊り上げてきた。

「そんな挑発に乗るとでも思つているのか」

挑発？ してないしてない。止めない？ って言つてるだけですよ。本当。

だいたい決闘なんて百害あって一利なし。俺には懸けて守る名誉など何も無いし、それよりも怪我とかそっちの方が嫌だ。

何で坊ちゃんが俺に決闘を申し込んできたのかはクロクロが関係しているんだろうなあと『貴様』こときがお言葉頂くだけでも不相応だとか何とか言われば容易に想像つくのだが、何で決闘が成立するんだよと突つ込みたい。

学院、禁止しろよ。

何でも精神も強くあれという方針があるやうで、教師立ち会いの下でなら可能なそうだ。

決闘独自の緊張感の中でも力を發揮出来るよつよつといふ事なんかもしけないが、後々禍根が残りそうな方法を取らなくてもいいのにと俺は思う。

「両者、位置に」

俺と坊ちゃんの間で指示を飛ばす立ち会いの教師は、一度と言わず何度も世話になつた 糖分補給という意味で 療養室のスレンダーさん。療養室の者ならば怪我しそうなこんな事止めればいいのに、むしろこの人面白がつてます。表情は眞面目そのものなのだが、目が笑つてゐる。

他にも監視といつて名の野次馬と化した教師が何人か。どこにいつも面白がつてゐる。

そりやまあ坊ちゃんは成績優秀者。実技の方もトップよりの成績だ。実戦に近い形でどこまで出来るのか見てみたいと思つのは仕方がない。仕方がないが、片や最下位成績者の俺の心配をしないものだろうか？

つらつらと考え方分を紛らわしながら坊ちゃんと距離を取る。だいたい一二十歩程離れたところで、スレンダーさんが後ろに下がり手を擧げる。

「始め！」

振り下ろされた手が合図となつて即座に坊ちゃんは両手を交差させ契約の言葉を口に乗せた。

「其は無束の主 わのが力を示し峙するモノを切り裂け！」

カマイタチかあ。いきなり不可視の攻撃あんじ殺傷目的ので来るとは、なかなか吹つ切つてますねー

ひょいひょいと避けてスレンダーさんに視線を向ければ、くすりと笑われた。

え？ 笑うとこ？ こらこらこら。俺は止めてつて言つてるんですけど？ こんな当たれば血がどぱどぱ出やつなもんぶつ放してる状況を笑うの？ 下手すりや死んじやつよこれ。…………そーかそーか。そーですか。分かりましたよ。

なぜだ……なぜだ……なぜだ……なぜだ……なぜだなぜだなぜだ！

なぜ当たらぬ！――！

不可視の風の術であれば避ける事など出来ないはずなのに、風幕で防御するならまだしも、何故当たらぬ！

「何故当たらぬ！」

「当たつたら痛いだろーが」

「ひるせい！ そんな事は聞いていない！！

ちらつと周りの教師を見れば、興味が私から奴へと移つていくのが見て取れた。

最大数の火炎を作り出し飛ばすも全て避けられる。

負けられない……こんな所で、こんな奴に！

次期当主として父の補佐をしている長兄、軍に入り功績を挙げている次兄。ならば自分はそれ以外の道でとを考えた。

第三皇女も在籍しているという学院で、もし接触する事が出来、目に留められれば卒業した暁には間違いなく魔導師団員となるだろう。そう思つて努力してきた。

それなのに！ それなのに！――！

キルミヤ・パージェスはヒラヒラと容易く避けて、こちらを嘲笑う。

こんな落ちこぼれに負けたとあってはサジエスの名折れどころか、

兄や父に何と言われるか分かったものではない。

「うなつたら……

俺は坊ちゃんの手元を見ながら体を動かし先を予測する。
こうしてじっくり見ていると、少年が言っていた魔術と魔導の違いが何となく分かつってきた。

明確に見える訳ではなかつたが、何となく流れが分かる。
坊ちゃんが使っているのは魔導を模した魔術。周りの力を使うタ

イプだ。手の動きと口頭契約で、意思を持つて坊ちゃんに集まる流れがある。その流れが一度坊ちゃんの手で凝縮されて、俺に放たれる。

軌道は全て一直線なので至極読みやすい。

変わつて授業中に教師から受けた拘束は、魔術。己の力を使うタ
イプ。たぶん。

もう一度じつくり見ようと思つて見ればわかるだろ？が、周りから
の流れは無かつたような気がするのでそんだと思つ。

坊ちゃんは攻撃が当たらない事にかなり焦つてゐるようだが、俺
にしてみればそんな分かりやすい手順を踏んでいて分からぬ方が
おかしいと言いたい。周りの教師達も一体何を考えているのか俺へ
と視線をシフトさせていく。

いやいや。誰か教えてやれよ。軌道、見えちゃつてますよ！ つ
て。

それにそんなに見つめられても俺に決定打は何一つないですよ。

学院の決闘だから、さすがに殴り合はとかではない。そこはやつ
ぱり魔導なり魔術なり使わなければならず、それ以外は認められて
いない。

少年によつて、よつやく正常レベルの威力となつた俺の初級魔術
“”ときではせいぜい威嚇がいい程度だろ？。

決定打が無くなつたと言つても後悔はない。まさかここで坊ちゃんを丸焦げにする訳にもいかないので、少年には本当に感謝してい
る。

決定打がないので、どうやつたらこの茶番劇を終わらせる事が出

来るかを考える。

手っ取り早いのは俺が負ける事だが、痛いのは嫌だ。坊ちゃんの攻撃はあたつたら絶対痛い。しかも、かなり、痛い。ちよつとぐらいならいいかなあと思うが、あれは嫌だ。

という事で、別の手段を考え中。

俺が使えるのは魔導を模した魔術。魔術は命削ると聞いたからには遠慮。

覚えている初級魔術は、最低レベルのもののみ。

……最低レベルでやべーって思つてそれ以上はやつちや駄目だと思つたんだよなあ……もう少し努力してれば何とかなつてなあいか。同調力とやらが無ければノーコンに変わりないわけだから。

でもまてよ？

俺は改めて坊ちゃんを観察する。

流れは、分かる。

周りの力を使つているのも、分かる。

これつて、俺がエネルギー^{生命力}貰つてたのと同じじゃね？
つて事はだ、魔術的手法に乗つ取らなくとも力を借りられるつて事じやね？

確か、少年が熱出したときに力分けてくれゝ的な事を考えてたら、そうなつた様子だつたつけ。

じゃあ……おーい。居たらちょっとばかり協力してくれないか？

と思つたらすぐさま俺の周りで風が躍つた。

わ……分かりやすい。これ、同調力とか要らないんじゃ……

ちょっと驚きながら、次の行程を考える。

ここで炎だのカマイタチだのやってみよ。坊ちゃんはきっと怪我するだろ。血も出るだろ。親御さんが出たら大変だ。

となれば跡が残らないものでなくては。

…………酸素奪つて窒息？

第一一十七話 出したもののはしまつてください

やめよつ。

窒息させるとなると酸素を動かせばいいが、電波な存在に酸素が通じるか分からぬ。空気を無くされた口には真空パック坊ちゃんの出来上がり。火傷や切り傷どころではなくなる。

何か無いのか。こっちの常識でなくたつていいんだから。
えーと……防犯グッズ。防犯グッズでいけば、警報音。唐辛子ス
プレー。スタンガン。

……出来るかなあ？ 下手すりや昇天だよなあ。

なあ、雷つて分かるか？

俺を包む風が動きを速める。

「までまで！ 落ち着け。すぐこやうつとするな

慌てて言えば、動きは納まつた。

あー焦つた。こりや駄目だ。スタンガンも無理。電波ちゃん相手に威力これぐらいで~とか調整が難しそう。

他に何か無いのか防犯グッズ。使おうなんて考えたことが無かつたから他に……

そーだよ！ 逆だよ逆！ 犯人の思考でいけばいいんだよ！ ク
ロクロホルムだ！ 違つた、イソフルラン！ いや違つてはないけど
イソフルランで！

つて、電波ちゃんに分かるかよ！

俺は拳を握りかけたといひで、己に突っ込んだ。

結局のところ電波ちゃんとの意思疎通がままならなこと、ビリビリにも同じでもやりすら。うん。同調力は必要だ。

でもまあこれなら何とかなるだら。つこでに、坊ちゃんも焦つて大技出やうとしているようなので、このあたりで終わらにしないといじらが拙そうだ。

眠る、眠たくなるって分かるか？

ふわっと風が舞う。

何だか不満げな感じがするのだが、不満という事は分かるといつ事だら。

あの坊ちゃんを眠らせられるか？

この問には、簡単だと云つよつに動きが早まる。それを確認していると、ぽっちゃんの大技が完成したようだ。俺も電波ちゃんに頼んでみる。

じゃ、やってみてくれるか。

片手を空へ、片手を地へ向けたぽっちゃんが不自然にたたりを踏んだ。

おーーお？

が、ほひりやんは踏みとどまり最後の口頭契約を唱えあげた。

「其は波動の素 其は基の要 汝ら集いて爆と成せ！」

坊ちゃんの両手に集まる流れが凝縮され

と、そこでぐりりと姿勢が崩れてゆく。既に目に力はなく閉ぢられかかっている。

「うをーつー……? ?

何で中途半端なところで終わつたやつー。

そんな危険物持つたまま寝るなよー。やつたの俺だけどー。でもそのタイミングは無いだろーー。

突つ込む暇も無い。俺は猛ダッシュ。

口頭契約の内容からして火系統よりの何か。とつておきなのだろうから威嚇程度の威力ではない事間違いなし。それを手のひらに出現させたままとなると完全に自爆。

「せめて消せつてんだよつーーー！」

倒れた手から離れかけた見えないソレを思つつきり蹴り飛ばす！

空高く飛んで行つたソレは、暫し経つたところで盛大な爆発を起こした。

あー……なるほどねー……

俺を爆殺しようと。

あの規模だと余波は避けられないし、吹つ飛ばされた地面やら石

やらが地味に怖い。

ふう嫌な汗かいた。

額の汗をぬぐい振り返つてみると、何故かみなさんずつこけていた。

をいをい皆わん。今の試合のどこにふあにーな要素があつたと言うんだい？ こちとら殺されかけてんですよ？ そんなにおもろくなれば変わってくれれば

あ。いや、寝てる？

教師以外にも学生がかなり居たのだが、学生の方は軒並み野外で昼寝を始めていた。教師の方はふらついているのが一人程、もう二人は真顔でこちらを睨んでいる。

え……え……？？

「勝者キルミヤ・パージョス！」

突然名前を呼ばれてびくつとして見れば、スレンダーさんにニーッシリと笑いかけられた。

「キルミヤ・パージョス。夢魔の檻を解きなさい」

むまのおり？むま.....夢魔？ 夢魔の檻？あ。
はい。

俺は手を横に振りながら電波ちゃんたちに眠りを解除するよつこ
頼む。

手を振ったのは、それが魔術でよく使われる解除の型 だった
よつな……

いつしておけば、電波ちゃんじやなくて魔術によるものと思つだ
る。たぶん。

審判のスレンダーさんも夢魔^{魔術}の檻だと思つたらじいし。たぶん、
大丈夫。たぶん。

「キルミヤ・パージェス。勝負はつきました。宿舎に戻りなさい

いつもよつ丁寧な口調でスレンダーさんは俺に言い、くつと顎
で行けと命じる。

ぼちぼち田を覚ましたした生徒達が何が起きたのかざわめきだ
している。これで坊ちゃんが起きたら卑怯だ何だと言われそうなの
で、そそくせと退散した方が良さそうだ。

一応礼儀かなと思つて、まだ寝ている坊ちゃんに一礼してすたこ
らさつさとその場を逃げた。

第一十八話　面白い反面懶みどり

術に慣れた教師に対しても効果を發揮した上級魔術、夢魔の檻。学生ではひとたまりも無かつただろう。見たところ避けるばかりで口頭契約を唱えている様子は無かつた。となれば空切。解除も空切りしていたところを見ればそれが正解だらう。一見すれば。

話では初級魔術さえ使えないと聞いていたが、とんだ狸だつたわけだ。

さすが、あのグラントの弟といつとこりうか？

「くつくつくつく……」
「…………う……」

密かに笑つていると、サジエス家の三男が目を覚ました。頭を振りながら体を起こすが、何が起こったのか分かつていなか、周りを見回し相手が居ない事に眉を寄せてこちらを見て訝しがつている。

「勝負はつきました。フエリア・サジエス」
「！？ それはどういう」
「貴方は戦闘不能となり、負けました」
「なつ……」

目を大きく開き、信じられないという顔をする三男坊。

これががの腹黒一家の人間かと思うと、可愛い反応だ。どれだけ甘やかされてきたのか、それとも期待を掛けられなかつただけなのかどちらだらうか？

何とも素直な子供の反応について悪い悪戯心が出てしまつではない

か。

「そして、貴方はキルミヤ・ページェスに助けられました」
「……は？」

予想外の言葉に、三男坊は固まつた。

「……」
「……」

「……」
「……」

少し威圧を込めると顔が強張り、口を震わせながら動かした。

「イーストス
膨爆を……使って……」

「そこから先はどうですか？」

「……」

動けないでいるので威圧を緩めると、三男坊は怯えながらゆっくりと首を横に振った。

「貴方は膨爆を完成させてキルミヤ・ページェスの術に掛かりました。

結果として制御は失われ、収束点である貴方の手の中で発動するところでした」

みるみるうちに顔色を青ざめさせてゆく。

あまりに素直すぎる反応に、どちらかといつと教育の手を抜かれたのではないかといつも氣がしてきた。

かの一族ならば顔芸などお手の物だろうに、この三男坊にはそれが何一つ備わっていない。

これだけの教師が集つていながらみすみす生徒を殺すような馬鹿は居ない。それが分からぬのだろうか。先程も結界を張ろうとしていた。

ただし、結界でしのいだ場合は三男坊の手は軽くない怪我を追つていただろうが。暴発の怪我が片手で済めば安いものだ。

「ですが、発動する前にキルミヤ・パージェスが蹴り飛ばしました」

そう。あの弟は事もあろうに蹴つ飛ばしたのだ発動体を。本人にしか操作出来ないはずの術に干渉して。

「け……け？」

蹴り飛ばしたというのは三男坊も意外過ぎたのか、言葉にすらなつていなかつた。

そうだろうと、そこは私も同じ思いだ。

膨爆は着弾点で爆発する。例外は術者で、それ以外の物理的接触は全て爆発へと繋がるはずだつた。

他には、物理的以外の接触。即ち、魔力による接触だ。とはいへ、魔力による接触とは術操作の干渉というもので、決して蹴つ飛ばせるようなものではない。あと可能性があるならば、魔力コーティングを施して即席の物理結果と成すぐらいだが、あの短時間でそこまで出来る人間がこの国に何人居る事だろうか。魔術師団員と言つても今は戦争もなく平和ボケしかけている連中に咄嗟の行動でどこまで出来るか分かつたものではない。

「貴方を含めここに居る者に怪我一つ無いのは、それが理由です。誇りを大切にしたい気持ちも分かりますが、無関係の人間を巻き

込んでも良しとするだけの誇りかどつかは考えてください」

三男坊は唇を噛みしめ、俯いた。

これは相当悔しがつている。一度二度と繰り返すかもしれない。今日はグランの弟が何とか治めたが、次もそうそううまく行くとは限らない。

どこかで一度痛い目にあつた方がいいだろ？

「宿舎へ戻りなさい。

他の者も、宿舎へ」

手を叩くと、眠らされていた生徒達も訳が分からぬまま不満そうな顔でぞろぞろと戻つて行つた。三男坊も他の生徒に半分支えられるよにして逃げるようになつて行つた。

残つたのは、夢魔の眠りを耐えた教師の面々。

「ラウネス先生、今のは上級魔術でしたな？」

白髪が幾スジも見える、一二で十何年も教師をしているクレイスターが渋い顔をして言つた。

同意を示し軽く頷くと、他の教師からうめき声があがつた。

「何と言つ事ですか。あれだけの実力を持ちながら今日まで隠しているとは

そう言つたのは、最近着任した教師のヴェルダ。一年の実技を担当している教師だ。

彼からしてみれば実力がありながら不真面目を通している生徒は

許しがたいのだろうか？

「ヴェルダ先生、落ち着いてください。彼も何か理由があつたのではありませんか？」

「理由とは？」

魔術構築と理論を担当している老齢のテリオスがわざとらしく曰を丸くした。

「さあ、それは今のこと何とも。この中でキルミヤ・パージェスと正面から話した者は居ないでしょう？ 一度話して見ると面白い事が聞けるかもしれませんね」

実際、話すだけでも面白いのでいい暇つぶしの相手にはなる。この魔導博愛精神の人種が面白いと思う感性が残されているのかは別の話として。

「ではラウネス先生、キルミヤと話してみて頂けますか？」

「あら。私がですか？」

クレイスターの言葉に、何故と問うと決まり文句が返ってきた。

「講義を受け持つ者が生徒一人に接触するのは平等性に欠ける事ですから」

何だそれはと私はいつも思うが、ここの人間には当然のルールなので反論したところで無駄だ。

いいですよと返事をして、ここは切り上げよう。

一つ頷き「承を伝えると、渋い顔のままクレイスターは去り、テ

リオスは探るような視線を寄越してからその後を追うよつと行った。

「…………ラウネス先生、一つ気になるのですが」

一人残つたヴェルダが迷うよつと顔でいた。

「…………あれば、本当に魔術でしたか？」

「魔術以外には無いと思いますが」

ヴェルダは説明しづらそうな顔で、眉間にしわを寄せたまま言葉を紡いだ。

「確かに上級者になれば手順を踏まずに使う事が出来ます。魔力を操る事に長けていれば手順の補助は必要ありません。

でも、そういう感じがしなかつたんです。魔力を練つている感じが」

彼はどうやら嗅覚が他の者よりも良さそうだ。

だが生憎、そこから先へと進む知識は持ち合わせていないだろう。

「しかし、魔術以外には有り得ませんよ？」

あれは確かに範囲にわたつて眠りの作用をもたらしていました。そんな事が出来るのは夢魔の檻ぐらいでしょう

「普通なら私もそう思います。でも違和感が拭えないのです。

世界を巡つた経験のある貴方であれば何かご存じではないかと思つたのですが……」

「（期待にそえず申し訳ありません」

ヴェルダは力なく首を振り、弱く笑つた。

「私の勘違いであれば問題ありません。時間を取らせてしまい申し訳ありませんでした。キルミヤの事をお願いします」

頭を下げたヴェルダは、少々意外だった。
ここに集まる魔術師達は大抵魔導博愛主義だと思っていたが、一生徒の為に頭を下げる者がいるとは思つてもみなかつた。
ヴェルダは律儀に礼をして戻つていつた。

完全に後ろ姿が見えなくなつて、溜息をつく。
個人的には興味深く、面白いので観察する分には全く問題はない。
しかし、一体どこまで報告したものか……

第一十九話 特技・見なかつたふり

何か、嫌な感じがする。

「いつ背後から忍び寄る悪寒つていうの？ ぞくりとする寒氣に顔が引き攣る。

これはアレだほら、夜中一人でトイレとか行つたりすると遭遇しそうな、夏場の例の風物詩。何故か男女の親睦の場と化す意味不明のイベントの元なるアレ。

……俺は別に怖くなんかない。子供じやあるまいし、番組見た後一人暮らしの狭い部屋に怯えて友人宅へ押しかけたりするような事は無い。部屋のトイレに行けなくてコンビニに走ったとか無い。断じて無い。無いたら無い。

故に俺は振り向かない。怖いからではない。そんなわけがない。見る必要が無いからだ。そう、必要が無い事をわざわざする必要がどこにあるというのだ。

……

俺の足音の後に重なるようにもう一つの音が連なる。

……

言いしぬず圧し掛かってくるフレッシャーに俺は徐々に精神を蝕まれていき、とうとう振り向いてしまった。

そこには、やや俯き、顔が前髪で隠れた女。うつすらと見える口元は笑みの形に吊り上がつて 状況認識放棄。戦略的撤退を選択。

「でた――――――！」

「え？ え？ あ、ちょっと――――！」

何か聞こえた気がするが無視。

「待ちなさい――！ あなた人を化け物か何かのよつに見ないでくだ
れや――！？」

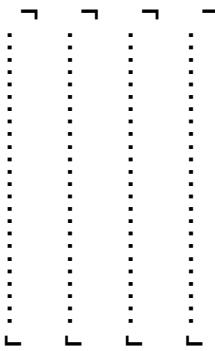
氣の所為氣の所為。俺には残念ながら靈感は無い。

「ちょっと――待ちなさいって言ひてゐるでしょ――！」

今の俺は体力ふりーだむ！ 持久走なりどんと来い――！

いた。

超常現象」とクロワッサンはゼーは、いいながらこちらを睨んで



昨日の超常現象は持久力があるようだ。

撤回。

一般人代表こと俺もゼーはーこいながりクロワッサンを睨んでいた。

「……なんで……上げるの」

「……にげない方が……どうか……して」

「なに……よ、それ」

「……うつむきかげん、で、うすら笑い……は、反則……」

「はあ?」

ちょっととタシマと手を挙げ、一先ず呼吸が落ち着くまで無言の停戦を提案。

クロクロもやつぱりしんじいのか同意を示すよつて眉を顰めて呼吸を整える事に専念した。

何の因果か」」ま一棟と一棟の間の裏。めったに誰も来ない件の場所。

よーやく落ち着いて草の上に座つたまま胡坐を搔いて膝に肘をあて頸を手のひらに乗せる。

クロクロは最初こそ両手を地面につけてへたり込みそうになつていたが、今はもうお淑やかに足を横に曲げて背筋を伸ばし座つている。

うーん……やつぱりなあ、やつだらうとは思つてたけど、このお姫様はあれだ。

「なあクロクロ」

「なんですか」

「猫かぶりしんどいだろ」

「なつ……何の事ですか」

狼狽えるあたりが実直で単純な性格を表している。

最初こそ手札を一枚一枚切って見せ、追い詰めるような話しぶりを見せたがそれから後はひたすらネチネチ纏わりつくだけ。搦め手を使うわけでもなく、追い込み漁をするわけでもなく、ただただ阿呆と言えるぐらい正面突破できていた。

それでは、

「一番最初に俺がクロフツサンって言つたら、『誰がクロフツサン
じゃ』って言つたよね？」

『じゃ』って言つたよね？ 普通お姫様が『じゃ』は無いよね？」

俺の知識としてはお姫様が『じゃ』はあり得なくはないが、この世界ではたぶん無いだろう。

物語でもそういう口調のお姫様は無かつた。

クロフツサンは悔しそうに頭を噛みしめ、やがて諦めたよう溜息をついた。

「苦手なのよ。堅苦しく言葉は

取り澄ましたような殻が外れ、力の抜けた顔でクロフツサンは言った。

「なかなか堂に入っていると思つけど？」

「世辞はいらないわ。貴方は相変わらず無礼ね

「そうか？」

「……説く事は諦めるわ。

それはそうと、何故逃げるの

俺は一つ溜息をついた。

「だーかーらー。後に俯き加減で口裂け女ごとく笑つてゐる奴が居てみる。しかもじょっちゅう。びびるわ。悪夢見るわ。しまいにや泣くぞ」

「……本当に無礼ね」

「自覚ないわけ？ あれは超常現象レベルだよ？ 昼間でも気配無く現れては追いかけられるつて、小っちゃい子だつたらトライウマ確定だよ？」

「誰が幼子にするか！ そもそも幼子であればもつと素直に話を聞くわよ」

俺は恐ろしいものを見たとこう顔で口を覆つた。

「やつやつて洗脳して下僕を増やすのか！ 」わっ！ 皇女こわっ！」

「何故下僕！？ いついつたいどこでそんな言葉が出てくるの！」
「素直だとか言つちやつてるあたり、言つ事聞く忠実な下僕を求めてる感じだよねー」

「言わせておけばっ！ 私はこの国の為を想い力ある者には相応しい働きをと」

「だーかーらー、それが下僕思想だつつてんの」

「はあ！？」

「そりやこの国にとつちや大切な事だろ？ でも個人の大事と國家の大事は違うだろ？」

「主人でもない限り命じる事は出来ないだろ？ が……」

「あれ？ 俺つて一応貴族だつけ？」

俺の言葉に眉を顰めていたクロフツサンは、ハタと氣付いた俺に

何を今更と首を傾げていた。

ちょっと待つてね、今俺整理中。

えーと、一応俺は貴族に位置する人間だ。非常に驚きだが。

そうなると、形式上、王に仕えている事になる。絶対王政なのだから。

つてことは、クロクロがその王権を発動してきたら俺に抵抗する術は無くなる。

…………えーと。えーーっと。

…………見なかつたことにしてお
こづ。

第三十話 ましなロマンンドを希望

「まあいいや。 そんで今度は何の用？」

「まかし紛れに今更に聞いてみよう。

案の定クロクロは盛大なため息をついて口を開いた。

「何故力を隠しているの？」

「していない」

パタパタ手を振ると、さらに溜息をつかれてしまった。

これは意見の相違だろ？ 俺としてはただ全力投球してなかつただけだ。と、誤魔化しても仕方がないか。

確かに隠す気は初めからあつた。それを誰かに非難されるとは考えてなかつたが。

「だつたら初級魔術を使って見なさいよ」

ふつふつふ。いいだろ？ 無問題だ。

俺は掌を前に出して口頭契約を唱える。

結果は嬉し恥ずかし、マッチ火が灯るのみ。

いやーいいねー。安全つて最高だと思つわ。

俺が満足して内心頷いていると、対照的にクロクロの視線が凶悪なものへと変わっていた。

「……どうあっても見せる気は無いと言つ事ね

「あのさあ、勝手に人の事を過大評価するのやめてくれる?
何と言われようとこれが俺の実力だし、クロクロが望むような…
…そういうや何を望んでるんだっけ?」

クロクロはがっくりと肩を落とした。

そんな気落ちしないでほしい。聞いたかもしないが一回聞いた
ぐらいじゃ忘れる。口頭での内容なんて議事録にでもして残してお
かないと言つたうちには入らない。それが大人の世界というものだ。
何度それで泣きを見たことか。

頑張れクロクロ、大人への道のりは遠いぞ！

無駄に応援していると、諦めきつた顔でクロクロは再び口を開いた。

「魔導師団員に入らないかとずっと聞いてるでしょ。
きちんと実力を出せば私が口を挟まなくとも問題ないとは思つ
ど」

「ないない。魔導師団員は無い」

「どうして？ 誰もが羨む魔導師団員よ？ 一員となればパージェ

ス家としても何かと都合がいいんじゃないの？」

「まあパージェスとしては願つたり叶つたりかもな」

「でしょ？」

「でもマツチ火だからね」

「本当に嫌になるわ。

貴方、決闘の時に上級魔術を使つたでしょ」

「… どうか。あれは上級に位置づけされてしまつのか。ちょっと
迂闊だつたな…

誤魔化すにも、あれだけ教師が居合させた中で判断されたものを否定するのは不自然だし、だからといって肯定するのも避けたい。となると、

「何で決闘の事知つてんの?」

昨日の今日でと首を傾げて聞いてみれば、呆れたという顔をされてしまった。

「学院中知つてるわよ。サジエス家の人間が決闘を持ち出して挙句の果てに負けたって」

「げ……」

「げつて何よ。勝つておいて、げ、はないでしょ」

いや、げ、だ。まさしく、げ、だ。げ、で間違つてない。
だつてあの坊ちゃんだよ? 鼻で笑うという天然記念物級の特技をお持ちの方だよ?

それが学院中に負けたと広まれば報復に出てこないはずがない。
俺の平々凡々ライフがどんどんこ遠ざかってしまうではないか。
ここに来ている時点で彼方へと行つてしまつている事はこの際気にしない方向で。

「勝つたつてつもりは無いよ。ただ穩便に済ませたかっただけで」「穩便ねえ。それなら負けてしまうのが一番良かつたでしょうね」「……あの攻撃に当たれというか。さすがクロクロは超常現象族。鬼だな」

「人を化け物の類にしないで。何よ、ちょーじょーげんしょー族つて」

「一言で言つと『自然科学では説明されない現象』が超常現象だな」「しじんかがく?」

「自然科学つていうのは、科学的方法により一般的な法則を導き出すことで自然の成り立ちやあり方を理解し、説明・記述しようと/orする学問の総称かな」

「かがくてき方法?」

「物事を調査し、結果を整理し、新たな知見を導き出し、知見の正しさを立証するまでの手続きであり、かつそれがある一定の基準を満たしているもののこと……だつたつけ?」

簡単に言えば、誰が見てもそうだねって言える方法だつて事だ」

噛み砕いて説明すると、クロクロは考え込むよつに眉間に皺を寄せて視線を落とした。

「つまり……私は誰が見ても説明できない現象だと言いたいわけ?」

「おお! すゞいすゞい。」ここでは意味不明の言葉ばつか羅列したのにクロクロが順応しようとしている。

「当たり当たり。クロクロは頭いーね」

拍手しながら言つたら殴られた。

「私はそんな変なものじゃないわよ!」

「つつても気配なく後ろに立たれたらびびるわ」

「それは、立場上稽古してなきやならないから自然と身に付いたもので」

「気配なく後ろに立つてする事……暗殺?」

再度殴られた。

「逆よ! 何で私がやる側になるのよ!」

「え？ クロクロつて暗殺されかけた事あるの？」
「ないわよ！」

力いつぱい否定された。

そんな経験もつてない方がいい事だとは思つが、そんなに力いつぱい否定しなくともと思つてしまつた。

ついでに、もしもの為の護身術を身に着けている事はよくよく分かつたが、それが人の後ろに気配を絶つて近づく理由にはならないと思つるのは俺だけだらうか。

「もういいわ。

そうやつて隠そうとするのなら、何故隠すのかを突き止めるまで

「

自信満々に言つきられてしまつた。

押してダメなら引いてみるという思考回路は持ち合わせていいないようだ。ガンガンいこうぜ！ みたいな思考回路しかない感じで。むしとまじな「コマンドアクションはないのだらうか？

言つだけ言つて満足したのか、クロクロは立ち上がりて服にいつた葉っぱを払い行つてしまつ。

これで何度目になるか。サボリ。

魔導師団員うんぬん言つ以前に退学になりそうな勢いだ。

第三十一話 聞いてない・・・

段々溜息をつく回数が増えている気がする。

それもこれも坊ちゃんの決闘騒ぎ、元をたどればクロクロが原因だ。

順調に落ちこぼれ街道を突き進んでいたといふのに今では実力を隠していると囁かれるようになり、何より実技で出来ないと言つても何度も何度もやらせようとしてくる。魔導を模したものならばまだよいが、純然たる魔術となつてくると、出来るとは言えない。

さあここで問題が出る。何が模しているものか、純然たる魔術なのか、どうやつたら分かるのか。

魔術と魔導の区別もされていない教育体制では誰に聞くわけにもいかない。少年も宣言通りアナタドナタデスカ状態に無視してくれている。こうなつたら取れる手段はただ一つ。

……勉強。

つかれた。ほんとうにつかれた。
法則を見つけるまでどんだけ掛かつたか。

いわゆる上級魔術と言われる類のものは総じて純然たる魔術に部類される。

推測半分の見解だが、同調力があまり無い者では最大出力もあまり大きなものにはならず、研究対象としての魅力が無かつたのではないかと思われる。

少年曰く、魔術師がガス欠起こした時用の非常手段なので、そもそも高出力を期待もしていなかつたのだろう。

ついでに、上級中級初級の判断基準は扱う難しさ半分、威力・効

果が半分。従つて高威力・高効果でないものは中級とされる模様。役に立たないものは評価されないというのは中々シビアだ。

そんでもつて中級はほとんど魔術。一部が違つ。

簡単な見分けは口頭契約の有無だが、魔術もそれと同様の手順を踏むものがあるのでそれだけでは分けられない。で、次の見分けはその内容。魔術で使用される文言と魔導を模しているもので使用される文言は異なる。

何故異なるという事が分かつたかというと、そうかなと思われるものとそうでないもので対比表を作つたから。

何で文言の対比表を作るに至つたかというと、文言ビリビリじゃなく動作から系統から思いつく限りの要素を表にしたから。

角が当たつたら泣く程痛いあの本が相手。しかも何十冊も。果てそうになつた。

疲れるわ飽きるわめちゃくちゃ面倒臭いわ。状況が状況でなかつたら絶対にしなかつたと確信を持つて言える。

いやもつ本当に、仕事でもここまで短期間で調査した事ないぞ俺。

「いい加減真面目にしろよ

目の前の青年にそんな事を言われてしまつた俺。
そんな青年に自信を持つて言おう。

「通算人生中、最高レベルの集中力を發揮し続けた俺の残体力はゼロだ」

「なんやそれ。どーでもええからさつとこ」

なんだか投げやりな調子の青年と俺は、ただ今実技の補習中。

青年は出来そうなのに出来ないといつ何とも惜しい部類だが、俺は完全放棄。

お題が純然魔術……純魔でいいや。それなので、やる気が出るはずもない。

ほげーとしながら両手を前に突きだして同じ言葉を繰り返す青年を体育座りで見学していた。

教師は居ない。最初は居たが、途中で白眉と化してしまった。職務放棄万歳。これで青年がいなければさうと宿舎に戻れるのだが。

「ほら、見てないでコントロールの練習でもし。避けとったら上達せえへんで」

その通りだが、その件については理由を聞いてスッパリ諦めてい

る。少年のおまじないがいつまで持つかは分からぬが、なるようになれど。対策は一応考へていろし、それにおまじないの時までここに居られるとは考へていなし。

「そんなんやつたら野戦で苦労するで？」

「やせん？」

「野外戦闘実習や」

おーおーおー……いきなりキナ臭いぞ。今まで実技に講義といぐべりぐー一般的な学問の一つつて感じだったのに。

屈強な戦士はもちろんですが、それよりも一人で何百といつ兵力となる魔導師が必然的に求められ

魔導師は兵士。それも絶大な兵器という役割。

クロクロの言葉が蘇り、思わず顔を顰めてしまった。

「んな顔せんでも危険は無いんやで。やる場所も学院奥の森や」

あれ？ 学院奥の森って少年と入ったとこじや？
ん～やつぱりは普通は入らないとこみたいだ。

「立ち入り禁止にはなってるんやけど、魔物はおらんし、害獸も氣性荒いのおらんて聞く」

居なごどいろか、一匹たりとも出合つてない。

「まあ部隊行動が出来るようこいつ練習なんやうつな。確かキルミヤはサジエスとの班だつたと思うで。上級生はさすがに覚えてへんけど」

「は！？」

「四年までで、各学年一人ずつの八人が一班になるはずやで」「へ～縦割りか。連帯と規律がメインになりそうだな。つてちがーう！～」

「急げてたら容赦なく先輩にたたかれるで」

「違う！ そこじやない！ そこは気にしてない！」

「？」

「ハテナじやない！ 何で俺が坊ちやんと一緒に班なんだよ！」

「あー……それはなあ、俺かてそり想つけど、ソレド和解しどけゆうことやわ」

「出来ればとつへこしてるわ！」

「せやな」

「えーん。青年の反応が薄いよー」

「泣くな泣くな。分かつたから」

適当な青年の反応も分からぬでもないよ。どうしようもないも

んねえ。

なにけどもうちょっと付き合つて欲しかつた……

「ちなみにいつ?」

「野外? 来週末やで」

「早つ そんな早いの?」

「……入学の時に話あつたで」

入学の時ですか。

はい。しつかりサボつてました。少年と。

「内容はあれか。行軍練習みたいな?」

「大体はな。戦闘訓練も兼ねてるから一回ぐらいは害獣とやりあつ事になるつて聞いとる」

害獣か……まあ害獣ならなんとかなるか。先輩方が居るならばバツチリそちらはお任せして、一年生は^{役立たず}ブルブル震えて縮こまつていよ。それはそつと、

「なあなあ青年」

「なんや」

「収束点どこにじしてる?」

手元を指さし聞いてみれば、は? という顔をして右手を出した。

「青年つてさ、利き手左だよな」

「ああ、それが?」

「収束点を左にしてみれば?」

「はあ?」

教科書とも言える魔術書では、収束点の基本中の基本は右手とされている。

青年が右手を出したのもそれは当然の事で不自然ではないのだが

訝しみつつも青年は再び手順を踏み、今度は流れが左手へと集まつた。

そして、ボフンと音を立てて青年を中心とした風が巻き起しつた。

第三十一話 気遣い

ぽかん。とした顔で突っ立っている青年。

「おーい？」

「……出来た」

眩いで左手を凝視している。

出来ちゃった事に驚いているようだが、そんなにびっくりする事でもないだろう。

青年から流れた力（？）が右手に集まりかけながら、何でか左にも流れようとしていたのだ。

無意識に利き手に集めようとしてしまうのか、そのせいでもうまく収束していなかつたので、最初から収束点を左にしてやればそんなりと集まりましたと、それだけの事。

でも、出来たら嬉しいのは分かるかな。

俺の場合は火災発生で焦りまくつたけど。

「おめでと～」

青年はまだ鈍い反応で、ゆっくりと首を動かしながら視線を戻した。

「なんでや?」

「いや、出来たからおめでと～」

「手」

「て?」

「左つて」

「左?」

「言つただろ左やつて」

「言つたけど……それが?」

「なんでや?」

「なにが」

「だから手」

「てつてなんだよ」

「左だつて」

「左がなんだよ」

「言つただろうが左やつて」

「だから言つたけど何なのよ」

何この無限ループもどき。飛んでくるボールが明後日すぎてキャッチ出来ない。キャッチボールというのは相手が取れるボールを投げるのがマナーだというの。

俺がうまく投げれているかは知らんが、内容がほぼオウム返しなので意味わかりませんよ~って事ぐらいは伝わっているだろつ。それが証拠に、ほんやりしていた顔がもどかしそうな苛立ちかけたものになつている。

「まーまー落ち着こいよ青年。まつまつ座つて

トントン地面を叩くと、青年は大人しく俺の前に座つた。

いや、別に目も据わらせなくともいいんだよ?.

正面からそれはちよつと向けられたくないんだけどなあ。悪い事なんてしてないのに逸らしたくなるというか、ほら、パトカー見た
ら無駄に緊張するというか、それと似たようなものというか。

「で?」「

「青年、もうちょっと説明してくんない? 何が何やら分からんだけだ」

「ほんまに言ひとねんか?」「

「わりと真面目」「

「……はあ」

「溜息つかれたー。やだー。この状況やだー。説明早くしてー」「

「……はあ」

長つ。

しかも無性に悲しくなるじやないか。そんな『あほひし』みたいな顔されたら。

「なんで収束点を左にすれば出来るよつになるつて分かつたんや?」「そんな事かよ……田が据わってるから何事かと」

「そんな事やないわ。ええから答え」

「えー……うそです」めんなさいなんでもないです」とえますいますぐこたえます

「ええから、はよ答え」

「うつ……本当に青年が怖い。全く相手にしてもらえてないよ。

「左でやれば絶対に成功するとは思つてなかつたけど、右よりは確率が高いと思つただけだよ」

「なんでや」「

「右に力を集めてただろ?」「

「……ああ」

「でも同時に左にも流れてたんだよ。で、青年つて利き手が左だから、無意識にそつしちやつたのかと思つて。だったら始めから左でやればいいかと」

「…………やつぱりか」

肩を落として、はははと乾いた笑いをあげる青年に俺は何と答えたらしいのだろうか。

いい加減お尻が冷たくなつてきているので帰りたいなーとか思つているのだが、言つたら帰らしてくれるだろつか。

「キルミヤ。言つとくけどな、それは見えるもんやない」

「…………ほ?」

「ほ、やない。収束点なんて本人にしか分からへんし、流れなんて論外や」

「…………見えるつてわけじゃなんだが、何となくといふか…………」

「それでも分かるつていうのは普通やない」

俺はもじもじと体育座りから似非正座にポジションチェンジ。かれこれ一時間近く座つてたから、もつお尻限界。

「聞いてるんか」

「聞いてるよ。けど、そんな事言われてもな

「目立ちたくないんやろ? その事は口にせん方がええ。言つたら絶対騒がれる」

「…………おおう。なるほど、そつなのか。お? や。ちよつと待つて。

俺決闘した時、たぶん収束点に集まつたそれっぽいのを蹴つちやつたんだけど…………」

「は!? 蹴つた!?」

「あ、でも待てよ。その時はほとんどが昼寝開始してたから……見てたのは教師が何人かぐらいか?」

「ちよつとまて! お前、今、蹴つたつて言つたんか!?」

「もー何だよ。声でけーよ。興奮すんなよ血圧上がつて血管切れる

よ？」「

うわー と、青年は俺の言葉を無視して頭を抱えだした。

「有り得ん。有り得なさ過ぎるわ。蹴るつてなんや？ 蹴るつて発想自体なんや？ 阿呆か？ 阿呆なのか？ せえへんやろそんな考え。出来るなんて思わんやろ普通。そんなんものが着弾爆発だったらその時点で終わりやろ。そんなん誰がしようと思つんや。出来る出来ん以前にやうひとする頭の方がどうかしるわ」

ひ……ひどくね？

やここまで言わなくともよくない？

「分かった。お前は出鱈田や」

決然とした表情でいきなり言われても反応に困る。

しかしあれかな。俺が派手なノーコン魔術を黙つてて欲しいと言つたり、こととん実技で出来ないを繰り返しているのを青年なりに解釈して助言してくれたつて事なんだろう。

そうだとすると、青年はこの先大丈夫だらうか。

家の再興を目指しているのなら、上へと昇るといつ事だらう。そうなれば俺からしてみれば楽しいその性格が、どこかで邪魔になるかもしれない。そうなつた時、青年はどうなるだらうか。

つて余計なお世話だな。そん時はそん時。青年がどうにかするだらう。

俺がじつと青年を見ていると、青年は眉を潜めて怪訝そうな顔を

した。

「なんや?」

「いや、教えてくれて有難う。今度から気を付けるよ

「え……いや……別に

照れてる照れてる。ほほえましいなあもひ。

青年にとっては氣恥ずかしくて勘弁してくれつてこいつだらうが、こうこういう事はちやんと書つておきたかった。

言える時に言わなこと言えなくなることもあるからね。

第二十二話 センまで飢えてはない

ぞくぞくぞくぞく。
がさがさがさがさ。
。

.....

これ程楽しくない遠足があるだろうか。

前を神経質そなあんちやんに、後ろは殺氣立つた坊ちやんに挟まれた始終無言の歩行作業。

逃亡したくても今の俺には青年によつて強制参加といつ名の暗黒魔法が掛けられている為、列から外れる事も出来ない。

それにしても何の訓練もしていないのに行軍訓練なんて変だなとは思つていたが、何となく分かつてきた。

一年から四年まで参加人数は百ちょい。中隊規模。最小単位の班は各学年一人、一年と二年は二人から三人の、八人から九人で構成されている。

普通班の単位は四人から六人だろう。それよりも多い人数で組まされているという事は、一年は完全に見学兼、上級生にとつての足枷だ。

班長から上、士官の役どころを教師ではなく全て上級生で分担しているところを見てもそうと思われる。

何の訓練も受けていない一年を彼らの通常ペースで歩かせると、簡単にへたばるし、先頭にも後尾にも置けない。お、となると一種、護衛のスキルも上は要求されちゃつてるわけだ。

この森で何から護衛？ といつぐらじ穩やかな森だけど、訓練上はそななるだろ？。

「でも普通の軍隊と比べると随分と変則的だよな……」

「ページェス、何か言つたか」

ぼそりと呟くとすぐさま前を歩く神経質あんちやんが振り返る。

全面的に俺が悪いけど、振り返るなよ。今は全体で動いているからいいけど、班行動となつた場合は前方警戒の要なんだから……

「いえ、何も言つておりません」

びしひつと背筋を正してはきはき答えると「私語は慎め」とだけ言つて、前を向くあんちやん。いつもの俺とは百八十度態度が異なるが、この場面で適當な事を言つてつだうだ説教を喰らひつ事を考えればお安い対応だ。

俺の後ろでチッと舌打ちした坊ちゃんが後ろの三年の先輩の気に障つて睨まれているが、お家の権力が轟いているのか何かを言われる事も無かつた。

顔を合わせた時もだが、先輩方は貧乏くじをひいたという顔を現在進行形で披露されている。

そりやまあ学院中に決闘の件が広まつちやつてるわけだから、俺と坊ちゃんの中が悪いのは知つてゐるだらう。さつきの反応から見ても坊ちゃんの家を把握してゐからして、ストレス発散先は俺に限られてくる、はず。これが明日の夕方まで続くのだから逃亡したくもなろう。

救いなのは、班長のあんちやんが神経質だが生真面目な人物なので謂れのない叱責は無いといつだ。これが俺の聞きかじつた荒事専門の方々の場所ならばどうなつていた事か。

気を取り直し軽い荷物を背負い直し、さくさく足を進める。

この荷物も随分と軽い。この手のものは一般人には重くて重くて
一小時間も歩けない代物だと、勝手に想像していたが、想像だ
としても実際軽いだろう。

何せ魔術師、火器を持つ必要が無く通信機器も同様。水もほいほい出せる。食糧は必要最低限で現地調達せよとの事なのでそちらも質量は大したものではない。他に入っているのは簡単な医療キット。これも大したものではない。

それでも一時間程も歩けば坊ちゃんを初めとして、一年の息はあるがっている。

平氣そうなのは青年と少年と、あと名前知らない若者一人。

といたNVAがこの現代二子の「」ときへタレツぶりたまたま全体の指揮を執る四年の精悍な顔つきをした赤髪の恰好いいあんちゃんを見たとき、あんちゃんは無表情だったが、参謀役らしき女顔の綺麗どころは悲い顔をしていた。

大変そうだなあと思つていのと綺麗びじりと視線がかち合ひ、慌てて逸らす。

何か言われるのも嫌なのでさくさま隣の列の影に重なるようにすれ、視線を前に戻して脈打つチキンハートを宥める。

目的地はこの先にある開けた場所、このペースでいけばあと一時間弱だらうか。

休憩地点のそこまでそのまま野営するのではなく、おそらく一時休憩は取らずそこまで行くだろう。短時間の休憩だと一年は逆に速度が鈍る可能性が高い。

一年がせいぜい言いながら田的にたどり着いたのは予想よりも遅
一時間ちょっとで戻る。壁の三前。

く、一時間ちよつと過ぎた。血の手前。

「彼らや「班」」とに食糧調達と野営地の防壁づくりをする一手に分

かれるようで、殆どの一年は防壁づくりに割り振られていた。防壁といつても、ちょっとした高さに土を盛る程度なので初級魔術を野営地をぐるりと囲むように地道に使っていけば完成する。三年一人と一年、一年の分担というのが恒例という様子だ。上級生の動きによどみが無いのでそんなところだ。

そして何故か食糧調達組になっている俺。

そりや土系統の初級魔術が出来るかと確認を取られた時に「手のひらに土を出すぐらいなら出来るかも」と答えたけど、恒例を無視して迷いなく決められたのは……

と、悩んでいると体力残つてそうな青年、少年、若者一人も食糧調達組だつたので、なるほどコレも恒例かと納得。意気揚々と班ごとに食糧調達に出かけたのだが、いやあやつぱりこの森は食材の宝庫だね。

「…………パージェス。それは？」

前を歩いていた神経質あんちゃんが振り返ったとき、足を止めて俺を見た。

それにつられて後ろに居た先輩方も周囲へ向けていた注意を俺へ移し、『何してんのお前?』という顔をした。

そんな変な事はしていないと思うのだが、どうも予想外の行動をしてしまつたらしいので手にもつた袋を出して説明した。

「山菜です」

あんちゃんは袋の中を覗き込み、一瞬言葉を詰まらせた。

「…………パージェス、芋もあるのだが?」

芋？ と、後ろの先輩も覗き込み芋を視認すると微妙な顔になつて俺を見た。

「いつ、掘つたんだ？」

「先輩方が獲物を探してゐるとき」

どうせ俺は見学ポジなので、実際に狩りを行つのは先輩方だ。傍で見学しているだけというのも時間の無駄なので、田に入つた山菜をぶちぶち取りつつ、個人的に好きな芋も掘つていた。

掘る時はさすがに道具がないのでこつそり電波ちゃんにお願いして土をどけてもらつたりしたが、俺が手にした木の棒と芋とを見比べ三年の先輩は押し黙つた。

そうだね。木の棒で掘つたとしたら、どんなだけすごい勢いで掘つたんだろうね。

分かるけど、そんなかわいそうな子を見る目で見ないで欲しい。お腹空き過ぎて一心不乱に芋掘つてる後輩だと思ったのは分かるから。分かるけど違うから、生暖かいそれを止めて欲しい。いや腹へつてるのは合つてゐるけど。

「……そつか」

もろもろの言葉を呑みこむよつてあんけなは言つた。

第三十四話 ややこじやうな関係

よつやく戻つてこれた。

毎度毎度この時期に召集を掛けるのを止めて欲しいと思うのだが、こればかりは権威と力を誇示する事でしかバランスを保つ事が出来ない世情を変えない限り無理な話だろつ。

新たな学生が入る時期ぐらい腰を落ち着かせようとするのが常識だと言つても、優先順位が上回れば肩書きが何であろうと関係は無いのが実力主義のこの国の特徴。仕方があるまい。

もはや馴染んだ黒檀の机にはサイン待ちの書類が積まれ山を作つてゐる。

一息入れたいところだが、このままにして置くわけにもいかない。

外套を脱いで掛けておき、じつとつとした年月を思わせる重厚な造りの椅子に浅く座り書類に一つずつ印を通して確認を済ませてからサインをする。

殆どはここに来るまでに確認され認可されてきたものなので目を通さなくてもいいが、それでも全てに通さなければならぬ。それが、私がここに居る意味なのだから。

コンコン

「開いています」
「やつと戻つたか」

挨拶もなく入ってきて勝手に長椅子に座り足を投げ出すのは、癖のある栗色の髪を一つに束ねた女。細身の体からは刃物のような闘氣を纏つており、白のローブがこれほど似合わない者を私は知らな
救護

い。

ラウネス・ルウェン。

世間では単独で竜を狩る最強の女傭兵と噂される。今は面白そうな仕事が無いと黙つて勝手に押しかけてきて居座つてるので、食い扶持ぐらいは働くようにと簡単な仕事を任せている。

「何がありましたか」

「あつたな。実に興味深い事が」

ラウネスが面白い？

それは碌でもないといつ事では、嫌な予感しかしなかつたが先を促す。

「あんたが気にしていた弟君、皇女様がご執心らしくてね、サジエスの三男が喧嘩を吹っかけた」

「喧嘩？　まさか決闘を持ち出したのではありませんね？」

「持ち出したね」

一年の主担当はクレイスターだ。彼は何をしていたのか。いくら認められていると黙つても使われたのは四十年以上昔の事。何があれば良家の子女が集つての場では煩わしい事にしかならないというのに。

「クレイスターは権威に弱いだろ？　サジェスと聞いただけで許可を出していたよ。

さすがに拙いと思つて審判はあたしがやつたけどさ」

……はあ

「だけじゃおかげで面白いものが見れた」

いつの間にか机の前に立っていたラウネスが、見ていた書類を奪い子供のような笑顔を近づけてくる。

「弟君、魔術を使わずに勝ったんだよ」

書類を取り返そうとしていた手が空を切つた。

「…………魔術とは、魔術ですか？」

「他に何がある？ 本人はよく分かっていない様子だつたけどね、感覚的に使つているみたいだ」

……魔導を使う者ですか。

ある程度は予想していた。

あの瞳が先祖がえりというだけなら、然程心配は要らない。

しかしパージェスは長老達の警戒対象となつていて、今回も監視するように言わレラウネスに任せていたが、もし例のものに関わりがあるような事があれば、何においてもこちらの管理下に置かなければならぬ。

「それはないんじゃないかい？」

「何を根拠に」

相変わらず人の思考を先読みするのが得意らしいラウネスに目を細めれば、書類を返され「話してみればわかる」と言われた。

「そういえば、結局今年も変えられなかつたみたいだね」

「野外戦闘実習の事ですか……」

氣の重くなる話題に、逸らされたと分かっていても溜息が出るのを止められなかつた。

野外戦闘実習は学者肌の魔術師にならない為には必要不可欠なもので、意義も必要性も理解している。しかし、それを行う場所が問題だつた。

「いつまであの場所でやらせるんだ?」

「分かつていて聞かないでください。こちらもどうにか変えさせようとしているのです」

「変えられるかねえ」

「代用の地を考えています」

「だけど蒼の聖地程手頃で安全な場所はないんじゃないかい? 近いし」

「わかつています。しかし、あの場所程危険な場所もありません」

ラウネスは腕を組むと、『そりやあねえ』と同意を示すように苦笑した。

「知つていればそうだらうけど、知らなきやどうにこもね。

まあ、ここで飯を食う時ぐらいはあたしも氣にかけておくよ

「……有難うございます。姉様」あね

言つた瞬間、ラウネスから表情が消えた。

「ルーネ学院長。あたしとあんたは他人だよ」

「相変わらず、貴方らしくない事に拘るのですね」

ラウネスは栗色の髪と暗褐色の瞳。それに対しても私は一族の色を濃く受け継いだ白髪と銀の瞳。

千彩の民に埋没した今となつては、そのような事に拘る姉も長老達も本末転倒と思えど、それを口に出す事は出来なかつた。

抜身の刃を喉元に突き付けられているような錯覚に囚われたまま、冷たい眼差しを見つめ返す。威圧に耐え、見つめ返すだけで精一杯だつた。

じつと見つめているとラウネスは鼻に皺を寄せ視線を逸らし、くるりと背を向けるた。

「言われていたもう一人の白髪の坊主。あれは相当な腕を持つている。弟君よりも警戒した方がいい」

「まさかそちらも魔導」

「いや。あれは魔術だ。魔術だけならあんたに並ぶかもしれない」

「それは……魔術以外も？」

「傭兵の気配に似ているんだよ。身元は分かつているんだろうね？」

「入学の手続きに不備はありません。元魔導師団長のカルマ様が後ろ盾です」

「そいつは強固な後ろ盾だ。採り切れるのかい？」

「何とも。ですが長老が動けば採りきれないものなど無いでしょう」

「頼もしい限りだね」

ラウネスは薄く笑つて出て行つた。

私は肺の中の息を吐き出し、椅子の背に凭れた。

氣分屋の姉ラウネスが何を考えているのか、昔からよく分からぬ。こちらは読まれてばかりだというのに。それでも私が不利になるような事をした事はない。

だから誰よりも信用出来る。そのラウネスが怪しいというのならば、早々にカシル・オリジンの調査を進めなければならない。
キルミヤ・パージェスについても王家とサジエス公爵が興味を示していないか確認しておく必要がある。

やらなければならぬ事がありすぎて頭痛がしてきた。

第三十五話 余裕が無いのは誰もが同じ

自室の椅子に腰かけ、溜息を一つつく。

学院側の配慮といつ名の隔離で一人部屋となつたその部屋で、いつも癖でくるりと自慢の髪を指に巻きつけた瞬間、

クロワッサン

「どーが！？」

あの気の抜けた声が甦つて思わず息巻いてしまつた。

一体どーをどうみればそんなものに見えるんだか分からぬ。艶があつて、綺麗に巻いていて、手櫛でも簡単に整うこの髪のどこがパンに似ているのか、順を追つて説明してみる。
納得いくまで聞いて

「違つ。そんな事を考へてる場合じゃないわ」

そんな無駄な事に思考を割く余裕は無いのに毒されている。
元魔導師団長に匹敵するあの力が欲しい事に変わりないが、あそこまで変な人種は見た事が無い。

だいたいあれで貴族だというのが何かの間違いだとしか思えない。
質問にまともに答えない。ふざけた事ばかり言う。やる。拳句の
果てに逃げる。

グラントの弟だとはとても信じられない。あれでは周囲から浮くだろうと思えば案の定、サジエスを筆頭とする者達からは毛嫌いされ嘲笑の対象となつてゐる。

キルミヤ・ページスについて一年に聞いてみれば、それが十二分に伝わってくる。

ただ レライ・ハンドニクスは別として “じへー部の者には然程反感が無い。

あれでどうしてと疑問だったが、それも見ていて分からなくなるもなにかもしれないと思えてきた。

基本的に、あれはあのまま。

相手が学生であつても教師であつても貴族であつても平民であつても裏切り者の誹りを受ける者であつても変わらぬあのまま。裏表という言葉の意味すら知らない如くに、私に見せるあのままの態度。もうそつこいう奴だという諦めの境地に達するのも理解出来なくもない。

そういうえば身体はいいのだろうか?

草の上で平気で転がっていると思つていれば、病弱と言われて驚いた。

見れば確かに顔色が悪く、追い詰めたのかと冷や汗が流れた。倒れる程身体が悪いとはグランから聞いていなかつた。

でもあの時以来顔色が悪そつな事もなく、この私の体力を尽かせる程走り回つている。

「だつたらあの時はどひじて…………だから違う。そりじゃなくて

そつちも気になる事やう調べたい事は山ほどあるが、今はこりがりが問題。

指に巻きつけた髪がさらりと解けて、手紙に落ちかかる。

カシル・オリジン 十四歳

スルで起きた戦乱で孤児となる。三年前に元魔導師団長カルマ・リダリオスに拾われ師事。

カシル・オリジンを見たとき、キルミヤ・パージェスを見た時に上に驚き、戸惑つた。

予想が外れていなければ、試金石が 反応しなかつた。

物心つく前から、魔導師として力を持つ者は見れば重いと、そうでないものは軽いという感覚がある。兄弟の誰よりもその感覚が鋭いと言つてきたのに、カシル・オリジンに対しては何も感じなかつた。多少の魔術を扱えるだけの者でも感じるのに、まるでそこに存在していいかのよう空虚だった。

そんな相手、今まで一人として居ない。

「機能してないなんて思いたくないけど……」

気になるのはそれだけじゃない。

カシル・オリジンの後見人を元魔導師団長のカルマがしていると
いう点。

彼はカルマの親類ではない。カルマはリダリオス伯爵家の前当主。スルとは全く血の繋がりはない。

親が知人だつた？

そんなわけがない。その程度でのカルマが後見人になるわけがない。

「誰かの後見人になつていた事自体驚きだけど、その事実が耳に入らなかつた事が問題よ」

明らかに作為を感じる。

隠さなければならなかつた？

それとも周囲に詮索されるのが煩わしかつた？

カルマの後見を得られれば将来が約束されたようなもの。力が伴つていれば魔導師団長も最短で成れる。今の団長、ケルンがカルマの後押しをどれだけ欲しても得られなかつたのに……

不意に目を思い出し、身体が震えた。

あんな奥底まで凍りついた冷たい目、見た事が無かつた。自分の何もかもを否定するような目を。

何故そんな目を向けるのか。問いただす事も出来ず怯んで、逃げ出してしまつた。

私はこのセントバルナの第三皇女。何よりもこの国の平穏を守らなければならぬ。個人の感傷など一の次。もし、彼がセントバル

ナに仇名す者ならば捨て置く事は出来ない。カルマが許したのなら有り得ないと姉は笑い飛ばすかもしれないけど、それでも絶対ではない。

今はまだ私の手足となつて動いてくれる者はないのだ。学院を出てから増やす予定だったが、それが悔やまる。もつと早くに力を認めさせていれば良かつたけど、今更遅い。

「不穏だといひの時期に……」

毒づいても仕方がない、とにかく出来るだけの事をしなければ。

第三十五話 余裕が無いのは誰もが同じ（後書き）

「J感想にて1CP^{クロワッサンボイント}頂きました」

でもつて登録がすごい事になつてビビリ中～
なのに仕事で帰れず更新ストップ～（泣）

遅くなつてすみませんでした。

第三十六話 初めての共同作業は（前書き）

多少血なまぐれこというのがあります。
皆君といつ方はまぬ氣を付けください

第三十六話 初めての共同作業は

さくさく続ける軽作業。

山菜を仕分け、二年が持っていた鍋に魔術で水を入れてもらい、切つてそれにつけておく。

それが終わつてから上級生が狩つてきた獲物を捌いているはずの坊ちゃんのところへ行つてみると、物凄い真剣な顔をしてママンを見つめている坊ちゃんがいた。

ママンはどこにでもいる小動物で、大きさは小型犬ぐらい。ふさふさの毛に覆われており、危険を感じると丸まつてボールのようになる。大きな目はひじょーに愛らしく、短いピンと立つた耳と相まって特に女の子には人気。

と同時に、女の子にとってはトラウマ第一号。

何せここは食肉加工の産業は発達していない。

食肉を生の状態で保たせる方法が乏しく、燻製や乾燥させるしかなく、生肉の入手手段は現物を捌く事になる。

大きな街ならそれでも肉屋で捌かれたものを購入する手段もあるだろうが、それをするのは一握りで、俺が知る町や村では普通に主婦が捌いている。

そう。主婦が。

つまり、元女の子が。

女の子なら誰もが克服しなければならない関門であり、それが女へと至る第一の壁となる。らしい。

あくまで俺は地獄耳で聞きかじつただけなので、実際に女の子が

苦惱する姿を見たことはないが、眞顔の坊ちゃんを見てこんな感じじゃないだろうかと思つてしまつた。

「どうしたよ。声かけるべきなのか?
いやでもなあ……わざわざ『お前に捌けるぜ』がないだろ?」みた
いな顔されたからなあ……

現在ママンは絶命しており、丸まる事もなく短い手足をぶらんと
わせている。

坊ちゃんは微妙な距離感を保つように腕を伸ばしたままそれを掴
んでいるのだが、そこから一向に距離が近づかない。

周りを見てみれば、ソーリーと同じ状態の一年生が見て取れた。

あ、違つた。

なんでもありの少年はその称号にふさわしく、既に捌き終わりト
ップを独走中の模様。この分でいけばあの班が最速で食事にありつ
けるだろ?!

……いーなー……

「わざわざするんだ」

一年の監督役に残つていた一年の先輩に急かされ始めるが、坊ち
ゃんは上級生を睨むと、再びママンを一方的に見つめだす。

周りは焦れた一年にどやされ氣味に作業を始め出してきてるが、坊ちゃんは頼もしい限りのマイペース。

いらん。そんなマイペースいらん。捨てろ。捨て去れ。彼方へ葬り去れ。

祈りを込めて念じるが通じじる氣配は皆無。

くそー……腹減ってきた。

田の前に食材があるのに作れないとは何の拷問だこれは。と思ついたら坊ちゃんに動きがあった。伸ばしていた腕を曲げ、もう片方の手にあつたナイフをママンに当てる離すなよ！

喉元まで出かかった突つ込みを呑みこんで視線を逸らす。

あー……だめだ。見てたら突つ込む。無茶とはわかつても容赦なく突つ込む自信がある。

でも腹へつた。むちゅくちゅ腹へつた。今なら棒切れで芋掘れる。芋ほり最短記録だしたろか。もう勝手に掘つて食つたら……いかんいかん。

落ち着け俺。どーどー俺。ただ今団体行動。単独プレイは叱責対象。

だから落ち着け。頑張れ俺。まだ頑張れる。大丈夫だ。うん。

「パージェス」

「まだまだいけます」

「……………」
「……………行く氣だ」

一年の先輩にちゅうとうじりではなく、かなり怪訝な顔をされてしまった。

「ええと……」

ちゅうとうそこまで？ と、可愛らしく首を傾げてみたかつたが、お互に腹が減っている殺伐とした空氣の中でかませる勇氣はなかつた。

何て答えようと首をひねつてみると、一年の先輩はため息をついて顎をしゃくつた。

「ページェス、お前がやれ」

坊ちゃんから獲物を取り上げて俺に寄越さないあたり、微妙な遠慮があるのだろう。

権力が絡むと変な人間関係になりそつだなといつつ、上級生のお許しを頂いたので俺はさつそく坊ちゃんに手を出した。

「貴様に出来るものか」

低い声で威嚇されたが、いいかげん俺もこの状況は打破したい。

俺と坊ちゃんだけならお互い不干渉で勝手にすることも出来るが、他にも班員がいる。彼らの補給を妨げ続けるのは役立たず以上の荷物にしかならない。

坊ちゃんが壁を超えるのはまたの機会といつ事で、勘弁してもらおう。

「出来るか出来ないかじやなくて、やるかやらないかだ」

言つて獲物を取り、毛を寝かして素早くナイフを入れる。

「田を逸らすな」

田を逸らした坊ちゃんを一年が始めた。
その言葉に坊ちゃんは眉根を寄せて、不快も露わにして俺を睨んだ。

まあ、その行動は分からぬでもない。

俺もここでは捌くような環境には無かつたが、幸い前は若干そういう環境に在つた。

大物は捌いた事は無いが、鶏をはじめとした小動物なら経験はある。

学校から帰つてみたら、畑に鶏のく……まあ、子供心に衝撃を受けつつ、夕食の鶏肉をうまうま食べて。中学に入つたら親父が妙にそういう事をさせたがつて叱られながら捌いた。

初めて親父が捌いているところを見たときは、手元を直視できなかつた。どこへ向けていいのか分からぬ視線を親父へと向けて、それで見ているふりをした。

何と言つていいのか分からぬが、ただ怖かつたのは覚えている。自分で捌く時も怖かつた。

そんな小心者の俺が坊ちゃんの反応を笑えるわけがない。

今は出来るけど、でもそんなものだ。

さくさくと捌き切り、あく抜きをしていた山菜を水から引き揚げ、鍋を洗つてからもう一度水をはつてもらい、坊ちゃんが付けた火に

かける。

それに携帯食の乾燥させた穀物を入れて沸騰するのを待つ。

沸騰してたら肉を切つて入れ、火が通つてたら芋を投入。最後に山菜を入れて軽く煮立つのを待ち、持つてきた調味料で味をつけて山菜雑炊もどき完成。

できたよ」と、上級生に声をかけてやつとこを鍋を囲んだ時はもう脛を幾分か過ぎた頃。

やつとかよ。という先輩方の視線が周りに比べて具材に彩りがある鍋を見て、何故か俺へとスライド移行してきた。

いや。あく抜きの時間はあつたからえぐみは無いよ?

あれ? そう考えるとこれつてある意味坊ちゃんとの共同成果?

第三十七話 見られていた

先輩たちは緑鮮やかな雑炊に躊躇いがちに口をつけていたが、途中からがつつくがつつく。一年が食事を作るまで上級生はずっとゲリラ戦もどきを強いられ、出来た班から終了していたらしく、なんかもう申し訳ない程がつつかれてしまつて俺はひたすら給仕に徹した。

差し出された椀にすぐつては入れすぐつては入れ、何気に差し出された坊ちゃんの椀にも入れ ええ！？

思わず一度見しそうになり、慌てて何でもないふりして返したが、危なかった。

なにしてくれるんだ？ こいつは。
めちゃくちゃ吹き出しそうになつたじやないか。

あ～もーこいつ、いい根性してるよ。俺よりよっぽど太いよ。
将来大物になるんじやね？ だって他の班ではグロッキー状態で
食えない奴がちらほらいるんだよ？

かくいう俺も初回はのーさんきゅー状態でへたばつた。

笑いを噛み殺しながら必死で給仕に徹して、片づけをする頃には疲れ果ててしまった。

ただ幸いにも、食事の後は二年から上の集団戦闘訓練が始まられ、一年は総じて見学態勢に入つたので疲れ果てたところで支障は無かつたが。

一年が陣取たのは、指揮官がいる四年の天幕近く。

本来は天幕内で指示するのかなと思うが、見せるという目的の為

か外で指揮を執っている。

精悍な顔つきをした赤髪の兄ちゃんは魔術師というより格闘家という感じで、今をときめく細マッチョ。指揮してるよりも前に居る方が似合いそうな風情なのに、淡々と傍の参謀役と言葉を交わす姿はかなりの違和感だ。

そしてもう一つ。通信機器もないのに会話が成立しているのも違和感。

不思議でもなんでもないのは分かるが、視界からの認識情報は影響が強い。

無線もなしに伝達が成立するとか、そりや重宝されると納得してしまう。通信可能圏域がどの程度あるのか知らないが、傍受されない伝達手段であれば、命令する側としてはかなり有り難いだろう。

ここに居るのは一年と指揮を取る四年の一人と教師が一人。

森には複数の教師が入り、それを相手取っているというのを、その教師が図説しながら一年に状況解説している。

当然四年に教師の解説は聞こえないようになされているが、四年の指示はこちらに分かるようにされ、それを見て学び取れるものを学び取れという状況が出来上がっている。

それは興味ないのでいいとして、さつきから気になるのが図説に表示されている敵を示す赤と学生を示す青の点。点が動いているので、動きをトレースして表示していると思われるが、どうにもその見た目で戦闘ショミュレーションのゲームのよつな錯覚に陥りそうになる。

タクティクス

戦術系のゲームをやつたのは、もう随分と昔の話になるが俺はこの手のものとはどうも相性が悪い。兵站やら補給線やら武器に物資に、金に情報、駆け引き策略騙し合ひ。何でゲームでそこまで考え

「まにやならないのか……

男なら真向勝負だろ！

といつのは、単なる負け惜しみ。攻略サイト見て、よつよつ出来る脳みそしか持っていない俺にははなから向かないといつだけとう悲しい現実しかるのが事実。

作った人間の脳みそも理解出来ないが、攻略サイトに情報載せる人間の脳みそもどうなつてているんだろうか？ と友人に言つたら、お前の脳みそがどうなつてているんだと聞い返されたのはいい思い出だ。

友人曰く、あんなものはパターンで何度もやれば子供でも出来るとの事。

……俺、何回やつても出来なかつたんだけど。

苦い思い出に浸つていると、敵役の教師を示す赤と学生を示す青の点がせわしなく動き始めた。

わつこやぢづやつて青と赤の点を表示していんんだりつへ。

図説に使つてゐる紙はじく普通のものに見える。とすると、魔術で位置を特定して表示いると想像するのが普通だが、そんな魔術があつたらこの戦闘訓練そのものが意味をなさなくなる気がする。

一定の条件でこういつ事も出来るといつ事か？ あ、発信機みたいなものか。

んー……でもそつするとその発信機の信号を敵側がキャッチしたら作戦も何も無くなるのか？ 妨害電波？ つて考えても分かる事じやないな。

徐々に赤を青が囲み始める。

学生も敵役の教師も、さすがに居場所は分からぬ状況でやつて
いふと思われるが、偶に見えていふとしか思えないような動きをする
時があるので怖い。戦闘の音も聞こえはじめて一年は緊張した
顔になり俺は

寝落ちしてた。

目が冴えてしまった。

夕方までばっちり寝てたから当然といえば当然だが、見張りに立たない時は本当に何もすることが無い。長い夜が暇なのもさる事ながら、ここで寝ておかないと明日がしんどくなる。

何とか眠らうと寝返りをうしおり返りをうしおり

あ……まづ……

俺はそつとテントから抜け出して、見張りの田を盗んでいそいで森に入った。

月明かりは木々に遮られ、昼間とはつりて変わりのつべりとした闇に塗りつぶされたその姿は、よつやかに氣を抜き近くの木に手をついて

「お前抜け出して何してんねん」

！？

背後からの声に驚いて見れば、僅かな月光の下に青年の姿があつた。

「毎間も寝とつて叱られて、見つかつたらまた

いつもの説教が始まると思こや、青年はやおら俺の肩を掴んだかと思ひと無理やり座らせた。

あ、ちゅ……今は……

抵抗する事も出来ず、俺はえずいた。

何度も何度も、止める事が出来ずにえずいた。

血の気が失せた身体に、背中をさする青年の手だけが暖かい。

「……何て顔してる。辛かつたなつまよと言え。毎間も夜も、飯食べれへんほど辛かつたなら休むぐらこそせせて貰えるや。無駄に平気なふりするな」

「なんで……」

「お前のところは具が他と違つてたから立つてたんや。お前ずっと入れるだけしどつて、ほとんど食つてなかつたや。言わんからそじまで辛こと思わんかつただろ？が、この阿呆が」

ため息交じりに呟かれたが、俺に返す余裕はなかつた。

第三十八話 真っ白

まだ、だめなんだねえ……

この世のすべてを拒絶するかのよつたの身体の反応に苦笑したいが、苦笑する事すら許してくれない。

帰つてこーい、俺の身体の主導権ー

空っぽの胃の中から何かを吐き出してしまおうともがく身体の主導権は、俺から離れるばかり。

手繰り寄せようにも脳間に張つていた煙幕無駄な考え方まがいの回想が出来ない。

うーん。ちょっと想定外……

ぼやけた視界
失われる熱
青を染める赤
遠のく囁き

ただ一つ、鉄さびの匂いが、その記憶を呼び覚まし、思考と身体を縛る。

俺の精神、予想以上に細いな！

いやあわかつてたんだけどねえ。

おやつさんにもそう簡単にはいかないだらうって言われちゃつて
るし。

「おい……お前、ほんまに大丈夫なんか？」

いや無理。意識と感覚がある時点に固定されかかつていい。こう
なつたら丸一日再起不能で脱却するのに一週間はかかる。野戦が終
わるまでは保つと思つたが、一度こうなつてしまふと…………ああ
くや。気を抜いたのはまずつた。ほんとに想定外だよ。ここまでな
ると思わなかつたよ。

「捌いたのが原因とかやつんか？」

青年の声も遠くて聞こえずらい。耳鳴り酷いし、電波ちゃんが騒
いでののか雑音煩い。

胃は痙攣しつぱなしで身体の感覚ははるか彼方。もの考えるのも、
内容が全部あの時に繋がりそうになつてドツボにはまりそうだ。
いつそ全部手放して果ててしまいたいが、このままえずいていた
ら人のいい青年が困り果てるだろ？

「いつなつたら青年に手伝つてもいいつか？」

「おこ、聽こえとるか？ お前ほんまに酷いだつ。」

「んだ……と？ ひとの顔を……」

「誰が造作の事言つてん。土氣色の顔しても巫山戯る余裕はあるんか」

いや、ないです。ごめんなさい。試してみただけです。手を止められると辛かつたりするのが本音です。だから止めないで、お願ひほんと。

生理的な涙浮かべて小さく首を振れば、呆れた顔された。でも背中さすりを再開してくれたので文句なし。その勢いで、も一つ頼んでみよ。

「……なあ」

「なんや？」

「なんか……話……を」

なんでもこいから話ををしてほし。

「は？」

「なん……でもいい……かひ」

「なんでもつて……」

「……たのむ」

「……」

そんなイキナリ話せつて言われても、何で、何を話しゃいいんだと言い返したいのは分かる。でも本当に何でもいいから話してくれたらそれでいい。

少しでも逸らす事が出来ればたぶん、持ち直せる。

「そんな……いきなり言われてもな」

「…………」

「……話なあ…………お前、俺の名前憶えてるか?」

「…………」

「」の沈黙はあれば、憶えてないわナジやなべて、しゃべる余裕がないからだ。

「憶えて無いやう」

「いや、ほりよく見て? しゃべれそうにないでしょ? 憶えてない訳じやないよ? 」のままで絡まれて青年の名前を憶えてない訳ないから。

「ヘライ・ハンディクス」

あへしゃべれてたら先に言つたの?」

「お前はやつぱつ反応せえへんのやな……聞いてないだけかとも思てたがそつでもないし。知らんだけか?」

青年は俺の反応を確かめるよつてひりを見るが、俺はほとんど頭真つ白な状態なので何が言いたいのか分からず、視線を返すしか出来なかつた。

「ハンディクスと聞けば、貴族なら大抵避ける。口を利くつせん。同期の奴らだけじゃなくて、先輩うりもなつやつたやう?」

自嘲氣味に笑つて青年は俺から視線を外した。

「ハンドークスは裏切り者の代名詞や」

裏切り者？

「それなのにお前は声かけても平氣で返してくるわ、口喧嘩はするわ……なんやいつの間にか俺もお前の同類にされて……」

よくわからんが、そこで残念そうな複雑そうな顔されたら腹が立つんだが。

「ハンドークスは、四代前までは侯爵家やつた。北の国境を守る要。セントバルナ開国以来の鉄壁侯。何度も侵略から国を守つた英雄の一族」

決まり文句をなぞる様に口にする青年。

公の場に出る機会の無い俺には馴染みが無くて今一ピンとこないが、侯爵と言つたらかなりのお偉いさん。ざつぱな記憶にあるイメージでは伯爵が地方領主で、侯爵は辺境領主。侯爵は国境警備の意味があり一般的な領主よりも広大な土地を与えられ、一定の独自権限が与えられていた……と思つ。

「俺の一族はそれを誇りとしてこの国を守り抜いてきた。

四代前、俺の高祖父は歴代当主の中でも義を重んじる高潔な人物やつたと言われとる。戦事も頭が切れて負けなし、おまけに剣の腕はめつぽつ強かつたらしい。国王陛下の覚えもめでたく、ゆくゆくは国防の全てを任されるはずやつた。

けど、その四代前はいきなり国を裏切りよつた。

戦時の最中、北方のグレリウスに内部情報を漏らし領土を奪われる原因を作り、さらにグレリウス側につき当時の魔導師団長を殺して逃げた。

俺の一族はその咎を受け爵位を剥奪され、今でも裏切り者の烙印を押されとる。

……一族全員死刑にされなかつただけでも相当な奇跡やと思つけどな

英雄だ誇りだ言つ割に青年の様子は冷めていた。

「もともとセントバルナは領土が他の国と比べて小さい。それをさらに小さくするような事をした俺の高祖父は裏切り者以上に憎むべき相手なんや。そんな事したハンドークスの人間も忌むべき相手。せやから、俺を相手にしたいと思わんのが普通や。その顔は、知らんかったつて顔やな」

確かに、俺は貴族の事情とこりものには興味が無い。

俺の小さな頭では自分のとこの家族の事を考えるだけで、他まで回す余裕は無かった。

「今では食つていぐのも大変つちゅう落ちぶれ具合や。今さら俺が足搔いたところでどうなるもんでもないんやけどな、それでも夢見な生きてかれん者もおる。せいぜい小銭稼げるようぐらにはならなあかんのやけど…………『うや、俺と口利くのが嫌になつたか?』

顔をいりひに向けず尋ねる青年。

その横顔は無表情で、若者が とこりよつ、青年が見せるものとしては冷たすぎた。

俺はまだ多少痙攣している體のあたりを掴み、力を込めた。

「なぜだ?」

「なぜつて……俺なんかと一緒にあつたら何を言われるか分からんのやで?」

「それは俺にしてみても同じだろ?」

「いや……お前と俺と同じや言われども内容がちやうやう」

「批判対象という事に変わりはない。今更内容が増えようが減るつがどうでもいい。そもそもそんな事を気にした事は無い」

「…………お前、強いな」

そうじやないと俺は首を横に振る。

俺の場合はそちらに意識を向ける余裕が無いだけで、その事自体をちゃんと受けとめて考えていないだけだ。それに俺には前世の記憶がある。しんどかつた事や、嫌になつた事、辛かつた事を覚えているから、それを軸に立ち回る事も出来る。

でも青年の場合はそつじやない。正真正銘まつさりで、受けの全てが刻まれる。

例え身体の年齢が近いとしても、そう見られるとしても、これはない。自分がしんどいからと云つて、こんな話をさせて、こんな顔させて……

「すまない」

頭を下げる俺の背から、手が離される。俺は仄かな月光に浮かんだ、少しだけ揺れる瑠璃色の瞳を正面から見据えた。

真面目に俺の事を心配して、嫌な過去だらつ事まで話した青年に、だから俺も真面目に返す。

「俺は強くない。だから青年を名前で呼ぶ事も出来ない」「……え？」

青年だけじゃない。少年も、坊ちゃんも、皇女も、同期も先輩も、みんな、呼べない。

「青年は強いよ。俺なんか比べ物にならぬぐらー」

その若さで苦境に立たされながらも家族を支えようとしている。
俺は……田を逸らして逃げているだけだ。どうしていいのかも分
からず、留まるべきではないと思いながら、一人生きていくことを
恐れて立ち止まっている。

比べるのもおじがましい。

ぐつと足に力を入れ、主導権を取り戻す。
何も出来なかつたあの時から、自由に動かせないの身体へと感覚
を取り戻す。

ふりつきながら立ち上がつた俺を、青年はすかさず支えた。

ほんと……この青年は……

「青年は認められるだらうな」

「は？」

訳が分からぬといふ顔。その素直な反応を、なんだかずつと見
ていていたいと思つてしまつ。

「なあ、ここを出たらどこのへ行くんだ？」

「そりや魔導師団員になればとは思てるけど……そないに簡単に
は」

「なりグラムに宜しく」

「は？」

「あいつは面白いよ？」

「面白いとかそういう事やなくて、なれるかわからん言つてんねん」

「なれるなれる」

ぱしそじ青年の肩を叩くと、軽く頭を叩かれた。

「どうからそないに」氣楽な発想が出てくるとやお前は。わつわつめでこの世の終わりみたいな顔してたくせに…………もつえんか？」

「へいきへいき。青年のぶつちやけ話でどうか吹っ飛んだわ」

「ぶつちやけ話で……そこまで軽く言われたら俺の立場無いわ

「そりやすまん」

「すまんて思てないやの」

「あはは」

「笑うとこが。じつちは真面目に話したの」

「うん。助かった。ありがと」

「いや……別に礼なんか……」

やつぱり青年は視線を泳がせて向と返答していくのか分からぬ様子。微笑ましい。

あー「せにせが……」「せにせが隠しきれない……

「氣色悪い」

やつぱり標準語。今度はしつかり殴られた。

第四十話 監視者

「覗きとは、あんまり趣味がよくないね」

生まれた殺氣に、僕はゆっくりと振り向いた。

互いに視認するのも難しい距離。けれど闇に慣れきった眼は、はつきりと療養室の女性を映した。

それはあちらも同じで、宿营地に戻つて行った一人の方向を見てから、僕へと視線を移し微笑んでいる。

「そんなにあの弟痴が気になるのかい？」『白の宝玉』

彼女にその名を呼ばれるのは皮肉としか思えず、唇が歪む。

「まさかあの『白の宝玉』がこんな子供だったとはね。驚きだ」「流石は竜殺し。それとも『白の兎』とお呼びした方が良いでしょうか。

調べたのは長老達ですか？」

「……お前、私達の事を」

「あなた方と争うつもりはありません」

「よく言つ。方々の国を荒らしておいて」

流れた噂を寄せ集めればそつなうだう。反論する材料は僕の手中には無い。それに結果から見ればその噂も間違いではないから、反論する気も無い。

「カルマをどうやって齎したんだい？」

「何も。彼には何も話していません」

「それを信用するとでも？」

「お好きなよつて」

ふうんと黙つて腰に履いた剣を抜き放つ噂に名高い最強の女傭兵、竜殺し。

放たれる殺氣も重く鋭く、慣れた僕でも肌を刺す感覚に緊張する。

「あの弟君は、お仲間かい？」

「いいえ。ここで初めて会いました。

僕よりもあなたの方が気にされているようですが？」 こんな所まで監視をして

「生憎、今の監視対象は弟君じゃない」

竜殺しは口の端を吊り上げ、僕の首に剣をあてた。

「目的は？」

「あなたにお話しそうつもりはありません」

「この状況でそれが通ると思つていいのかい？」

「どうでしようか……世の中、知らない方がいいという事もあると僕は思いますが」

「なるほどね。そういう事もあるかもしね。だが、この件についてそれは無いね」

僕は剣に視線を落とし、その上にトンと手を乗せた。

「動くな！」

ピリッと首に痛みが走る。

迷いの無い殺す者の覚悟を持った手は強く、揺るぎもしない剣に苦笑が零れる。

これだけ強い者もいるといつに、どうして自分がこの役目を担つてゐるのか不思議でならない。

「過敏になつてゐるのは、ここが蒼の聖地で炎獄が封印されているからですか？」

「つ……やはり知つていたか！」

剣に込められた力を、今度は押さえる。でなければ首を飛ばされる。

「誤解しないでください。今は炎獄に手を出すつもりはありません『今は』だと？」

さすがに片手では抑えきれず、両手で剣を抑えながらギラギラとした目を向ける竜殺しに首を傾げた。

「あなたも」存知でしょ？ 侵入者の件「キルミヤ・パージョスとレライ・ハンドークスが遭遇したといつ者的事情か」

そう。それ以外にも居たけれど。

「あれはお前を狙つていた。相当しつこくな。他にも何度も動かされたか」

襲撃が少なかつたのは、やはり竜殺しが対処してくれていたからか。

申し訳なかつたなと思つが、ここで頭を下げても彼女には受け入れられないだろうし説明しのうの一点張りだつ。話を続けた方が無難だ。

「僕を狙つてはいますが、彼らの狙いは僕だけではありますん」

というより、狙いは僕であつて僕ではない。

「まさか……炎獄を……そんな筈はない！ あれはばつと弔り続けてきているものだ！」

声を荒げた竜殺しを見て、白の民のあれへの危険性認知は健在だと、少し安堵する。

「そうですね。まだ見つかってはいない。けれど、永遠に見つからないとは限らない」

「何が言いたい」

「侵入者の素性は割れましたか?」

.....

「大変でしょうね。

「すみません。今回一回

寺は賣田を待つて災厄を願はず。

「お前　あがが何か分かつて、いるのだらうな？」

その問いかけに、思わず僕は微笑んでしまった。

「今となつては、誰よりも

知る者は、殺してきたのだから。
望んだ者

「お前…………何者だ」

「ご存知の通り、白の宝玉です」

「それは通り名に過ぎない！」

「そう言われても僕の名前を憶えている者などいませんから、僕も忘れてしました」

「目的は！ 何を理由に争いを引き起こしている！」

「何度も言いますが、あなたに話すつもりはありません」

「いずれ、あなたの妹さんから長老達に伝わると思いますので、その時に聞いてください」

長老達が話してもかまわないと判断すれば、教えてくれるでしょう

「貴様……！」

何が彼女を刺激したのか、込められた力が跳ね上がった。

「！」

寸前で上体を逸らし避けたが、後ろにあつた木は半分近く幹を切られていた。

さすがに……竜殺しは強いですね……

けれど僕も死ぬわけにはいかない。

二度目の斬撃が飛んでくる前にその場を退き、三度目の前に口を開く。

「考えませんでしたか？ 僕が炎獄の事を知っているなら、その封印の場所も知っていると

「つ……！」

「腕の一本や一本とられる事を覚悟すれば、あなた相手でもたどり着きます。封印が何に弱いか、炎獄が何に反応するのか、その様子では知らないという事はないですよね」

ぎつぎつと奥歯を噛みしめる音。

剣を握る手も白く、どれ程の力が入っているのか想像したくもない。

「あなたからしてみれば僕は捨ててはおけない存在だと思います。けれど、僕は本当に争つつもりはありません。もしそうなり、このような話もしていません。

今回はじ迷惑をおかけしたと思っています。妹さんも戻られたので事情を話したらずにここを離れます。それで剣を納めてもらえませんか」

「あれは、妹ではない！」

「……………」分かりました。学院長に僕の目的を話したらすぐにここを離れます。それでいいですか

「……………」

ぎりぎりとした目は変わらないまま、竜殺しは静かに剣を鞘に納めた。

何が逆鱗に触れたのか分からなかつたが、改めて容姿を見れば少しだけ理解出来た。

学院長を務める彼女の妹は白の民そのものの色を持つている。それに対して竜殺しは見事にその色を継いでいない。

まさかこの時代になつてもなお、そんな事に重きを置いているとは思わなかつたから、意外だった。

「一つ、いいですか？」

射殺しそうな 否、射殺す氣の眼が僕を刺す。

「キルミヤ・ページスを監視しているのは何故ですか？」
「貴様に話す事など無い」

「存知ないです……白の民の役目と思われているといったところでしょうか……」

「彼は、何も知りませんよ。白の民が危惧するような事は何も話す事など無いと言つてこる」
「……そうですね。余計な口を挟みました。では、失礼します」

頭を下げる、背を向ける。

背を向けた瞬間殺氣が膨らんだが、物理的に何かが来る事は無かつた。

第四十話 監視者（後書き）

シリアルスが続く
次は、次こそは

第四十一話 新境地？

早朝のひんやりした空気を吸つて伸びを一つ。

ひと眠りして、状態は完全に元に戻つた。

ここまで持ち直せたのは間違いなく青年のおかげだらう。ついでに、腹も括らせてくれた。

あんな若者が必死に足踏ん張つて生きているていうのに、おっさんがじたばたしてたら情けない。

正直どうなるか分かつたもんじやないが、それはそれ。ま一なるよつにしかならない。

考えてもしゃーない事を考えないのは得意だ。

朝餉の用意をしていると、『じゃじゃと坊ちゃんが起きてきた。柔らかそうな金髪に寝癖がついてるのが可愛くて頬がひくつが我慢。坊ちゃんは物凄く不機嫌そうな顔をこひらけに寄越して、すぐに逸らして木々の合間に消えた。

ほづーっと様子を見ていた俺は、ふと閃いた。

あの坊ちゃん、もしかしなくとも末っ子じやないだらうか？
そなならあの態度は……寝癖の『ごとく、かわいい。

上の兄弟たちへの対抗心はあれども、力に差があれば乗り越えるのは難しい。だが、自分を認めさせたい。自分の力を認めて見て欲しい。そんな欲求をどう表現していいのか分からず、他者を威嚇しつぶれる事でしか接觸が出来ない。なんといじらしい。

……別に俺は口リコソでもそつちの趣味があるわけでもない。
本当に。

歳の近い男兄弟だと壮絶な権力争い意地の張り合いになってしま
うが、ある程度離れると『仕方ないな～』『いつは～』って感じにな
つてくる。俺の場合精神年齢はおっさんまで達しているので弟と
いうよりは子供…………子供？

え？ あれ？ ……精神年齢でいけば坊ちゃんが子供つて……
俺いまいくつだ？

変な焦りで無意味に鍋をかき回してみる俺。だが、雑穀がかき回
されて沸騰の対流と合い合わさり複雑な動きをし始め、芸術的なま
でに俺の動搖つぶりを現していた。

一十七で途絶えて、二十七で十七、通算四十……四

……

把握はしていたつもりだが、何となしにしか考えて無かつたので
改めて自覚すると物凄い衝撃だった。

「わー…………四十四で…………四十四で…………嫁なし子なし職な
し四十四で……

いやいや、分かつてる分かつてるよ。十七なんだから、末席貴族
の十七なんだから職ないのも嫁なし子なしのも分かるよ。

でもね、四十四だよ？ たぶん俺の兄弟みんな結婚してんじゃね
？ 可愛い嫁さんもらって子供に囲まれてんじゃね？

あのままあつちで生きてたとしても俺が可愛い嫁さんもらえたと
は言い切れないけどさー。でもなんか想像すると、あの奥手の兄貴
が嫁さん貰つてるとか！ ああー…………駄目だあ…………めでたいと

思つ反面、負けた氣分に……。くつを見とれよ！ 外人顔負けのグラマーねーちゃん捕まえてやる！

いや、冗談だけじ。そんなねーちゃん田の前にしたら緊張して何も話せんと思うけど。

所詮俺はどこへ生まれようと変わらぬチキンくおりてい。嫁さん出来る自信なんて皆無だ

つて考える自分が悲しいな

……。

「…………なんか…………たき火つてあつたかいな…………」

朝つぱらから自爆してしょんぼりしながらたき火に手を翳していふと、坊ちゃんが戻ってきた。

坊ちゃんは何も言わば鍋を見つめだした。

無言で鍋を見つめる一年一人。

まあ、少年や青年の無言の威圧に比べれば平氣なんだけじや。

ちらつと周囲へ視線を向ければ、早朝といつ時間帯で頭がぼんやりしているのが、他の班もせほじ会話は見られない。だが、せほじであつて皆無ではない。ぼそぼそと何がしかの会話をしており、お互に叱られ具合を慰め合つたりしている氣配がある。

視線を戻し見れば、依然鍋を注視している坊ちゃん。見よがみては『腹減つた メシまだ？』に見えないことも無い。

あ、もしや昨日の味付けが気に入らなかつたとか？

持つてきた調味料は限られているので、いつも学食で食べている
ような至極の味は出せないが、それなりに食べれるものではあつた
と思つ。現におかわりもしてくれていたので、アウトでは無かつた
筈だ。

……ひょっとして『俺の方がうまく出来るぜー』的な？

「貸せ

不意に坊ちゃんが口を開いたかと思つと、俺が持つていた杓子を
奪つてかき混ぜ始めた。

え……マジで『俺の方がうまく出来るぜー』なの？…………ひょ
と俺、自信無くすんですけど。

何気に自炊して自画自賛してた自分が痛くなつてくるんですけど
既に傷を負つてる俺にはこれ以上の追撃は辛いんですけど……

「何故、力を隠す？」

「いや全力だよ。この味が俺の全力だよ……」

四十四の限界だよ。それで駄目ならお手上げだ。好きにしてくれ。

「…………違つ。これは……味は……つまりこと思つ」

……へ？

驚いて顔を擧げると、ものすつし複雑そうな顔があつた。

一瞬俺の脳みそはフリーズしかけ、すぐに冷凍解凍。瞬時に導き出したいた推測を再び思考に引き戻す。

……え、と？ 今の、『テレ？ テレっすか？

っ！ テレ入りました――――！

なにこれ！？ すげえ！ おぐわん、生テレだよ！？ しかも予想外の俺様坊ちゃんの生テレ！ やべえはまる！ いやほまらん！ はまるつてやばいだろ俺！ 何考えてんだ！ うわ混乱してる！ そして褒められて微妙にこじばい！

何言つたらいいの俺？ 何したらいいの俺？ わりぱり分からないんですけど！――

昨日はどん底まで落とされて復活した途端に豪華イベントって、何ナノこの状況！ いや豪華って何で俺、コレを豪華だと捉えてるわけ！？ 俺そっちなの！？

若干どじろでなく盛大に慌てふためき興奮しつつ、長年培つてきたポーカーフェイスで「そりゃありがとう」と何とか、返す。

「別に……褒めたわけじゃない」

褒めてるよお！？ 十分褒め言葉だったよ！？ これ、女だったら伸われる男が多いんじゃね！？

やばい。俺の精神が別な意味で削られている。

落ち着け、落ち着くんだ俺。俺に変な趣味はない。何、たかがテレビだ。男のテレビだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786v/>

災厄の種と能天気な転生者

2011年10月11日21時54分発行